

---

# 綺語草子～草子シリーズ3～

空野妃紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

綺語草子〜草子シリーズ3〜

### 【Nコード】

N3118E

### 【作者名】

空野妃紫

### 【あらすじ】

草子シリーズ第三弾。まったく昴摩を無視して、自由に振舞う紅葉は、海の幽霊の愛人は作るは、妻だと名乗る女は現れるはで、とうとう昴摩の我慢も限界に達して、二人は喧嘩を始めてしまう。



## 1 洶洶

### 1 . 洶洶

身も心も冷えていくような冬の海。おもく暗いのは雲だけではなく海もおなじだ。にこった水は荒れ狂って人を恐々とさせる。浜辺は雪にうもれ海の暗さをいつそうひきたてていた。色づいた葉をおとした木々の寂しさは無常の理を教えてくれているかのようだ。

花、木、海、空、星、大地さえも変わらぬものはない。変化をおこしてときのなかに流れていく。

白い浜辺は波がよせまたひいていく。雪にとけるほどの白き狩衣に血のように紅い指貫をまとった美少年は雪に身をあずけている。美少年の耳に声がきこえる。

「愛しい人。憐れむならばどうか一夜の契りをかわそうや」

頬にふれる冷たい女の手に美少年は目蓋をあける。少年の頬も海風のせいで冷たくこごえている。少年は女の瞳をのぞきながらいう。「これ以上はいけない。現の私と夢の君はちがうから」

美少年はそういう。恋焦がれる者を苦しそうな瞳でみつめると女は哀しみながらはなれてきえていく。

「酷なかつた。こんなに私を恋狂わせて、情けもかけてはくれないの」少年はたちあがると海にきえていく女にいう。

「あなたが私にほんとうに恋狂っているというのなら、私の願いはあなたのものだ」

そんな酷なことをいう少年に女は一筋の涙をながしていった。恋する男の願いをきくことがほんとうの恋の形だと少年はいうのだ。

「一夜もくれぬ酷い人。私の心を奪ったままかえってしまうのね。あなたをまつかたのところへ」

美少年は妖しくほほ笑みいう。だれにいったわけでもない。ひとり言のようにいった。

「私は欲ばりだから」



海にきえる女は哀しい目をしたままそれでもその瞳に少年への愛おしさをつのらせる。海にきえた女は去りゆく少年の心にすこしでものこるように言葉をのこす。

「雪をみておもいだして、せめてもの哀れみをちょうだい。愛おしい紅葉」

女がきえた海に背をむけ紅葉は歩みはじめ。葉をなくした木の影に鬼がかくれていた。鬼はあらわれると不服そうにいった。

「鬼女きじょあいてに戯れすぎだろう」

鬼は拗ねているのだろう紅葉の目をみようとはしない。いや、さんざんあの鬼女との情事をみていた。

「だれが戯れときめた？ 私は私なりに本気だったかもしれないだろう？ 昴摩」

「けっ、悪趣味」

紅葉の言葉に昴摩はそういうと悪たれた顔をしてさっっていく。

紅葉はそんな昴摩の背中をみながらくすくすわらった。まったくなにをしても形になる者、なにをさせてもそつのない者、それが紅葉だ。

（ふん、恋心もしらないくせに）

昴摩はおもいながらどんどんすすんでく。こんな逢引現場などにながながといたくはない。紅葉自身は恋に焦がれることはないというのに、他の者を恋焦がしては自分の虜にしてしまう。被害者はこの国中にいるのだ。そして、それは昴摩もおなじこと。

恋もしらぬ紅葉に恋知り鳥の教えを叩きこんでやりたい。昴摩の心には今日もかわらず恋風がふいているのだった。

昴摩は鬼女の嘆きのような海風に耳をすませる。この鬼女はもともと高貴な血筋の女だった。身分ちがいの恋をしてその男と駆け落ちをし、この海に身をなげたのだ。二人は海にのみこまれた。しかし、男は浜にうちあげられ助かり他の女と結婚してしまった。

死して彼女はとなりにながいないことを嘆きさがしまわった。そして、他の女と結婚してしまっていることをしり、その女と男を殺し



た。しかし、女の怨念はきえることなく怨念にとりつかれて鬼女となってしまうのだ。

鬼女になり果て、海にあらわれる男と契りをかわしては腑抜けにしまっていた。若い働き手を次々に腑抜けにされた年老いた漁師たちはこまりはて紅葉に依頼してきたのだ。あの鬼女をなんとかしてほしいと。

昴摩は漁師の依頼できたこの海をさっさとさりたかった。そして、いそぐように今度の依頼へとむかう。仕事がつまっているのだ。

どうしてわざわざ紅葉がでむいているかというと菜稚琉に三つの決まりごとをいいわたされたせいだ。

一つ目は、朝夕に経を読むこと。

二つ目は、体術の稽古を怠らないこと。

三つ目は、仕事はすべて自分でかたづけること。

二つ目は仕事があるときには免除される。

どうして、おとなしく紅葉がいつけを守っているかという決まりごとを破った場合、そく螢蘭が紅葉を菜稚琉たちの屋敷につれもどし、いっさい自由のない修行、また修行、またまた修行の日々をおくらせることになっているからだ。

つまり、あの紅葉ともあろう者が脅しに屈したということだ。螢蘭たちがあらわれて昴摩はいままでみたことのない紅葉をする。紅葉とならぶ者はいても紅葉のうえにたつ者がいるとはおもわなかった。しかも、ふたりもだ。

都の屋敷に紅葉たちはきていた。疫病送えきびよおくの儀式のため鴨川をくだること七回。さすがの紅葉もすこし疲れ気味である。ここずっと仕事がつづいていて働きっぱなしなのだ。そこにこの奇妙な仕事。

「やっと休める」

紅葉はそうつぶやくとだらしなく横になる。この厄病送りの仕事がかたづいたのだ。二ヵ月つづいていた仕事も終焉を迎えたことになる。次の依頼がこないかぎりもう仕事はない。つまりこの疫病送



りが成功すれば、完全な完璧な休みだ。

三つ目の決まりごとに仕事をこたわってはいけないということもふくまれており昴摩がみたこともないほど紅葉は働きつめている。素直に感心するとともにおどろいていた。ここまで働けるやつだとはおもっていなかったのだ。それとも、紅葉をここまでかりたてるほど修行は厳しいのだろうか。

眠そうにだらけている紅葉に布をかけると昴摩は紅葉をだきあげる。つめたい板のうえでよこになってしまった紅葉を畳みのうえに運んだ。

「うーん、夕方になったらおこしてくれ。おきておつとめするから・・・」

紅葉はそれだけをいいのこしてあつというまに眠りについてしまう。返事すらきかずにふかくねむってしまう紅葉をみているところまでしなればいけないのか、とおもう。

「紅葉、紅葉。おきろよ。日がかたむいてるぞ」

紅葉は昴摩におこされてなんとか夕方に目をさますと掛軸だけがある部屋で夕方の経をあげる。経は朝般若心経だけなのだが、毎日二回しようとおもうと大変なものだ。しあKし、いちばん大変なのは昴摩だろう。このかん昴摩は耳をふさぎ、なるべく声のきこえてこないようにその部屋にはちがつかない。

ここに滞在する予定は半月。一五日だ。ここでの仕事はいちおうおわってはいるが、疫病がひろがっているのは都のまわりばかりだ。そのことは政治におおきな影響をあたえる。

帝の政治がただしくないと流行り病や地震、洪水などの天災がおこるとされている。また、天災や疫病も帝がおさえなければならぬ。天災と政治は切っても切れない関係なのである。ゆえに猶予をもって仕事にあたることになっているのだ。そう、依頼主は帝。

帝は都のまわりをかこうようにはやった今回の病をひどくきにかけて紅葉にしばらく都にとどまるようにおっしゃったのだ。紅葉は半月ならその申し出をうけた。



生野の屋敷には柏と円融が留守をあずかっている。なぜか屋敷の境界をやぶって鬼族の王子が連日おしかけてくるので貴重品がおおいあの屋敷をあけっぱなしにしておくことができないのだ。

不意ながら妖かしの知り合いがふえたこともあり紅葉はもう屋敷に強力な結界をはることはなくなった。いちおう柏の意見をとりにれて簡単な程度のひくい結界ははってあるが、その負担はぜんぜんちがう。

深々と雪がつもりまだまだ朝日もあびずあたりは身もこごるほどの冷気が支配している。しかし、紅葉の屋敷のまわりには朝はやいにもかかわらず、人々がむらがっていた。表の門を身分が高い者たちが裏の堀には身分の低い者たちがかこんでいるのだ。

ここ連日、朝と夕方にはあたりまえのようにくりかえされる風景。人々は紅葉の経のご利益にあやかろうとしているのだ。昴摩が表にでてきてにらみを利かしても人々はまったく恐れることなくそのありがたい経がはじまるのをまっている。

厳肅な朝の雰囲気のなか、これまた厳肅な紅葉の声がひびきはじめる。歌のような般若心経の経があたりを支配する。きく者の耳には天女が歌っているかのようにまた神が世を慈しみ慈悲を注ぐようにきこえる。

ある者はふかぶかと目をとじ神妙な顔つきでききいる者。またある者は病痾びょうあや世情の苦しみから解放された顔をしてききいる者。涙をながし手と手をあわせて拝みながらききいつている者までいる。

そんななかゆいっ真っ青な顔をして苦痛のあまり眉がより皺ができていまにもたおれそうな者がひとり。人々には至幸の歌も妖かしには斬獲の歌にきこえる。耳栓をしているにもかかわらずこの威力。まじかできけば即死してしまうかもしれない。

呪即説呪曰羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶般若心経

経がやみ、がらがらと戸があく。そこからあらわれたのは世にも稀な美しさをもった少年。どんなめぐまれた才子佳人であろうとこの



美しさをあらわせるものはいないだろう。

「まったく、もっと遠くに逃げればいいものを」

紅葉はそういつて苦しんでいる昴摩に声をかける。そんな少年の姿を見物人たちは釘いるようにみていた。もうひとつうまれた迷信それは紅葉の姿をみた者は寿命がのびるということ。

経がおわると外にいる昴摩をよぶためこうして戸をあけて紅葉が登場する。そのため身分の高い者たちはこぞつてこの表門の席をとりあうのだ。一年でも一刻でも寿命をのばしたいがために。

昴摩はおぼつかない足取りでよろよると部屋にはいつていく。半刻ほどおとなしくしていれば回復する。紅葉はあつまっている者たちをいっさい無視して戸をしめてなかにはいる。みられることは慣れているのだ。

紅葉の御姿をみた者たちはしばしその場にとどまり強烈な余韻に縛られることになる。

紅葉はさむさに豊楽院をよこぎり内裏にむかっていた。夕の読経はぜひ内裏であげるようにとの帝からの言葉に紅葉はそれにしたがう。はじめはいくまでが寒いのとわざわざ人の目にふれてしたくないので断ったのだが、かえってきた返事が「依頼する」といわれたので受けるしかない。

お願いはことわれても依頼はことわれない。菜稚琉との約束だった。多少の選択権は紅葉にあるが、無理な状態のみの依頼だけだ。できる範囲の依頼はうけなければならない。

「うっ、さむい」

紅葉はかじかむ手をあわせて息をかけては手をすりすりとおわせる。しかし、いっこうに手はあたたまらない。束帯よりも唐衣のほうがあたたかいとおもいきってきたが、どんなにきこんでも寒いものは寒い。

「紅葉殿」

そういつて声をかけてきたのは楽護だ。楽護は都の吉凶をすくつ



たということ。従八位上右兵衛府兵衛少志から従五位上右兵衛府兵衛佐に飛躍的な出世をはたしたのだ。

「楽護殿このたびの出世はなしにきいていますよ。おめでとうございます」

あいかわらずの山男のような顔をしている。内裏の門のまえでまっ  
ていてくれたようだ。寒空のなか大変だなとおもいながら紅葉は会  
釈をする。そんな紅葉に礼をのべると楽護はつづけていった。

「今日は女子おなこの姿なんですね」

楽護の言葉につこりと愛想笑いをうかべながら紅葉は「さむい  
からな」といった。そして、従者のようにずつついてきていた昴  
摩にいう。

「昴摩どうする？きいていくか？」

それがどんな苦痛をうむのかわかっていて紅葉はからかうように  
いった。「女の格好で経を読みになくな」とさんざんもめたあとで  
ある。昴摩は苦渋の表情をうかべながら返事をかえした。

「すぐそばにいる」

そういう昴摩の耳にはしっかり耳栓がされているのを紅葉はきづ  
いている。そのせいですこし反応がおそいのだ。でも、会話は相手  
の口のうごきをよんでいるようで問題はない。

「では、どうぞ。みなさまおまちです」

楽護の言葉に門があく。紅葉はその風景におどろいた。というか  
あきれた。

（このくそさむいのにこんなところで・・・）

紫宸殿正面に座した帝と皇后、その両脇にはうまれたばかりの東  
宮、その母。紫宸殿の広場には五列に並んだ身分の高い者たちが座  
している。殿方だけではなく女人の姿もある。

「さあ、紅葉殿。あちらへ」

楽護がさした場所は広間の中央に用意された畳だ。二枚の畳のう  
えにはわざわざ座布団があつたが、かんぜんな外である。真冬の夕  
方に外でこのようなこと。



（はあ）

心のなかで溜息をつくど仕事だからといいきかせる。紅葉はわざわざ用意された仰々しい席につく。

（さあ、やりますか）

紅葉は掌をあわせるとゆっくりと目蓋をとじる。そして、ふかく祈りにはいった。神経を集中させると無音の世界をつくりだす。そして、なにかに弾かれたように経をはつする。

観自在菩薩行深般若波羅蜜多

紅葉の凜とした声がひびきわたる。門のそとにいる昴摩は耳栓された耳のうえから自分の手でさらに音の侵入を阻止しようとするが、念のこもった声はそれでも頭に響く。ずきずき、ずきずきと。

時見照五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不増不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色声香味触法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多

故心無& amp; ;#32611;礙無& amp; ;#32611;礙

故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅蜜多

故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多

是大神呪是大明呪は無上呪は無等等呪能除一切苦真實不虛故説般若波羅蜜多

呪即説呪曰羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶

（あとすこし・・・）

昴摩はガンガンひびく経の音にたえながら紅葉が最後の言葉をいうのをまつた。体中へんな汗がでていて体がひえていく。いつきいても生きた心地がしない。

般若心経

紅葉は語尾の余韻をのこしながらそつと目蓋をあける。すつと集中力をとくと読経中は感じなかった寒さがどつとおしよせてくる。  
（さむい）



しーんと静まりかえった清涼な雰囲氣に人々はひたっている。紅葉はさむさに負けてその雰囲氣に水をさした。さつさとかえって火桶のまえに陣取り、菜稚琉からもらったお茶をすすりながら体をあたためたい。

紅葉は手をそろえて頭をさげると帝にいう。帰るために挨拶をするのだ。形だけ。

「この寒空のなか帝の御身に大事あればいけませんのでこれでおいとまさせていただきます」

「清涼で心あらわれる経であつた」

帝は労いの言葉をかける。紅葉は頭をあげると「昴摩」とよぶ。すると空からふってきたかのように昴摩がおりてきて、紅葉のよこにたつた。すこし、よろけているのは目をつぶってやってほしい。

「ありがたきしあわせ」

紅葉はそういつて微笑をうかべる。そんな紅葉を昴摩は抱えあげると空へときえていった。昴摩は紅葉の体がひえて震えているのにきづいている。はやく温めてやらないと。

「ああ、気持ちいい」

沐浴につかりながら紅葉は体を温める。温泉ではないが芯まであたたまる感じは極上の幸せをかんじさせる。しかし、不快なのは肌にはりつく湯帷子（ゆかたびら入浴のときにきる浴衣）だ。

「なあ、これ脱いではだめか？」

紅葉は湯につかりながらいった。昴摩は紅葉の髪をとかしてきれいに洗っている。柏がないいまは紅葉の身のまわりの世話をするのは昴摩の仕事だ。

「やめてくれ」

昴摩はきまずそうな困惑した顔でいう。いまでさえ湯帷子がびつたりと肩について体の形がよくわかるのに。

紅葉は納得いかないとぶうと頬をふくらませたが、しかたないかとおもいなおす。おいつめてあつぷ、あつぷしている昴摩をみるのも楽しいが、多少の譲歩もしないといけない。飴と鞭は大切であ



る。

昂摩に頼むから湯帷子をきてくれと懇願されしづぶきてはいるが、やはり素肌で風呂にはいったほうが気持ちいい。本来、入浴は僧や身分の高い者が身を清めるためにはいるのだが、紅葉にとって是一日の疲れをとる癒しの時間だ。

「昂摩、肩ももんで」

「はい、はい」

昂摩はきれいに整った髪に満足するとわがままな紅葉のために肩に手をかけてほぐしていく。

「ああ、きもちいい」

油断しきった紅葉の声に満足しながらせつせ、せつせと昂摩は奉仕していく。こうしてこの日はすぎていった。いたって平穏な一日であった。

都に滞在してはや二週間。紅葉の朝夕の経は都の名物になりつつある。人から人へと噂が噂を呼び、都以外からも人々があつまりちよつとした観光名所のひとつのようになっていく。

そして、都のもうひとつの噂は紅葉の性別のことだ。紅葉の気分によって美少年だったり美少女だったりしているおかげでほんとうはどちらなのかというのが都の人たちの注目するところだった。

「昨夜の宿直では紅葉殿が男か女かで話題になりましたよ」

楽護は勤めの合間に紅葉のもとへ遊びにきていた。紅葉の恐ろしいという印象は和らいでいるもののやはりそれでもあまりちかづきがたい印象はそのままのこっている。

「それで、真相をききにこさせられたというわけですね」

いま紅葉は少年の姿をしている。直衣をきこんだ姿はご婦人がおもわず頬を染めて顔を隠すのも忘れてしまうほどだ。実際、男女とはず紅葉にはたくさんさんの文がとどいている。とうぜんのように昂摩の手によって握りつぶされているが。

「私も純粹に興味がありますからね。で、どちらなんです？」



「どちらがよろしいですか？」

紅葉はふふふと蠱惑的にわらうとはぶらかす。紅葉にとってはどちらでもいいが、菜稚琉や螢蘭が正体をあかすのはよくないといっていたので性別だけではなく一切が不明なようにふるまっている。

「うーん、昴摩殿が好いてらっしゃるということは女子だともっているのだが。しかし、うーん」

「昴摩は男色かもしれませんよ？」

紅葉は混乱させるようなことをいう。楽護はその言葉にかんがえこんでしまった。

「実際、恋文のなかには男子であつてもかまわないという内容の文もとどいてますし」

「ええ！！そなんですか？！」

楽護は面食らったような声をだしておどろく。紅葉は楽しそうにわらうと「ほんとうです」という。

「まあ、昴摩が握りつぶしているので宛名まではたどりついてませんが」

昴摩はここにはいない。都のまわりの疫病がおさまっているか走りまわって調査しているところだ。あれから二週間たっている。おさまったかどうかみるにはちょうどいいころである。

「わあっ」

とつぜん紅葉が奇声をはった。紅葉を背後から抱きすくめるように腕をまわして、耳元に鼻をおしつけている黒髪の鬼がいた。楽護はとつぜんあらわれた鬼に反射的に戦闘体勢にはいる。刀の柄に手をあてて「何者っ」と叫んだ。

楽護の『命楽<sup>めいらく</sup>』は親友の宗次が最後にのこしてくれた太刀だ。紅葉との面識がよいことや、この鬼を杀れる太刀があることから楽護は天皇の信をえていた。このことも楽護の出世におおきく影響したのだらう。いまでは昇殿までゆるされている。

「黒鬼妖王またあなたですか」

紅葉はそういつてあきれた顔をしている。紅葉自身がまったく



いつていいほど無抵抗なので楽護は戸惑いの視線をむけた。そんな楽護に紅葉はいう。

「昴摩の父ですよ」

その言葉に楽護は紅葉に抱きついてしている黒鬼をみつめた。たしかに昴摩に似ている。

「ああ、今日もいい匂いしてるな」

「変態ですか」

首筋をくんくんかいている黒鬼妖王に紅葉は冷たくいいはなつ。

そんな紅葉にさらにしがみつくと黒鬼妖王はじゃれつくように頬をすりよせる。

「昴摩がみたら殺されますよ」

紅葉の言葉をきにすることなく黒鬼妖王はしたい放題だ。紅葉も無駄な労力をつかいたくないのか無抵抗でされるがままになっている。完全に楽護を無視している。しかたなく、楽護は帰ることにした。

「では、仲間には謎ということではなしをしておきますよ」

それだけいつて楽護はかえっていった。それといれちがうように昴摩がかえってきた。紅葉と黒鬼妖王の姿に奇声をはつする。

（ああ、昴摩殿が帰ってこられたな）

その奇声に昴摩がかえってきたことを勘づくと楽護はおかしそうにわらって勤めにもどっていった。

「仕事はどうしたんだよ」

両側にふたつのこぶをつくっている黒鬼妖王に昴摩は怒りをうかべながらいった。鬼の角というより熊の耳のようになってる。

「万年さぼっているおまえに仕事のことをいわれたくないなあ」

黒鬼妖王はここ十数年まったく夜叉としての勤めをはたしていない息子にいった。そんな黒鬼妖王に紅葉は五通の手紙をさしだす。

「おお、紅葉！私のことをこんなに」

「ちがいます」

なにをかんちがいしているのか、両手をつかんで頬にすりすり



すりよせている黒鬼妖王に紅葉は冷たい声でいう。

「かえしておいてください」

黒鬼妖王の息子たちからの恋文を紅葉は冷たくつきかえす。黒鬼妖王はおもしろそうに封すらあいた気配のない手紙をつけとるとペラペラとひらいていく。

「あいつらどんなことかいてるんだ」

好奇心まるだしの目で文章をおっている。紅葉はしんそこ迷惑そうに黒鬼妖王にいった。

「あなたがろくでもないことを宣言するから私はすこぶる迷惑です」  
「まあ、こんな文じゃ、きゅん、きゅん、しないわな」

黒鬼妖王は息子たちの恋文をよみおえると感想をのべる。昴摩は困惑の目で二人の会話をきいていた。まったく内容がつかめない。  
「紅葉の保護者には承諾済みだぞ。俺も参戦したいくらいなんだがなあ」

「じゅうぶん参戦しているではありませんか。夜な夜な口説きにくるのはやめてもらえませんか？」

「はっはっはっ、こんなに美しいものはそうそういないからな。つい手をだしてしまう」

黒鬼妖王はそういつて自然なながれで紅葉の肩をだく。しかも、甘い仕草で紅葉の頭に顔をうずめたりもする。

「ちよつとまで」

昴摩がそんな二人にいった。瞳には怒りと困惑がうずまいている。しらない事実ばかりがさつきからぽん、ぽん、とでてきている。

「どういうことだ？」

昴摩のけんけんした声をきき、黒鬼妖王と紅葉は昴摩がなにもしらないことをおもいだす。昴摩が握りつぶしていた恋文は人からわたされるものばかりだ。夜這いをかけるだいそれた人はいなくても、妖かしはいるのだ。しかも、彼らはうまく昴摩の目をかいくぐっている。



「いつてなかったか？紅葉を娶った者が王になると息子たちにつたんだ」

「なっ なっ なっ」

何事もないようにいった黒鬼妖王の言葉に昴摩は言葉にならない。黒鬼妖王はというと紅葉の衣に手を侵入させようとして昴摩にはたきおとされる。どこからつつこめばいいのか昴摩にはもうわからなかった。

昴摩は自分が完璧に害虫駆除をしているとおもっていた。蚊のような性質のわるい虫も蚤のようなちいさな虫もいっさいを駆除しているとおもっていた。

雪深い山の奥ふかくに荘厳な屋敷がたっている。白に染められた世界にすべてから孤立するように建てられたその建物はやはり浮世離れた者が主として腰をすえていた。

とはいえいま、主は不在である。かわりにたわなに実ったおおきな胸をはだけゆったりと衣をきこんだ女性がわがもの顔で屋敷にいる。胸には雲と龍をかたどった印が描かれていた。

白い湯気がゆらり、ゆらり、とたちこめている。器のなかには菜稚琉の栽培しているお茶の葉でいれた緑茶が淡いすきとおった生命の息吹のような水色をうつしていた。

「いいんですか？あんなことを許して」

そういつてとなりになすわってきたのは柏だ。螢蘭と菜稚琉の意向にそむくきはないが、どうもきになる。紅葉をなによりも愛しているこの人たちがあんなことを承諾するとはおもえなかった。

「無理強いをすれば殺す。幸せにできない者がふれたら殺す。婚姻のときに私と菜稚琉の許可がでなければ殺す。三つの約束つきで許したのよ」

螢蘭のその言葉に柏はおどろくよりも納得する。こんな三つの約束を守る者などいまのところ柏にはひとりしかおもいつかばない。「それでは皆殺しではないですか？」



柏の言葉に魅惑的いや策士的に螢蘭は微笑むと質問をする。

「どうすれば恋心を持続することができるとおもう？」

「さあ、私も円融も恋心は皆無ですからね」

螢蘭の言葉に柏はかえした。柏と円融は幼いころから婚姻がきまっていたしそれがあたりまえ自然の流れでもあるかのように夫婦になったのだ。それに円融といえることがだれといえるよりも心地よくきが楽なのだ。

「不安よ」

螢蘭はそういつて蠱惑的な雰囲気をかもしだす。そんな螢蘭をみながら自分にはあまりない色気を紅葉がかもしだすのはきつとこの人の影響だろうとかがえる。その他にも紅葉は多々この二人の影響をうけている。

「手にはいらぬ不安。すぐにうしなってしまうかもしれない不安。邪魔者がおおいこともいい不安よね。安定を求めながら、恋は不安に燃えるのよ」

「そついうものですかね」

柏は螢蘭にいった。お茶の湯気がきえていることにきづいていれなおそうとしたが螢蘭にとめられてしまう。螢蘭はさめたお茶をのみほすと湯呑みをわたす。柏はうけとるとお茶を新たにいれなおす。「それに、男はね。完全に手にはいらなかったものほど、ながく恋焦がれてしまうものなの」

遠い目をして螢蘭はそういつとだされたお茶に口をつける。昴摩には紅葉の大切なものをわたしたのだ。彼が紅葉から離れるのは好ましいことではない。

つまり黒鬼妖王の申し出をうけたのはかませ犬を用意するため。本来の黒鬼妖王の申し出はこうだった。

昴摩の正妻として紅葉をむかえいれることを許してほしい

桜雅族が減びたことにより紅葉にはだいぶん自由があたえられるようになった。べつに紅葉を妖かしのもとへ嫁にだしてもいいこ



うにかまわないのだが、やっぱり親心としては手元においておきたい。だから三つの約束をつけてだれの嫁にでもやるといったのだ。しかし、三つ目の二人の承諾のところは一生承諾するつもりはない。そうすれば、紅葉はずっと自分たちの娘のままだ。

（意外な伏兵がいるかもしれないな）

お茶をのみながらふたたびふりはじめた雪をみつめながら螢蘭はおもった。しんと降り積もる雪と音もない白い世界は心がおちつく。

「てめえ、さつさと帰れよ」

昴摩はそういつて黒鬼妖王の頭に蹴りをいれている。火桶の火がきれかけているので墨をとりについたら黒鬼妖王がいたのだ。しかも昴摩がさつきまで紅葉の添い寝をしていたところにちゃっかりいる。

昴摩は火桶に火のついた墨をおくと衣ごと紅葉をうばいかえす。その衝撃で紅葉は眠そうな機嫌のわるい声をあげた。紅葉にとって睡眠はすごく大事な時間である。精神の癒しや体の体調を整える大切な時間。

「あつ、わりい、わりい。大丈夫だからゆつくり眠れ」

紅葉を横抱きにしたまま左右にゆつくりゆすりながらあやすように背中をぼん、ぼんとたたく。こんな息子の姿をみたことがない黒鬼妖王はなかばあきれぎみだ。城にいるときにじゅうぶん紅葉にたいしての甘くやさしい態度はみてきたが、ここまではいきすぎだろう。

「すう、すう」

しがみつくように昴摩の衣をにぎりしめてふたたび眠りについた紅葉を満足そうな瞳でみつめて、そのまま昴摩は腰をおろす。紅葉も安心しきった顔でねむっている。

「夜叉それでは父と赤子のようにだぞ」

黒鬼妖王はそういつて昴摩をからかう。昴摩はとっさに「うっせ」



とすしおおきな声をだしてしまった。するとやはり機嫌のわるい唸り声が紅葉からあがる。あわててまた昴摩はあやすように紅葉をなだめる。

「さっさとどっかいけよ。紅葉はとうぶんおきないぜ。まあ、夕方になつたらおこすけどな」

夕方になれば経をあげなければならない。紅葉が菜稚琉とした約束だ。昴摩はそういつて体をゆすっている。赤子のゆりかごのような息子。そんな昴摩に黒鬼妖王はいう。まさかこのまま夕刻までということはないだろう。まだ、陽がかたむくにはじゅうぶん時間がある。

「おまえはどうするんだ？」

その意外な質問いや、愚問に昴摩は表情をかえず、とうぜんのようにこたえたのだ。

「ああ、きまつてるだろう。おきるまでこのままだ」

その言葉に黒鬼妖王は心底あきれてしまった。馬鹿らしくなって部屋をでていくと自宅へと帰った。まったくもってつきあいきれん。う。

紅葉は鴨川にきていた。二度目の厄病送りをしにきたのだ。川を中心にふたたび疫病が流行りだしたと報告をうけてのことだった。わら人形に病をとりこめて水に流すのがふつつだが紅葉は焼いてしま

ここ三日のあいだにこの厄病送りを都のまわりでさいさんしていたいや、都のまわりというのは語弊がある。桂川、鴨川周辺から病は発生しているのだ。まだ、憶測のいきをでてはいないが水にまつわる妖かしか物の怪がいるのかもしれない。それともなにか毒のようなものが流れているかだ。

鉢にはられた水面には闇にうかぶ星々がうかんでいる。水鏡になったその水のうえに正方形のちいさな紙をうけべた。陰陽印のかかれたその紙にゆつくりとちがう印があらわれる。紅葉は陰陽にならない天文で疫病の原因を追究しているところだ。



「昴摩、清滝川と賀茂川のほうにいつてきてはいくれないか？」

帰ってきてこそそとなにかしているとおもえば紅葉はそういうきゆうにいいだされたお使いに昴摩はなんのためにという顔で紅葉をみる。紅葉はそんな昴摩に有無をいわすきがないのだろう。昴摩を無視して水にうかんだ紙を手にとるとさらにいう。

「いいか。この呪がかかれていますものをみつけてくるんだ」

濡れた紙は紅葉の息がかかるとたちどころにかわいてしまう。紅葉は呪のかかれた紙を昴摩にわたすといった。

「いまから・・・」

なにかいいたそうにそれだけつぶやく。冬のみじかい夜も終盤にさしかかりつつあるそらはあと一刻もしないうちに白みはじめるだろう。

「そうだ。なにか問題があるか？」

「どうして川なんだ」

昴摩がいつものわがままをいつているのは紅葉はよくわかつている。紅葉の術がかかっていたすこしまえならどんなに嫌がっても主導権は紅葉にあったのだが、いまは平等である。説明もなしに無理やりお願いするわけにもいかない。

「病がひろまっている地域は川のちかくときまっている。賀茂川、鴨川それに桂川だ。この三つの川は都をかこんでいる。だから、都のまわりから病がおこっているようにみえた。しかし、それならどうして病が都にこない。おかしいとおもうだろう？」

昴摩は地理をおもいうかべながら「たしかに」とつぶやく。紅葉はさらにつづける。

「天意ではなく、人為的におこっているものとしたらかならず素<sup>もと</sup>があるはずだ。それを導きだすのがそれだ。呪をみると妖かしをまねているものか、もしくは人の印をまねたものはわからない。どちらにしろ、人為なら素を絶やさないと堂々巡りだ」

説明はよくわかった。しかし、どうしていますぐいかなければいけないのか。だいたい、昴摩がでているあいだだれが紅葉の世話



をするというのか。

「オレがいなくなったら不自由だぞ」

「大丈夫だ。飯も仕度も風呂も自分でできる」

（そうだったのか）

初耳だった。昴摩はてつきり紅葉はそういったことをいつさいできないものだとおもっていたのだ。身分の高い者のようにいつさい自分のことは自分でしないしできないととうぜんのようにおもっていた。

「でも、寝るときはどうすんだ。寝不足になるだろう」

紅葉は眠るときに信賴している者がいないと熟睡できない。幼いときから命を狙われることがおかつたおかげで自然と身についた癖のようなものである。その癖はいまでも健在でどうしても紅葉は添い寝してくれる者がいないと寝つけなかった。

「しかたないな。おまえがはやく帰ってくるのを首をながくしてまっつているよ」

「式にいかせればいいだろう。いつもそうしてるじゃないか」

自分がいくほどではないということを昴摩は主張するが紅葉はあつさり否定する。

「はやく確実にそれを手に入れたいんだ。それに術自体がどんなものかもわからないのに、式をやらせてしくじるよりも確実におまえがいったほうがいい」

「くっ」

断固としていきたくない昴摩はなおもなにかいい口実はないかさがしているがおもいつかない。紅葉のそばから極力はなれたくないのだ。

（もし、オレのいないあいだに……）

昴摩は先日きかされたことをおもいだす。黒鬼妖王がだした“紅葉を嫁にした者を時期王にする”という命により、自分の兄弟たちが紅葉をねらっている。昴摩にきづかれないうちに文をわたしているのだ。



しかも、なぜか黒鬼妖王まで夜這いにきたりしているらしい。何人もの相手が紅葉を口説きにきているこの状況でどうして何日もそばからはなれられるだろうか。正気なやつならまず無理だね。

きつと黒鬼妖王が夜這いにきたのは昴摩が紅葉の使いで屋敷にもどったことだろう。海に身をなげた鬼女と戯れているのを見るもの胸糞わるかったので、ゆっくりとしていたのだ。

あの鬼女は夫に捨てられその恨みで鬼とかした者だ。夫を奪った女と夫を殺し、そして自分も海に魂をはずめたが、恨みははれず鬼女になり若者を見初めては海へと誘い契りを交わす。鬼女と契りがかわせば腑抜けになってしまう。つまり精気を奪われるのだ。結局、鬼女に自分を惚れさせて紅葉は鬼女が海に若者をつれさってしまうのをやめさせるのに成功しているのだが。

なかなかいこうとしない昴摩に紅葉はしかたなくたたみかける。昔のように力づくで、いかなのが面倒くさいところだ。昔なら術をかけた主のいうことは絶対だった。反発しても最終的にはききいれなければいけない。そういう術でがんじがらめにしていた。

紅葉は髪をかきわけすこし目をほそめる。そして、魅惑的に微笑むと昴摩にいう。

「はやく帰ってこれたらご褒美をあげよう」

「え？」

昴摩はおもってもいない言葉にまぬけなこたえをかえす。そんな昴摩におもわせぶりに頬にふれるとさらに魅惑的な雰囲気をもったままいう。

「もちろんおまえが心配しているようなことがあれば、昴摩にとらわれたまま一生おまえのいうことをきいて暮らすよ」

紅葉はどうだいい案だろうと昴摩に瞳でとう。昴摩は甘く妖しい誘惑に喉をならした。心配しているようなことがおきるのは死んでもいやだが紅葉からもうらえるご褒美にどうしても意識が。

「褒美はなんでもいいのか？」

昴摩のといに紅葉は「ああ」とこたええると昴摩にとう。さあ、ど



うするんだ、と。昴摩は意をけつした。はじめての紅葉のご褒美の誘惑にどうしてもあながうことができなかった。

「やる」

そうこたえた昴摩に満足そうに微笑む。昴摩は一日でもはやくかえってくるため、そうそうにたちあがると戸口に手をかける。そんな昴摩の背に紅葉はいった。先ほども甘い誘惑はどこへいったのか、いつものきりつとした声にもどっている。

「朝日が三回のぼるまでにかえってこい」

昴摩は（やっぱりはめられたかも）とおもいながらそこをあとにした。もう、空が白みはじめている。一回目の朝日はすぐそこにひかえていた。

昴摩がいなくなつて一日目。さつそく紅葉のまわりで異変がおきはじめた。紅葉はそれをおもしろくみていた。そして、いまは陰陽寮にきている。陰陽の頭かみ安部正宗あへのまごむねと暮をうっているのだ。さきの都の吉凶のときに知り合い親密な関係を築いているのだ。

「それはまたおもしろそうなのはなしですね」

紅葉は狩衣の袖をいじりながらいった。ゆつたりとくつろいで座る紅葉につかれた顔で正宗はいう。

「おもしろいなどというあなたをみていると亡き祖父もそんなかただったのだろうとおもいますよ」

正宗は安部清明の孫であり『金鳥玉兔集』きんとうぎよしゅうを若くしておさめ、二五という若さで陰陽寮頭となった。紅葉もつい昨日よみおえて陰陽道の道をまたひとつおさめたばかりだ。

「しかし、左弁官殿はどうして私のような者をきにかけてくださるのやら」

紅葉はそういうと暮を打つ。正宗は紅葉のうつたてにしばしかんがえながらこたえる。正宗は紅葉の暮仲間なのだ。昴摩と暮をしてもすぐに勝ってしまつておもしろくないし、かといって菜稚琉や螢蘭は強すぎて相手にならない。そのてん、正宗はおなじつよさでた



のしめる。

「それはきになるでしょう？身分もわからない者が自分よりも信をあつめていては。紅葉殿だけです。位階も官職もたず、昇殿をゆるされているのは。ましてや後宮への出入りまで許されているではないですか」

そういうと暮をうつ。紅葉は正宗のうつた暮をすこし困った顔でみつめ、紅葉はこたえる。

「帝に助言なさったのは正宗殿でしょう。あなたにもはりあっているのではないのですか？」

都の周辺で流行り病がおきているそのことがまだ、解決してないことをいわれているのだが。

「ははは・・・壬生殿みぶのに“陰陽寮がちらしているから信のける者をつれてきた”といわれてしまいましたよ」

紅葉は暮に口づけるとうつ。そして、したり顔でどうでしょうかと目でうったえる。紅葉に「まいりました」と頭をさげるとさらにはなしはじめる。

左弁官の壬生道則みぶのみちのりがつれてきたのは古都の僧だ。その推薦した僧と紅葉で弘徽殿にあらわれる鬼の正体をあてあう勝負をすることになったのだ。

「私は陰陽寮にはいったおぼえはないのですが」

「でもあちらはあなたを指名しているので、しかたないでしょう？」  
「しかたない。さきに占うとしますか」

紅葉の言葉に正宗は童子をよぶと、紅葉に「なにがいる？」ときいてくる。紅葉はおかしそうにわらいながらいった。

「桂の葉、水、火、を用意してください。今日のほんとうの目的はこれですね」

正宗が暮をうつとうつのでわざわざここまで来たというのにはほんとうの目的はどうやらこれだったようだ。

「勉強になるし、なにより紅葉殿の術は秘術ですからね。みていておもしろい」



正宗はそういつと童子にこうつけくわえる。紅葉の必要なものをきいて陰陽の術で占うことを察した正宗は他の者たちにしらせるようにいった。

「私は見世物ではありませんよ」

紅葉はそういつとわらった。正宗もたのしそくにわらっている。

正宗は紅葉の術に興味をひかれる。術を統べる者は理を統べることになる。しかし、世の理はそこにあつて、そこにはないもの。つかみがたく、なしがたいのだ。

紅葉も正宗から陰陽道の極秘を学び、正宗も紅葉の術に陰陽道にないものを学ぶ。ふたりはたがいに刺激しあっているのだ。

清涼殿の正面に左弁官壬生道則さへんかん みぶのみちのりの推薦した僧と陰陽の頭安部正宗かみ あべのまさむねは壮観である。

この場にいるのは昇殿を許されている者だけだ。皇后、中宮、女御、更衣は別棟に移動してもらっている。後宮が舞台なのだからしかない。鬼は後宮に現れるのだ。

「それでははじめよ」

帝の言葉にさらに深々と頭をさげると双方が吉凶を占う。五鈷鉤ごここうをもち経をとなえている僧は気位が高そうな顔をしている。頭は僧らしくきれいにまるまっていた。

紅葉は火、水、木、金、土を宿した炎、水、桂の葉、爛王、石を陰陽印のはしにおき印の真ん中に紙をおいた。紙はぼつと燃えあがるとあつというまに灰になってちつていく。

「でした」

さきにそういったのは僧のほうだ。僧は高らかに占いの結果を報告する。まだ、占にはいつている紅葉をちらりと勝ち誇った目で見ただ。

「このたびの鬼の正体は鬼をきる刃で殺された鬼の情念が形になったもの。情念が形になり“牛黄頭”ぎゅうわうとうという鬼となり、東宮にとり憑



つき帝の首と刃のもち主の首をねらっているのです」

まわりはざわつき、その場にいた楽護は真つ青な顔になっていた。自分の切った鬼の情念が形となり新たな鬼となって帝の首をねらっているなど死活問題である。ましてや、その鬼は東宮にとり憑こうと夜な夜な彷徨っているのだ。

紅葉は僧の言葉をききおえたあと静かに目をあける。

「ちがう」

「なにっ！」

紅葉のつぶやきに僧は険しい顔でいいかえした。紅葉はたちあがると帝につげる。

「このたびの鬼は呪詛による幻影だとでております。帝に呪詛をしかけた何者かがおるようです。が、その者を深追いなさらないほうが吉だともでていますので、どうか帝のあつい温情をかけるがよろしいかと」

紅葉の言葉に楽護は心配そうな顔をむける。帝は紅葉におといになられた。

「で、その呪詛は破れるのか？」

紅葉は「御意」とこたえると楽護をみつめる。あとは帝の身をまもる六衛府の仕事だとばかりにいった。

「後宮内で緑の炎がたちこめているところをお探しなさい。その下には蛇毒の術がほどこされた壺があるはずです。その壺に火をつければ呪詛はとかれます」

楽護たち六衛府の者たちは後宮にいそぐと後宮中をくまなくさがした。清涼殿と後涼殿をつなぐ渡殿のしたにそれはかくされていた。その壺のなかには紅葉が指摘したように毒蛇が三匹首をきられていれられていた。すみやかに燃やされ供養された。

「紅葉殿！」

清涼殿をあとにした紅葉をおいかけてきたのは楽護だ。うれしそうにかけよってくる。

「紅葉殿、さきほどはありがとうございました。あの僧のおかげで



大変なことになるところでした」

楽護はそういつて紅葉に感謝の意をつたえる。これがほんとうのことなら失脚だけのはなしではすまない。家ともども地におちてもうふたたびこの地をふむことはなくなってしまうところだったのだ。そんな二人のもとに僧があらわれた。そして、紅葉につめよる。

「どうゆうことだ。儂<sup>わ</sup>の術が間違っていたとはおもえん。そなたなにかしたなっ」

紅葉はちかくにある顔をとおざけるように僧の胸をかるくおすと口元を袖でしたたか隠しながらいった。

「そう、あなたの占はまちがっていない。しかし、公然のまえで東宮が鬼になるといわれた者の身がおわかりか。しかも、その原因が自分のせいだといわれた者の立場をかんがえたことが。都で名をはせたいとおもっているなら都の氣質を学ぶべきです。あなた自身のためにもね」

「なにをっ」

「紅葉殿っ」

僧が紅葉の衣をつかみあげる。紅葉の言葉におどろいていた楽護は手荒なことをしようとしている僧をとめようとしたが、紅葉にせいされる。

「あなたの瞳には氣位のたかさと欲の炎がみえる。私を負かして名をあげたいか？それとも、人が平伏す地位が欲しいのか？」

顔をちかづけて瞳をのぞきこむようにしていった紅葉を乱暴にはなすと僧はなにもいわずにたちさつていく。紅葉が昨日、占つてみると楽護のことがでたので、その日のうちにあの毒蛇を仕掛けにいったのだ。

「紅葉殿、私は・・・」

このたびのことが自分のせいだとわかった楽護はいいにくそうに紅葉にいった。しかし、紅葉はふわりとわらうと楽護にいう。

「鬼は今夜にでもしまつていく。楽護殿このかりはうまい酒でまけておいてやるよ」



そついうと紅葉はさつていった。

鬼をかたづけた帰り、紅葉は鬼女にあう。すこしあきれた顔をしてその鬼女に笑みをうかべた。

「こまつた人だ。恋患つてここまできてしまうなんて」

鬼女はすぐるように紅葉にだきつくという。その体は海の匂いにして冷たくひえている。いや、濡れていた。

「紅葉様、私はあなたをおもいすぎて苦しくて苦しくてしかたないのです」

紅葉はその体をはなすと鬼女の名をよんでやる。

ゆめはな きみ  
「夢花の君」

頬にふれ紅葉はつづけてかたりかける。

「君はいつまでも恋にしがみついたままだから苦しいんだよ。深い愛の底に身をしずめればその苦しみもまた甘露の蜜にかわる。さあ、勇気をもつて」

そついつて紅葉は鬼女からはなれていくとそのまま、姿をくらませる。恋しい者をもとめる女のしずかな泣き声だけがその場にのこる。

鬼女がこの世でもっとも崇高な術者である紅葉に懸想をいだき海からこの雅やかな都にまでおってきたという噂はあつというまに府中にひろまることになった。



## 2 独住

### 2・独住

紅葉は朝の経をおえてよこになっていた。朝食も食べ腹もふくれれば眠たくなってしまふ。そこへ正宗がやってきたのだが、紅葉はおきようもしない。いや、目をあけていないだけで意識は覚めている。

「紅葉殿、いつまで寝ているつもりですか？」

もう陽はたかく、白くつもった雪にきらきらと光をあてて輝いている。昴摩がでていって三回目の朝。うまくみつかれば今日には帰ってくるだろう。

「正宗殿か。眠ってはいないよ。目をとじているだけだ」

昴摩がかえってこないと紅葉には安眠はない。柏か円融をよべばすむはなしたが、たまのひとりというのもまた気楽なものであった。「病がまたでだしたそうですよ」

正宗に紅葉は目をあけることもなくこたえる。

「しばらくほっておいてもいい」

「それもそうですね。こちらで疫病送りは意味がないとでていますから。それより、魍魎<sup>ワウリョウ</sup>たちがあなたの噂をしておりましたよ。高名な術者に鬼女が恋慕していると」

紅葉はおきあがると両腕をのばして背筋をのばす。昴摩不在のこのあいだになにかやっかいなことがおきては困るというのに。都に住んでいる者ならだれもが紅葉につかえる昴摩のことをしている。つまり、正宗は忠告しにきたのだ。うるさい番犬がへそをまげるぞ、と。

「夢花の君ですよ。とても美しい人です」

「美しくても鬼女でしょう。精魂つきてもしりませんよ」

紅葉はおかしそうにわらうとまたふたたびよこになる。そして、そのまま目をつぶってしまう。正宗は「忠告はしましたよ」それだ



けをいつてさつていった。

そのまま、なん刻すぎたのだろう。紅葉の体に柔らかな絹のような糸がふりそそいでいる。そっと衣にふれるとなにかがおおいかぶさっていることがわかる。ふわりと香る花の香りに紅葉はなつかしさを感じた。

「寝顔もすてきだけど、目をさまして私をその黒瞳にうつしてください」

紅葉は目をあける。紅葉の体のうえになが髪をして目のしたに印字がかかれた美女がいた。紅葉はひと目で美女が人ではないことを察したがいやなきはしない。それどころか、好意的な感覚。

「あなたは？」

その美女は紅葉の衣をくつろげると紅葉の肌に愛おしそうに頬をよせていう。美女の耳にはとく、とくと紅葉の心音がきこえてきてその音にうつとりとしていた。彼はいきているのだとおもうと感動すら感じる。

「私はあなたの妻ですよ。幾千のときをこえ、ふたたびあなたのもとへきたのです」

紅葉はおきあがると龍女のほほにふれる。龍女はその手を取りほえみながら目をとじる。紅葉はその姿にうそはないと直感でおもった。紅葉の直感が彼女は自分をだますようなことはしない、とつげるのだ。完璧な味方だと。

それだけではないこの感じにどこか懐かしさを感じるので。

（会ったことがある。いや、もっと彼女は自分の）

確信的なおもい。しかし、家族はぬいて昇摩以外を寢床のともにしたことはない。まったく心あたりはないのだが、魂がそうだとつげるのだ。

「名は？」

紅葉のといに龍女は頬をすりよせるとからかうようにいう。大人を困らせようとする子供の顔。

「また妻にしてくれるなら名のるわ」



紅葉はおかしそうにわらうと龍女の耳に頬をちかづける。そして、ささやくようにいった。龍女は頬をほんのり染めて紅葉に神経を集中する。

「困った人だ。ほんとうは私が女でも妻になりたい？」

龍女はこくんとわずくと紅葉にだきつく。紅葉は黒い絹糸のようながい髪に指をゆすべらせるといった。

「いいよ、妻になりなよ。そのかわり私は我侭な人だから後悔してもしらないよ」

龍女をだきながら紅葉は問題人物の顔をうかべていた。昂摩に紹介したらどうなることやら。そうおもいながらそれでもなんとなくこの龍女をてばなせない。いや、なにかもつところはなれてはいけないものをこの人はもっているような気がする。

「沙那姫<sup>しゃなひめ</sup>・・・紅葉様よんでくださいな」

紅葉は沙那姫の心地いい髪をいじりながらしずかに名をつぶやいた。沙那姫はうれしそうに微笑んで紅葉にあまえるように身をよせながら「はい」と返事をする。

「紅葉様、もう一度」

「はい、はい。沙那姫」

「もつと」

「沙那姫」

しつこく名前を呼んでくれとせがむ沙那姫に紅葉おかしそうにくすくす、笑うとなんども何度もよんだ。

恥をかかされた僧は遠く嵯峨野の地にきていた。噂の鬼女をおってきたのだ。鬼女は天の橋立にかえることもできず大沢池に身をしずめ泣き濡れている。恋しくて、恋しくて、けれどあきらめることもできず、こうしてこの地にとどまってしまったのだ。

「私はもつとくに恋を楽しむときをすぎてしまっている。ただ、愛しい人との夜をと、それすらも叶わないとおっしゃるの」

鬼女の涙は頬をつたっては池の水にとけていく。美しい姿をして



いる鬼女を僧は水ごしにみていた。水鏡には角がはえ眉間にしわのよった鬼の顔がうつっていた。

（若造が火遊びで物の怪と戯ればどうなるか）

僧は鬼女に声をかける。紅葉の弱点を占おうとしたら霞がかかったようになにもみえなかったのだが、それでもあきらめずに占ってみるとふたりの女がみえた。

「そんなになつてまで、あきらめられぬか？」

鬼女はふりかえり僧をみる。その目はぬれていてすがるようにみつめてくる。僧は笠をあげると鬼女にいった。

「紅葉殿がてこずっている疫病に手をかけてやれば、情けをくれるかもな」

鬼女は水面から姿をけすところかえきえてしまった。僧はくつくつくと不適にわらうとその場をさった。これからが見物である。都の病を払えなければそれで面子はつぶれ、はらったとしても鬼女によつて腑抜けにされる。

昴摩は三回目の朝をすぎ昼ごろにかえってきた。探し物は川の底に埋められていて、そのせいで昴摩は泥だらけになってしまった。紅葉にいわれたとおりの呪がかかれた陶器をみつけた昴摩は意気揚々とそれをもつてかえってきたのだが。

四方を几帳でかこっているその場所からはすう、すう、と規則だたしい寝息がきこえる。まあ、熟睡はしていないだろうとなんの遠慮もなくそのなかへはいっていく。

コトン。手からもちかえった器をおとしてしまった。円形の器はころ、ころ、ころがり畳にぶつかりとまる。左右にこと、こと、とゆれてぴたつととまる。

「・・・・・・・・・・」

人は信じられないものをみるとかたまるらしい。喜怒哀楽すらなく几帳に手をおいた姿勢のまま昴摩はかたまっている。え？という疑問すら頭をかけめぐっていない。頭も体もかたまってしまってい



るのだ。

几帳のなかには乱れた姿で寝ている紅葉と女がいたのだ。正確に  
つたえると衣をはだけて上半身の肌を露出している。

女は紅葉の胸のうえにのりかかり腕をまわして眠っている。当初、  
紅葉が寝ているとおもっていたが紅葉は書をよんでいた。右手に書  
を左手に女の黒い髪をさわりながらゆったりとくつろいでいるのだ。  
「かえつてきたのか？」

悪びれるようすもなく紅葉がいった。昴摩はあまりのことに言葉  
もでない。紅葉はおちている器をとるとまじまじと観察する。予想  
外にもふたつもあったのだ。紅葉は呪に人さし指でふれると二つか  
さねてわきにおいた。

（だれだ・・・まさか、ええ、でも）

やっと頭と感情をとりもどしつつある昴摩は最大限に頭を働かせ  
ようとする。現状だけみれば浮気のあとのようにみえるが、しかし、  
紅葉がそんなこと。しかも、女と。絵的には男女のようにみえるが  
紅葉のほんとうの性別は女である。

「うっ、紅葉様どうなさったの？」

のりかかって眠っていた女は紅葉の胸に手をついてあきあがる。  
衣でまえをかくそうともせず眠たそうに目をこすっている。こすつ  
ていないほうの頬には青色の印がされていた。

「きゃっ」

昴摩がいることにやっときづいたその女は両腕を交差すると胸を  
かくした。そして、あるうことが紅葉にみをよせてしまったのだ。

「紅葉様、このかたは？」

「ああ、紹介しておこう。昴摩だ。こっちは竜女の沙那姫だ。二人  
とも仲良くしてくれ」

沙那姫は昴摩を観察するようにみつめる。これが噂の夜叉かとお  
もいながらみていた。紅葉がはじめて自分の血をわけた相手。沙那  
姫がほしいものをもっている相手。

ぶるぶる、震える指で紹介された女を指さすとうらがえった声で昴



摩はいう。それは紅葉にいったものか沙那姫にいったものかは本人にもわからない。

「・・・どう関係だ」

「紅葉様の妻です。あなたこそ紅葉様とはどういう関係なのかしら」紅葉ではなく沙那姫はこたえると微笑む。勝者の微笑をたたえる彼女からは自信に満ちあふれていた。紅葉の妻となのっただけで昂摩にはどんな女も腹黒にみえてしまうのだろう。

昂摩は紅葉がだまされているとおもふ。きっと変な術をかけられておかしくなっているのだ。いや、おかしいのは昂摩のほうだ。

「沙那姫どきなさい。私は仕事にいつてくる」

そういつて紅葉は衣を整えると陶器をもって昂摩と沙那姫をのこしてその場をあとにしてしまう。紅葉のかんがえがわからない昂摩は自分の殻にとじこもり思考をめぐらすがいつこうにかんがえがまとまらない。

「どうしてあなたなの」

紅葉がいなくなり沙那姫は悔しそうな瞳でいった。しかし、沙那姫の言葉に昂摩はきづかない。沙那姫はたちあがるとさっさと服を整えると昂摩を忌々しそうににらんだ。

「紅葉様も趣味がおかわりになられたのね」

馬鹿にしたようなそして勝気な声に昂摩ははじめて顔をあげる。そして、沙那姫の瞳をみすえる。沙那姫はけっして負けはしない、とつよい瞳でいた。昂摩にいった。沙那姫がみてきた者を。

「紅葉様の歴代のお相手は皆様あなたのようにお粗末な方ではなかったもの」

その言葉に昂摩は険しい目をして沙那姫にとう。  
「なに？」

「桜雅族のなかで紅葉様がなんと輪廻をくりかえしていらつしやるかわかる？そのたびにあのかたのそばには私のようにそばに使える者がいらしたのよ。あなたもそのひとりに過ぎないというのに立場をわかつてらつしやらないのはお可哀想」



桜稚族をだしたこの女はずっとまえから紅葉のことをしているような口ぶりだった。そう、あなたの知らないあの方のことまで私は知っているのよ、といわれたような気がする。

紅葉がなんと生を受け、なんと死をむかえたのか昴摩にはわからない。考えたこともなかった。紅葉がはじめて生をうけたのは遙か昔の昴摩が生まれるもつとまえだろう。いまの紅葉にきいても紅葉がおぼえているわけがない。前世の記憶をもった人間などそういわしない。

昴摩は両拳をにぎりしめる。ながい爪が肌につきささって指のあいだから血がながれてしまっていた。悔しかった。あなたはなにもしらないのよ、といわれていることが、そして自分になにも知らないことが。

「あら、でもあなたはまだお相手ではないのかしら。だって紅葉様のそばにいたためには菜稚琉様や螢蘭様にみとめられないと夫にも妻にもなれないんですもの」

くすりとわらって告げられた言葉に愕然とした。菜稚琉は認めてくれているかもしれないが螢蘭には自分はまったくといっていいほど認めてもらえていない。ただ、そのことを自分が男だからきにいないのだとおもっていた。しかし、沙那姫は今たしかに夫もいたといったのだ。

昴摩はなにもいいかえせないまま背をむけてその場をさっっていく。

もし、紅葉を鳥籠に閉じこめてだれにみせないように声すらきえないようにただ自分だけが紅葉をみていられるように、ただ自分だけが紅葉の瞳にうつるようにしてももう意味はない。紅葉の体に紅葉の心にふれたやつがいるとおもうだけで吐き気がした。

沙那姫は紅葉のぬくもりがのこるその布団にそつとよこになりぬくもりをあつめるように抱きしめるとそつと目をとじる。

「紅葉様がわるいんですよ」

罪悪感をけすように沙那姫はつぶやいた。



紅葉は陰陽寮にきていた。もうここでは紅葉は顔だけで出入りができる。陰陽生が紅葉をむかえてくれた。彼の目には尊敬と憧れの光がやどっているが、紅葉はその視線をきにせずつけとめると少年にいう。

「正宗殿はいるかな？火急の用件だとつたえてくれ」

紅葉の言葉に「はい」と元気よくこたえろといそいで正宗をよびにいった。ぱたぱたと走る音が遠ざかっていく。しばらくして、ゆつくりとした足どりで正宗がきた。いそげとっているのにこの男は。

正宗は紅葉の顔をみておもいもよらぬことをいった。

「紅葉様、女難の相がでていますよ」

「女難ね」

そいつって紅葉はくすくすわらうと正宗に竜女を嫁に迎えたことをはなした。正宗ははあと溜息をついてさいさん忠告をうながす。

「私も家柄的に妖かしに惹かれがちですが、紅葉様には昴摩殿がいらっしゃるのにかまわないのですか？」

「昴摩か。竜女とともにおいてきた」

その言葉にはああとながい溜息をつくときをもちなおして正宗はいう。どうして、そんなふたりをのこしてここまでこれるのだろう。正宗はあきらめたように仕事のはなしにもどる。

「用意はできていますよ。こちらです」

紅葉はその言葉に満足そうに微笑むと正宗についていく。正宗につれてこられた部屋にはしめ縄でかこまれた小さな祭壇があった。さすが陰陽の頭が用意しただけのものはある。紅葉がのぞんでいたどりのものができていた。

「こちらにお納めください」

正宗はそいつってしめ縄の内側の中央におかれた台をしめた。紅葉は懐にしまいこんだ白い二つのちいさな陶器をならべてそこにおく。正宗はそれをみながらいった。

「これではやはりいけませんね」



「まあ、こんなものですよ。これで病はひろがらなくなったことですし。星々が先をいそぐなと忠告してくれているのです。ゆっくりやりましょう」

紅葉はそういう。たしかに正宗の卜占にもいそぐことは凶をまねくとでている。正宗と紅葉がちらとやっているのはこのためだ。本来ならもうとつくにかたづいていてもいいのだが、二人の卜占の結果が一致しているので慎重にやっているのだ。しかも、紅葉の卜占では時をまてば真をえるとでていた。

別室で紅葉は酒をのみながら正宗の仕事を見ている。とくとく、と注いでは器に口をつけた。

「正宗殿はひとり寂しくのんでいる友がいてもなんともおもいにならないとは。ああ、なんと無常なことか」

ひとりのみにあきてきた紅葉がわざとらしくいう。そして、からになった瓶をほおりなげると月をみあげる。もうあたりは暗くなり月がひくいところでこちらをみていた。正宗は職務におわれていたがやっとかたがつき紅葉を無視して伸びをするとおなじように月をみる。

「明日は満月ですね」

十三夜の月は白く輝いていてまだ不完全だというのにあたりを明るくてらしている。そして、正宗は祖父が都の没落を予言したことをおもいだす。もう三百年ちかくつづいているこの都の没落は想像しがたいものだが、その変化は目につくようになってきていた。

「月満つれば則ち虧く」

紅葉が正宗の心を察するようにいった。月のように物事は盛り衰えるということだ。それはどんなにながくつづいている都であつてもかわりはない。

「人は争つても栄かをきわめようとする。しかし、それには衰えがかならずある。そのくり返しだというのになぜ求めるのですしょう」

正宗はそついうと紅葉をみる。紅葉はふつとわらうと簡単な言葉



でかたづける。

「業の深さでしょう」

なるほど我のぶつかりあいが生じた因が頭でわかっていてもそれに導いてしまう。ふかく絡みつく過去の因はけっして容易には解放してはくれないということだ。

「紅葉様は月をみてなにをおもいますか？」

正宗の言葉に紅葉は月をさしながらいった。

「月満ちるように心が満ちるときは道もまた明るい。月欠けるように心も欠ければ道もまた暗い」

つまり簡単にいえば心が欠けるとなにごとくも不満と恐怖にみちてみえるということだ。また逆に心が満ちるとどんな険しい道もまっすぐに臆することなく歩んでいけるということ。なにごとくも心ひとつということである。

「ではつねに自信にみちている紅葉様はどんな凶事も吉にかえてしまえますね」

正宗はそういうと眩しそうに紅葉をみた。正宗はいちど興味にかられて紅葉を占ったことがある。しかし、なにもみえなかった。霞がかかりおぼろげになにかが動いたとおもったら光がうまれ消えてしまったのだ。

正宗はなにかの気配を感じる。あまりよいものではない。

「紅葉様」

正宗はそのことを紅葉につたえる。紅葉も感じたのだろう。のみさしの器をこつとおくとたちあがり正宗にいう。

「私の可愛い人ですよ」

そういつて部屋をでていく。そんな紅葉のうしろ姿に正宗は「女難ですよ」とつぶやいてふたたび瞳に月をうつした。

祭壇のまえでたちつくしている女がいた。そつとしめ縄にかこまれている陶器に手をのばそうとする。急に女の視界が真っ暗になる。女はおどろいてしずかにきいた。目をおおわれるまでまったく気配も感じなかったのだ。



「誰？」

「夢花の君」

その声に鬼女はうれしそうに目をかくしている掌にふれてつぶやく。

「紅葉様」

紅葉は鬼女の目をかくしたままもう片方の腕で体を自分にひきよせると優しくかたりかける。

「私を困らせにきたの？」

「ちがいます」

紅葉の優しい声とすこし責めるような言葉に鬼女は慌てて否定した。そして、弁解するように言葉をつづける。

「私はただ紅葉様がお困りになっているときいたから手助けになればと」

鬼女にはこのことをはなしたこともない。ではいったいだれからきいたというのか。紅葉はその疑問をそのままぶつける。

「誰にきいたの？」

「僧のかたにおしえていただきました」

鬼女は素直にこたえる。紅葉は今度こそ鬼女を責めるような声でいう。

「そう。私以外の男のことをきいてしまったんだね」

「紅葉様っ」

そうつぶやいて鬼女は口をつぐんでしまう。紅葉が鬼女からそつと離れてしまったからだ。そして、戸に手をおくと背中をむけたまま紅葉はいった。

「私のことをおもうなら大人しくしていなさい」

そしてその部屋をでていってしまう。鬼女はその場に泣き崩れてしまう。どうして自分はこんなひどい人を好きになってしまったのだろうと己を責めながら泣くしかなかった。

正宗のもとに帰る途中、紅葉は童の姿をした式神をみつける。紅葉と沙那姫の子のような容姿をしている式紙ははじめてみるものだが



すぐに紅葉にはその式神が沙那姫のものであるというのがわかった。  
「沙那姫からの使いだろう？」

そういつて童を抱きあげる。紅葉の肩に幼い手をおいてその式は  
いった。

「沙那姫様が紅葉様に使えるようにといった」

まだ五歳くらいにしかみえない童を抱いたまま歩みをすすめると  
紅葉は「そうか」といつて正宗のもとへ向かう。

（まったく、ここにも愀気やきもちのつよい者がいたか）

そうおもいながら紅葉はわが子のようなその童の顔をみる。目元  
と鼻は自分に似ているが、おでこ口は沙那姫に似ていた。紅葉が  
「わが子だと」いえばだれも疑わない容姿をしている。

（正宗殿にもみせてやろう）

正宗のおどろいた顔を想像しながら紅葉は楽しい気分になる。基  
本的に悪戯は大好きだ。

こうしてこの式神をだいて歩いている姿をみた者たちは紅葉の子  
だとおもいこみたちまち噂がひろがった。都に激震が走ったがすぐ  
にそれもおさまりなぜか紅葉にはより多くの恋文が届くようになっ  
た。

式神はいつのまにか沙那姫のもとにかえってしまった。今日は陰  
陽寮に泊まるつもりでいる紅葉は正宗の部屋でくつろいでいる。正  
宗は陰陽の頭として呪のかかった器を処理する吉日を占っていると  
ころだ。

紅葉は欠けることもないまん丸な月をみていた。月はさらにひく  
くちかくにあり、おおきなまん丸は光り輝いていてあかりがいらな  
いほどのあかるさだった。だからこそ紅葉はあかりの油をつぎたし  
にきた者にあかりを消すようにたのんだ。こんな美しい月にあかり  
など燈すのはあまりにも無粋のようなきがした。

茂みからカサカサと乾いた音をたて人影が姿をあらわす。茂みか  
らでてきた者を月があかるくうつしだす。



こんなところまでくるとはおもっていなかった紅葉はその意外な訪問者にすこし驚きの視線をむけるとすぐに微笑む。

「どうした？こんなところまで」

鬼柳は歩みをすすめると紅葉のそばまでくる。そして、紅葉の手をとると甘い声でいう。

「美しい月をみていたらどうしてもあなたに会いたくなってしまいました」

鬼柳は文をわたしはしないがこうしてたびたび会いにくる。不意に会いにきてはこうしてたあいもない時間をすごす。

「男を口説いてどうする」

紅葉はおかしそうにいったが、鬼柳はさらに口説きにかかる。緑の瞳が月夜に美しく輝いている。

「まったくどうすればあなたの心にはいれるのでしょうか？月にそばにくるように口説くほうがよっぽど簡単なようにおもえますよ」

もちろん、鬼柳がこんなふうに紅葉に会いにきていることは昴摩は知らない。鬼柳は昴摩がいないすきをわざと狙って紅葉に会いにきているのだ。そして、残念そうに鬼柳は紅葉につづけていう。

「お仕事のあいだはほんとうの姿の紅葉様に会えないのが残念ですね」

「もうすぐ、仕事もおわるさ。いつまでも手こずっているわけにもいかないからな」

鬼柳の言葉に紅葉はそうかえすと烏帽子をとり髪をといた。ぱさつと髪が散つてとたんに雰囲気かわる。実は頭のうえにのつていると肩がこつてしかたないのだ。肩に手をあてて疲れたように目をつぶる紅葉に鬼柳はおかしそうに笑った。

「髪をほどこいてゆえるのですか？」

「鬼柳がゆつてくれればいいだろう」

「夜叉様に怒られてしまいますよ」

女の髪をすける男はその女の恋人か夫だけだ。鬼柳はいままで紅葉の髪をといたこともゆつたこともない。



「大丈夫だ。いまは男だからな」

そういつた紅葉にすこしあきれながら鬼柳はいった。

「都合がよすぎますよ。それでは」

紅葉はそれをきいてすこし悪戯顔でくすくすわらった。二人は丸々としたお月様のもと、たあいもない会話をたのしんでいた。そこにはいつてきたのは正宗だった。

「紅葉様、結果がまし、あつ、すみません」

そういつて紅葉をみた正宗は部屋をでていく。成人した男性が髪をほどいた姿をみられるのは裸をみられることよりも恥ずかしいことなのだ。鬼柳は紅葉にほら、という視線をむける。

「正宗殿、かまわないからはいってこい」

「いっけいけません。はやく髪をゆってください」

紅葉は正宗にいつたがだんこ拒否した。紅葉からしたらもう肩がこつてすこし目もかすんできているのだ。ふたたび髪をゆいたいとおもわない。しかたなく女性にもどると正宗に「もういいぞ」といつてよびよせる。

はいつてきた正宗は鬼がいることにいまさらながらおどろいたが、すぐに無害であることを察すると紅葉のまえに座した。黒鬼妖王の件もある。

「結果がでしたよ。明日、けりをつけましょう。もうこれ以上煩わされるのもごめんですからね」

「明日か・・・正宗殿、私の女難の相はまだ健在か？」

正宗はいつしゅん紅葉の顔をじつとみつめるといつ。

「残念ながら・・・明日きをつけてくださいよ。失敗したらまた長々とながびくんですからね」

紅葉は「女難ね」とつぶやくと月をみあげた。そんな紅葉に手がたりているのをわかつていながら鬼柳はいった。

「手をかしましょうか？」

「それこそ、殺されるぞ」

紅葉の言葉に鬼柳は「そうですね」といつとかえっていつた。こ



うして紅葉と会っていることは昴摩は知らないのだ。

午の刻をつげる鐘が鳴る。ねずみ色の雲から雪がひらひらとふつてきている。すこしおおきな雪は道や屋根にふりつもっては白く染めようとしている。

東寺のとなりにある広場に紅葉と正宗はいた。東寺と朱雀大路にはさまれたその場所にはなにもなく壁と門だけがある。師走にはいり陰陽寮は年末吉日におこなわれる荷前のひきや晦日おほはらいの大祓や追儼ついななどの準備におわれてあわただしくとてもゆっくりおちつけない。

「紅葉殿、そろそろはじめましょうか」

正宗はそういつて呪のかかれた白い陶器を広場の中央においた。その場所には陰陽の印がかかれており不思議なことにそこには雪がまったくない。

「それではじめますよ」

正宗が器をわり、陶器に押しこめられている御霊を解放する。解放したとき外にもれてわるさをしないように正宗が結界をはる。結界内で暴れる御霊を紅葉が人形ひとかたの紙にうつしていく。すべて始末できたあと火で浄化し煙とともに天へかえす予定だ。

「急急如律令呪符退魔」

正宗は剣印をむすびながら唱えていく。正宗が唱えるのにあわせでカタカタと陶器は震えだし、印に罅がはいった。そこから臭気たちがこめるようにゆらゆらとなにかがでてきた。あっというまにあたりにはあふれでた御霊が渦巻いていく。

「臨兵闘者皆陣裂在前」

紅葉は真言をとえながら人形に押しこめていくが一体につき10体が限度だ。正宗は印をむすんだままぶつぶつといっている。陶器からは次から次へと御霊があふれでてきている状態だ。それでも、紅葉はおなじことを何度も何度もくりかえしていく。紅葉がつかった人形があっというまに数をへらしていった。

（あと一枚か・・・）



最後の一枚を懐からだす。しかし、陶器はとつぜんまっふたつにわれ炎のような御霊たちがかたまって人型の黒い影になった。

「なにっ」

正宗はそのとつぜんの変化にとまどったが紅葉はかまわず人形をなげつけた。しかし、人形はバチバチと火花をちらすと燃えて消えてしまった。

正宗は紅葉を援護するようになえる。

きゅうきゅうはあつうあつきたいさん  
「急急如律令悪鬼退散」

影は正宗の呪をはじくと紅葉に標的をあわせ襲いかかってきた。

「・・・っ」

紅葉が応戦しようと拳をにぎりかまえたとき紅葉のまえにたちはだかり影をはじいたのは鬼女だった。はじきとばされた影はうめき声をあげてたおれている。

「花夢の君」

鬼女は紅葉をみるとすまなさそうな表情をむける。しかし、それでも紅葉に恋焦がれるおもいでここまででてきてしまった。

「・・・ごめんなさい」

紅葉はすこしこまったような表情をみせたが優しくわらう。そんな紅葉に鬼女は手をのばそうとしたとき鬼女をねらって影が攻撃してきた。紅葉は鬼女をかばう。

「紅葉様っ」

影の腕が紅葉の背中に突き刺さり影はそのまま紅葉のなかにはいつてしまった。

（女難ね・・・）

紅葉は自分の意識がだんだん遠のいていくのを感じながらおもった。すこし、ふざけすぎたのかもしれない。

「紅葉殿っ」

紅葉の瞳がうつろなことを認めると正宗は戦闘体勢にはいる。鬼女は戸惑いながら紅葉をみていた。陰陽印をむすぶと紅葉を攻撃するが紅葉はなんなく弾き飛ばし、そのまま流れるように攻撃してき



た。

（っ、やはり私だけではッ・・・）

それでも今日は『爛王』をもっていないだけましである。しかし、正宗のはった結界もすぐにやぶれてしまうことになるのだろう。紅葉が外にできればややこしいことになるのは目にみえている。

「カラリンチヨウカラリンソワカ」

正宗は人形の紙をとりだすと式神をまねく呪となえる。そして、ふっと息をふきかけてばなすと虎があらわれた。正宗の式神は紅葉に牙をむけたが、紅葉はそれをよけるとおなじように人形の紙をだし呪もとなえず息をふきかけた。二体の式神は瞬時に正宗の式神をたおしてしまう。

りんびょうとちやかいじんれつざいぜん  
「臨兵闘者皆陣裂在前」

正宗はあわてて真言をとなえると邪破の印をむすんだ。紅葉は腕を交差するとそれをしのいだ。このままでは非常によくない。

「おどきなさいっ」

きゆうに正宗を叱咤する声がしたかとおもうと両脇からちいさな影が飛びだしていった。ちいさな影はあっというまに紅葉をとりおさえる。竹が紅葉の喉をしめつけていた。正宗はちいさな式神の一人にみおぼえがある。あるとき紅葉が抱いていた童だ。

「おさがりなさい。ここからは私が相手をします」

そういつてあらわれた女性美しい顔に印があった。正宗はそれを見たこともない女性にいった。

「あなたは？」

女性は正宗をみるのではなく、鬼女を一瞥するとなのかわりに自分の立場をいう。衣からのぞく腕は鱗がしきつめられ、爪はながく鋭利になっている。

「夫を勇めるのも妻の役目です」

そういつと紅葉に一直線にむかう。そして、その腹に風穴をあけて動きをとめた。いっさいの迷いのない攻撃だった。血をはきひざまづく紅葉を式神がささえる。沙那姫は紅葉の傷をおさえると紅葉



にいう。

「しつかりなさい。紅葉様ともあるう方がなんたるざまですかっ」  
叱責する沙那姫に紅葉の唇が微笑む。そして、瞳をみひらきブツブツとなにかをつぶやいたかとおもうとそのまま瞳をとじて眠りについてしまった。

「正宗様、ここですろしいから、禁呪符陣をひいてください」

正宗は紅葉の呪力を封じる印をえがいていく、そして呪をとねえた。沙那姫はたちあがると正宗にいい、さろうとする。

「正宗様、お手を煩わしますが紅葉様をよろしくお願いします。きつと目覚めることはないとおもいますから」

そんな沙那姫に鬼女はきく。妻となのつたことはどうでもよかった。だってあれだけの人だもの妻の一人や二人いてもおどろかない。だからこそ、慈悲の一夜がほしかったのだ。

「紅葉様はご無事なんでしょうか？」

沙那姫は軽蔑したような目をむけながらもその質問にこたえたのはほんのすこしの慈悲だ。

「大丈夫です。あれぐらいで死ぬような方ではありません」

そして、沙那姫は威嚇するように鬼女にいう。

「・・・ですが、もう紅葉様のまえにはあらわれないください。今度このようなことがあれば私があなたを始末します」

そうはきすすると沙那姫はこの場をあとにする。あの鬼女は沙那姫がもつとも嫌いな女の性格をしている。好いた男の顔もたてられずましてやこのように泥をぬるなんて沙那姫には理解できないし理解したくもない女の行動だ。

男の顔をたてるのは女の役割。献身的に尽くしてきた沙那姫はつねに紅葉のことをおもって行動している。沙那姫にとって自分を犠牲にしてまですべてを捧げてまで愛している人。そして、それが沙那姫の最大の愛の証。

寒空のした紅葉をとじこめているこの場所はまったくといって



いほど寒さを感じない。正宗はそのことにおどろいていた。寒いことも暑いこともなく適度な温度をたもっている。

「不思議ですね」

正宗はうえをみあげてつぶやいた。紅葉を中心に四方に結界がはってあるらしいが、物の怪も出入できれば人も自由に出入りできる。さえぎっているのは雪と風だけだ。とうぜんのように頭上には雪がふりつもり、なんだか透明の屋根があるみたいだった。

正宗のよこには二人の童姿の式神がいる。式神たちは紅葉から目をそらさない。あとき一瞬、紅葉の意識がもどったとき自分で影を封じたようにみえたのだが油断はできないということだろう。

「紅葉っ、紅葉ッ」

遠くからきこえる昴摩の声に正宗はきたなとおもう。声がきこえたとおもったらすぐに昴摩がふってきた。かけようとする昴摩を式神がとめる。青い竹に妨げられた昴摩は忌々しそくに式神をみたが、式神たちは動じることはなくいった。

「誰も紅葉様にふれることは許しません」

「大丈夫です。命にかかわることはありません」

しかし、まったく状況のわからない昴摩は納得できない。ましてや目のまえにいる式神はみたこともなければ誰の式神かもわからない。紅葉の新しい式神ではないことは目にみるにあきらかだ。

「信じられるか！紅葉がこんなことになったのははじめてなんだぞッ」

式神たちは竹をおさめると昴摩にいう。

「紅葉様がこうした戦法をおとりになるのははじめてではありませんん」

「昔はよくつかっていらつしました。紅葉様が敵をおさえているあいだに沙那姫様が元凶を始末するだけです」

沙那姫とともに暮らしていたころ紅葉は本体と駒がわかれていた場合にはよくつかった戦法だった。もちろん条件があつて、本体が駒を動かすのに大半の力をつかっている場合だけだ。



「オレは今の紅葉しかしない」

そういわれた昴摩はそういつて頭をかかえてすわりこんでしまった。そんな昴摩の姿をみて正宗はおもう。

（この人は・・・）

正宗は紅葉の昴摩への態度は他とは違うと感じているのだが、本人はまったくきづいていないようだ。まあ、こういうことは本人たちよりも他の者のほうが敏感なのかもしれない。

「あなたはつまらないことにばかり目がいくんですね」

式神の一人が昴摩にいった。式神たちは沙那姫がどういう経緯で紅葉の妻になったのかしっている。紅葉に恋心があつたわけではなかった。愛しいと涙に濡れた沙那姫に紅葉が憐憫の情をかけたのだ。紅葉のそばにいる代償はおおきかった。沙那姫は命をつなぐことも自身の命もあきらめている。

（このような者に）

紅葉と沙那姫のことをよくしっている式神は不甲斐ない昴摩に苛立ちをかんじる。とても好きにはなれない。いや、嫌いだ。

日も暮れて雪がふるなか結界にはうつすらと雪がつもり白い屋根になってしまっている。満場の月があたりを明るく照らしているおかげでそんなに暗いとはおもわなかった。月と星が隠れてしまうまえにかたをつけたいとおもいながら時がくるのをまつた。

沙那姫は宇治の大橋にたっていた。反対側から笠をかぶった僧があるいてくる。よく焼けた茶色い肌に法衣を身につけ数珠をかけている。気高い目をしているが、洗練されたものではなく傲慢さをかんじるものだった。

「お坊様、どちらへいかれるの？」

沙那姫はそういつて声をかける。僧は足をとめると沙那姫をみた。強気な目にきゅっとした唇。整った顔は美しい。一目で人外の者だとわかるほどの美しさだ。

「病払いをしに」



僧の言葉に沙那姫はくすくす、おかしそうに笑う。そして、笑いをとめると僧にいった。

「あなたはあの方をうまく操ったつもりでいらっしゃるのね」

そういうって、沙那姫は紅のぬられた自身の唇にふれる。朱色の紅が指先につき、それをみながらさらに言葉をかける。

「気高いお坊様。戒律を破ってしまったらあなたはどうなさるかしら？」

「なに？」

僧が意味もわからないというようにいう。そんな僧に沙那姫は紅をなげつける。指についていた紅は僧の体につき動きをふうじた。しかし、完全に封じたわけではなく手足の身動きぐらいならとれるかるい縛をかけただけ。しかし、僧はそれすらはねかえせないようだ。

「お坊様、あまり無理をなさるからそういうことになるですよ。あなたのしかけた病の呪はあの方に囚われて解くこともできないのでしょう？」

沙那姫はそつと手をおく。その仕草はとても女らしいものだが、ゾツとする恐怖もはらんでいる。指先で僧の輪郭をなぞるとつつけていった。

「このままあなたを食べてしまってもいいのだけど……」

「そ、それはっ」

怯えた表情をみせたことに沙那姫は満足するとすこし残念そうにいった。修行だけはしっかりしていたその体はそれなりに美味しそうだっただけだ。まあ、紅葉とくらべるとくらべものにならないのだが。

「あの方に怒られてしまうからやめておくわ。さあ、どうしましょう？五戒のひとつを破るのもみものですけど……」

沙那姫から逃げようと僧ははしりだす。沙那姫は三本の指をならした。パチンという音に反応したように僧の足はもつれてこけてしまう。



「逃げてはだめよ。お坊様。あなたにはききたいことがあるの。鬼女をしむけたのはあなたでしょう？」

答えようとしない僧に沙那姫はこれ以上追求しようとはせず歩きだす。僧は自分の意志とは関係なく足がうごいた。沙那姫のあとをついていくように足がうごくのだ。

操られてついたところは朱雀大路と東寺にはさまれた広場だった。そこには白い雪がうかんでいて、そのしたには陰陽の頭と横たわる紅葉がいた。いや、その他にも童姿の式神が二体と昴摩もいる。

「さあ、お坊様。自分のなさったことの後始末をしてもらいます」

僧は怪訝な顔をして沙那姫をみた。昴摩は沙那姫がつれてきた僧が紅葉をこんなふうにしたとおもうと頭に血がのぼってくる。こんなふうに紅葉が自分の身をつかったことに困惑がおおきい。

「おやめなさい。紅葉殿はなにか考えがあるようですよ」

今にも僧に飛びかかりそうな昴摩に正宗はいった。正宗を睨むようにみつめたが正宗も瞳で制する。正宗の目には紅葉がなにかをつかもうとしているようにおもえた。それを組んでいるのだろうか。妻となのつた女もまどろっこしいやり方をわざとえらんでいるようにおもえる。

沙那姫は紅葉の名をよびながらその頬にふれる。人形のように動かない紅葉を目覚めさせるための儀式。

「さあ、起きて。紅葉様」

紅葉の指がぴくつと反応する。それでも目蓋をあけようとしない紅葉に沙那姫はさらに言葉をかける。

「いけないかた。目覚める方法を忘れてしまったの？さあ、手伝ってさしあげるから目を覚まして」

そういつて紅葉の頬から手をはなそうとした。沙那姫の動きにあわせるように紅葉は目を覚ます。起きあがった紅葉の目は正気をたもっていない。紅葉は虚ろな目のまま僧をうつしだす。

「お坊様、紅葉様に悪いことをなさったでしょう？だから、お坊様が自分であとかたづけなさってください」



沙那姫の言葉を合図にしたのか紅葉が動きだす。紅葉の手にはいつのまにか短刀が握られていた。それが僧の首をおとすまえに正宗と昴摩は紅葉の動きを封じる。

「どういうことですか?!」

沙那姫がなにをかんがえているのかわからず正宗はいった。

「紅葉っ、おい、目えさませ!!」

紅葉の邪魔をした正宗と昴摩を沙那姫の式神がおさえる。

「なにを?!」

「邪魔だッ!!」

沙那姫は僧にちかづくと一本の短刀をわたす。地にふした短刀はつめたい光をはなっている。

「お坊様、丸腰では分にあわないでしょう?これをお使いなさい。紅葉様を殺せばあなたは助かる」

「しかし、それではワシは・・・」

「五戒を破ってしまう?くすくす、ではあなたが命をたてば術はきえて紅葉様もともにもどる」

僧の言葉に沙那姫はおかしそうにいった。紅葉はふらふらと僧にちかづいてくる。沙那姫は紅葉に道をあけるといった。

「さあ、紅葉様」

紅葉は俊足で僧の首をつかまえた。僧の首をおさえたまま紅葉はみおろす。僧は手探りで短刀を探しだすとつかまえる。にぎりしめて紅葉の腹にむけたが突き刺すことができない。僧が戒律をまもるのは仏の加護をつけるため。戒律を破れば死後地獄におちてしまう。紅葉は僧の首をおさえたまま短刀をふりあげる。死にたくない。地獄にもおちたくない。僧はどちらも選べずただ、ふりおろされる刃の冷たさをみていた。

「ひっ」

僧はどちらも選べず紅葉から冷たい光を放つ刃から目をそらす。ザクツと短刀が音をたてた。紅葉は短刀から手をはなしてたちあがった。



「紅葉様、おいたがすぎますよ」

沙那姫の言葉に紅葉はにつこり笑う。そして、欠けはじめている月を指さしていった。それは遙か昔をおもいださせる言葉だ。二人の思い出の言葉。

「月はみたことある？不満は彼にいえばいいよ」

「あら、私の不満をきくのは鬱陶しいのね」

「君といるのに楽しくすぎさないともつたいないでしょう？」

紅葉につれられてはじめて地上にでて満月をみたときに交わした言葉。あるとき沙那姫は父の愚痴ばかりをいったのだ。そして、いまも沙那姫は嬉しそうに笑う。

「はあ、はあ、はあ」

荒い息をして状況がまったくのみこめない僧は呆けた顔で紅葉をみあげている。紅葉はそんな僧の視線にきづいていう。

「覚悟もないのに半端なことをしていると都ではすぐに足をとられてしまうよ」

今回のことはこの僧が自分の能力を帝に認めさせ自分の地位を確立させようとおこした騒動だ。まず、成仏してない御霊をあ陶器に納め、川の水を解した病を流行らせた。納めても度々おこる病に手をあげかけたところ自分が問題を解決しにいくという筋書きだったのだろう。

「どうして・・・」

僧の言葉に紅葉はおかしそうに笑った。

「覚悟がないからすぐばれるんですよ。病はたしかに高熱や湿疹をともなっていたけど、不思議なことに命をおとす者はいなかった。

これはもの凄く不自然なことで他に意があると暗示しています」

正宗もきづいていたが元凶がどこにあるのかわからなかった。紅葉がまどろっこしいことをしたのはこのためか。この僧は実力があるがために悪しきかんがえの者に利用される恐れがある。覚悟がない者はしらぬまに誰かの手に転がされて後々、厄介なことになりかねない。目先の欲に目を奪われて滅びていく者などこの都には腐る



ほどいるのだ。

「なるほど……」

正宗がつぶやく。意に解したようにいった正宗に紅葉はふりむく。そして、掌にふうと息をかけた。御霊をとじこめた紙の人形が紅葉をかこむように円になるとまわる。紅葉の掌には紅葉にとり憑いていた影が姿をあらわし自分からぼつと赤い炎をあげた。それを合図に他の人形たちも燃えて消えてしまう。

「力のある者は忘れがちだが、我々が術を使うということはつねに危険をはらんでいる。おおきな術になればなるほど呪がかえされたとき、予測不能な動きをしたとき、術者は身をもつてその反動をうける。力をえること、力をふるうこと、何かをするときには覚悟がいるんですよ。いまのお役所陰陽師たちにはわからないかもしれませんがね」

正宗はそういうと僧の短刀をひろう。正宗がさわったとたん短刀は一枚の笹の葉にかわってしまった。正宗はぷつと笑うとその笹を紅葉にわたす。

「ほんとうに人のわるい人だ。これでは紅葉様は死にますまい」

「ワシは……試されたのか？」

僧の言葉に沙那姫がいった。

「試す？あなたごときそんなことする価値もないわ。紅葉様はよいな思念をのこしたくなかったのよ」

沙那姫はそういうと紅葉の腕に甘えるようにならみつく。そのんな沙那姫を拒否することもなく紅葉は正宗にいった。

「正宗様は人使いがあらいですからね。すこしでも仕事はふやさないうちに予防しないと……さあ、帰るぞ昴摩」

紅葉はそういつてその場からさつていった。呆けて沙那姫と紅葉のやりとりをみていた昴摩は紅葉はみると声をかけた。沙那姫はムツとしたがこれも紅葉の意志ならしかたない。

のこされた正宗は僧に背をむけると仕事がおわった開放感に腕や背筋をのばす。そして、なにもいわずにさつていこうとした。そん



な背中に己の咎をとるように僧はいった。これだけのことをして咎がないわけがない。

「ワシは……」

正宗は首の骨を鳴らしながらいふ。紅葉もこんな終焉を予想していたのだろう。滅びゆく都にわざわざしがみつくことはない。しかし、都が滅びるとはかんがえもつかない者たちはここに固執するのだろう。

「病送りも完全に完了してもう仕事はおわったんです。これからいろいろと暮れの行事もひかえているので仕事はすくないにこしたことはない」

そういつて正宗もこの場を後にした。陰陽寮にかえたら今回のことにたいしての帝への訴状を書かなくてはいけない。それだけではない荷前、大祓、追儼、その他にも年末年始の挨拶にいろいろとやることはあるのだ。

夜があけて、月と太陽がともにあらわれる冬の夜明け。朱雀大路をまっすぐ歩いて正宗は職場へともどっていった。

月と太陽のいれかわる空をみながら紅葉は酒をのんでいた。熱い酒からは湯気がでている。火桶を背において紅葉はひとり酒をのむ。そんな紅葉のもとに美しい人が姿をあらわした。

「花夢の君、こんなところにきては妻になにをされるかわからないよ」

紅葉はそういいながら朝もやのなかから鬼女の手をとる。鬼女はすまなそうに紅葉に顔をみせた。

「ごめんなさい。私はただあなたの役にたちたくて……」

紅葉は鬼女の頬に冷たい自分の手をおくとうえをむかせる。鬼女の瞳は濡れていて紅葉に救いを求めるようにみえた。

「可愛い人。夜はすぎてしまったから別れの口づけでもしようか」

紅葉の言葉に鬼女はおどろく。紅葉はそんな鬼女にやさしく唇をかさねた。鬼女は閉じた瞳から一筋の涙をながして朝もやとともに



きえていった。

「安らかに眠るんだよ」

紅葉は最後の言葉をかけて部屋にもどろつと階に足をかけた。そこには腕を組んで拗ねている困った竜女の顔があった。

（あら、あら、困ったものだ）

紅葉はおもいながら沙那姫の手をとる。沙那姫はふんというようにその手を叩くとそつぽをむけてしまった。

「拗ねている顔は君には似合わないよ」

紅葉はそういいながら沙那姫に微笑みかける。すると沙那姫は臍をまげたままいった。

「そんな笑顔では私はだまされなくてよ」

「困った人だ。遙か昔に海の城でみかけたときはそんなふうに捻くれているに」

紅葉がいった言葉に沙那姫は嬉しそうに微笑むと紅葉にいう。

「私とのおもいだしてください」

「もちろん。君がお父上と喧嘩して巻きこまれたことも、よく月をみながら君の膝で眠ったことも全部おもいだしたよ」

沙那姫はうれしそうに紅葉にだきつくとそのまま紅葉をおしたおしてしまう。そして、紅葉にいった。

「私との最後の約束も覚えていらっしゃる？」

機嫌をなおした沙那姫に紅葉はハハハとおかしく笑うといった。

「覚えているよ。“もし、忘れてもかならずおもいだしてくださいね”だろう？」

沙那姫は紅葉に馬乗りになったままうれしそうにほほえむ。ずっとずっと紅葉のそばにこれなかったのはおもいだしてもらえない寂しさに耐えられる自信がなかったから。でも、昇摩のことをきいて意をけつしてでてきたのだ。その沙那姫の喜びがわかるだろうか。そんな沙那姫に紅葉はきゆうに真面目な顔になるとそつと沙那姫の腹部にふれていった。

「苦しくない？」



きづかうような言葉に沙那姫はとろけそうな顔をむけるとそっと紅菜の手に自分の手をかさねて静かにいう。

「ええ、だって紅菜様の大切なものですもの」

沙那姫が自分を犠牲にしてまであずかっているもの。紅菜はそんなこともいっしょにおもいだしてくれたのだ。これが沙那姫が紅菜にむける最大の愛の証し。遙か昔、紅菜自身がうみだし、きたる時がめぐるまで保管されるもの。

その言葉にほっとしたように紅菜は表情を緩めると沙那姫とみつめあった。

「おい」

二人の世界は不機嫌な昴摩の声でさえぎられた。視線をむけると鬼らしい昴摩の顔がある。怒っているのは目にみえてわかる。しかし、そんな昴摩よりも後ろにいる螢蘭の姿に紅菜はいやな予感があった。

「どういうことだ？」

あきらかになにか誤解をしている昴摩はほうっておいて、いやな予感をぶんぶんさせている螢蘭に質問をする。

「師匠、なにかようですか？」

螢蘭は沙那姫にかかる手で挨拶すると紅菜にいった。

「昨日の夜、さぼったでしょう？」

にやっと意地のわるそうな笑みをうかべていう螢蘭に紅菜は反発した。だって、あればどうかんがえてもできる状況じゃなかった。

「それはっ……」

うるさくいう紅菜の口を問答無用と掌でぱんと押さえると螢蘭は容赦なくいった。

「はい、約束破ったら修行でしょう？そういう潔さのないことでは立派な人にはなれないわよ」

「つつ、ふぐ、ふく、」

紅菜は声にならない抗議をしたがまったく意味をかいさない。紅菜のうえにのっかっている沙那姫に螢蘭はいった。



「と、いうわけで沙那姫、準備よろしく」

「はい、わかりました。支度してきます」

そう素直にいうと沙那姫は紅葉の修行の準備をはじめにとつと部屋をでていった。紅葉にたいして疑惑だらけの昴摩に螢蘭はいう。

「おまえもついてくるか？紅葉のついでにいっしょにみてやるわよ」

「もちろん！オレもいく」

「よし、よし。みっちり鍛えてあげる。ああ、今回は忙しい！鬼のガキが五人に紅葉だろう。久々の修行で腕<sup>うで</sup>になるぜ」

口をおさえられたままの紅葉はあきらめたように言葉をはつすることをしなくなり、かわりに心のなかで叫んだ。

（だれか助けてくれ　　）

もちろん誰も助けてくれるわけがない。なにを勘違いしているかはわからないが、昴摩はこれから自分の身におこることがわからないでいるようだし、沙那姫は義父義母のような螢蘭、菜稚琉には逆らわない。



### 3 鍛錬

#### 3・鍛錬

紅葉はげつそりする気持ちで眼前にひろがる風景をみていた。みおろすと池と木々の木肌が雪化粧で白くなっている。紅葉をのみこんだあの桜もいまは眠っているかのように葉をおとして枝に雪化粧をほどこして肌をさらしていた。

物好きなのか馬鹿なのか紅葉とおなじ運命を共にする者たちが五人、紅葉の後ろに控えている。昴摩はともにするのはしかたない、というか巻きこんでやるにきまっている。しかし、あとの四人はまったく縁もゆかりもなかった。いや、しいていうなら昴摩の兄弟といただけだろうか。

「紅葉様、あなたらしくないそんな表情を浮かべて」

冷たい風に吹かれていた紅葉に鬼柳が声をかけてきた。なかなか利口なやつかとおもっていたがどうやらただの馬鹿のようだ。

「ああ、憂鬱でな……」

力なくいうと紅葉は遠い目をして空のむこう、遠い風のさつていく地をみつめた。自分も風とともにさつていきたい。

鬼柳や他の兄弟たちも黒鬼妖王に紅葉とともに修行ができる。腕をあげるのにもいいし、何より紅葉とおちかづきになれるぞといわれ今さら修行かとおもいながら参加した。つまり、ここにいるのは紅葉の夫候補の者たちばかりだ。

紅葉に文を送っても読まずにつきかえされてくるし、直接口説きにいかうとしても昴摩が目を光らせていていっこうにちかづくことは難しい。しかも、妻とかなのる女まででできたのだ。そんななかこんなおいしいはながくれば誰だって飛びつくにきまっている。紅葉はそんな意図にはきづくこともなく遠くをみつめこれからおきるわが身の不幸を嘆いていた。もうこの地にもどってきたくはなかった。しかも、極寒の冬の季節にこうなるとは不幸をとおりこして



笑えてくる。

（発狂したふりして逃げようかな・・・）

紅葉らしくもないことをかんがえていると菜稚琉と螢蘭、それとなぜか黒鬼妖王があらわれた。菜稚琉は紅葉と視線があうところり微笑む。

「沙那姫、具合がわるいのか？」

修行のときはかならずそばにいてみている沙那姫がいないということとは体の具合がよくない証拠だ。無理をさせてしまったから。

「大丈夫ですよ。すこし熱がでているだけですから」

菜稚琉はそういつて紅葉を安心させる。昴摩も鬼柳もその言葉におかしいとおもった。童女である沙那姫が体の具合をわるくするなんてかんがえられない。ましてや、熱をだすなんてありえないことだった。

「そうか。たいしたことないならよかった」

ほっとしたようにいった紅葉の表情には慈しみすらうかんている。昴摩はそのことがきにいらなかった。都をでるまえのはなしもまだついていない。

（やっぱり・・・）

紅葉はたしかに沙那姫の腹をおさえて心配そうにしていたのだ。

いまの紅葉は女だから子ができるとはおもえないが、転生前の紅葉が男ならありえるはなしだ。

「さつさと始めるぞ」

螢蘭はそういう。沙那姫が心配な紅葉はそれをきいて自発的に池にとびこんだ。もちろん、きている衣を脱ぎ捨てて肌をさらして飛びこんだ紅葉に目をむいて他の五人はみている。いや、昴摩だけはちがった。紅葉をおうように池に飛びこむ。鬼柳も昴摩をみてそれをおつていく。

「おら、さつさと飛びこめ」

螢蘭はそういうと残りの三人の尻を蹴り飛ばして池のなかにおとしていく。どぼーん、と水におちる音がきこえてくると螢蘭は岩の



先端にすわってしたをみた。もう、さきに飛びこんだ三人は顔をだして浮いてきている。紅葉はなれた顔で泳いでいるが、あとの二人はなんとかついてきているレベルだ。

「おお、さすがだな」

黒鬼妖王は三人の姿をみおろしながらいった。この池には術がかかっている。妖力や霊力を封じる術と手足にかかる成人10人分の重さがかかるようになっていいる。つまり、この深い池のなかでただ泳いでいるだけでも大変なことなのだ。

「おーい、今日は日が完全に昇るまでがんばれ」

胡坐をかいて螢蘭は声をかけた。とりあえず、初日はこんなものでいいだろう。それをきいて昴摩と鬼柳は青ざめた。しかし、紅葉はすこしばかり笑みをうかべる。まだまだこんなもの屁でもない。

「俺の息子とりあえず三人は減ったな」

いつこうにあがってこない三人の息子をみると黒鬼妖王は縁起でもないことをいう。菜稚琉はその言葉をきいて池をみに螢蘭たちにちかづいた。菜稚琉がみたときには鬼柳が力つきて池にひきもとされるどころだった。

それをおうようにしばらくして昴摩が沈んでいく。それをみて菜稚琉はパチツと指をならした。その音に反応して池のなかから命の危機を感じてそうな者をひきあげる管狐の姿があった。

「はやいなあ」

三人があがってきたことを認めると螢蘭はそういつてしたにおりていく。池のなかにはおちず岸に着陸すると、のびている三人の横腹を蹴った。

「ごほ、ごほ、なんでうちからがつ、はあ、はあ」

妖力にたよって生きてきた者にとってそれを封じられましてや重りをつけて水に落とされれば無力な赤子とかわらない。螢蘭はむせている三人にいう。

「つづけるなら池にはいれ。無理ならとつと帰れ」

無慈悲な螢蘭の態度に顔を真っ青にしている。しかし、三人にも



誇りがあるのだろう。とぼとぼと池のなかにはいつていく。そして、やはり浮いてこない。管狐が助けて螢蘭が強制的に意識をとりもどさせる。このことのくりかえしだ。

しかし、螢蘭が首をながくしてまっている昴摩と鬼柳はなかなか管狐に助けられるような事態にはおちいらぬ。浮かんでは沈み、また浮かんでは沈んでいくをくりかえしていた。

「螢蘭、あとはまかせましたよ」

うえから菜稚琉はいうとさつていった。沙那姫の看病にいかなくてはいけない。なぜか黒鬼妖王もいっしょにさつていった。

結局、この日最後まで沈みもせずにつつと浮いていられたのは紅葉だけだった。きを失って助けられたのは鬼柳が二回、昴摩が一回、あとの三人は話しにもならない。

「よっしゃ、今日はおわり」

螢蘭の言葉を合図に紅葉は岸まで泳ぐと横になる。水からでる瞬間がもつとも体がおもたく感じる瞬間でそれにバランスをくずして池にひきもどされること二、三回。それでも、紅葉は岸にあがって仰向けに横になった。

昴摩や鬼柳もおなじように横になっている。それぞれの手足についているのは細い石の輪だ。この石が信じられないほど重い。

「はあ、はあ、はあ」

それぞれが胸を上気させてあらい息をしている。そんななか紅葉はいちはやくおきあがると凍っていく衣もきにせずさつていこうとする。外気にさらされた太ももや肩や背、腹までも真っ赤になっている。胸にまいていた白い布とかわりなかった肌がいまはまったくといっていいほど異質な色になっていた。

そんな紅葉の姿を昴摩は横目でおうただけでそれ以上はおうことはなかった。その姿に鬼柳は不思議におもったが、鬼柳自身それころではなかった。

濡れた衣を脱ぎすてなにもまもっていない冷えきった体に紅葉は



一枚の衣をまとう。てきとうに腰紐で前をあわせると足早に沙那姫の部屋へと歩いていった。そんな紅葉のようすに菜稚琉は記憶がもどったことをしる。

（沙那姫とのおもいだしたのね）

沙那姫とともにいたころ紅葉の家はここだった。妻となった沙那姫に螢蘭が部屋をあたえ紅葉が死ぬまでそこでともに暮らしていた。紅葉は転生出離を七回くりかえしている。沙那姫とであったのは紅葉が五回目に生まれかわったときだ。沙那姫は熱烈に紅葉を愛して妻の座についた。はじめて紅葉に婚姻をむすぶことを許した相手が沙那姫だ。そのほかにも紅葉のそばにすることを許した相手はいたが、彼らもまた沙那姫のように紅葉の大切なものをあずかっている。

「紅葉様があんな顔をなさるとはおもいませんでした。沙那姫とはどんな人物なのです」

そういつてあらわれたのは黒鬼妖王だ。菜稚琉は黒鬼妖王に微笑みかけるといった。黒鬼妖王はその笑みを曲者だとおもっている。いつけん優しく慈悲深い微笑のようにおもугが菜稚琉自身のかんがえや本心がどこにあるのかわからない。螢蘭や菜稚琉とかかわればかわるほど紅葉があんなふうに育ったのが納得いく。

「沙那姫は紅葉にとって特別な相手ですよ。もちろん私たちにとっても娘のような存在ですけどね」

その言葉に黒鬼妖王は沙那姫が紅葉はじめ螢蘭、菜稚琉に大切にされていることがわかる。

二人がそんなことをはなしているころ、紅葉はもう沙那姫の部屋にいた。すこしつらそうに息をして頬を火照らしている沙那姫の顔にふれる。

「紅葉様？」

沙那姫は頬にあたる冷たく心地よい手に目をあけた。すこしでも紅葉の姿をみていたくてつらい体をおこし、こうして目を覚ますのは久しぶりでうれしかった。昔からこうして寝こむと紅葉はそばに



いてくれるから。

「おこしてしまったか？」

「手が冷たくて」

「そうか、すまん」

そういつて手をはなそうとした紅葉の手をひきとめると「気持ちいいです」といつて笑う。紅葉はほつとしたように再び手をおく。紅葉のきづかうような顔に沙那姫は懐かしさすらかんじてしまう。

「はやくよくなっていつものように世話をやいてくれ」

紅葉の言葉に沙那姫はくすくす笑うと「はい」といつてまたすすうと眠りについた。昴摩は物陰でそんな二人の姿をみていた。そして、自室へもどる。けつきよくその日は紅葉が昴摩のもとへもどってくることはなかった。

沙那姫は明け方には熱もさがりもとどおりになっていた。目を覚ました沙那姫はなにもまとわず寒いなか手をにぎって眠っている紅葉をみる。自分が眠ったあと紅葉はあの男のところへもどっているとおもっていた沙那姫はそんな紅葉の姿を喜んだ。そして、冷えきった体を温めるように自分の布団を紅葉にかけたとき、紅葉が目覚めた。

「お風邪をひいてしまいますよ」

沙那姫はそういつて紅葉に声をかけた。眠たそうにぼーうとしている紅葉をおかしそうにみつめると沙那姫は紅葉によりそった。そして、意地わるなことをいう。

「鬼の坊やのところにはもどらなかつたの？」

「昴摩・・・？ああ、昨日は君が心配で・・・」

「まあ、よろしいの？」

「なぜ？」

なぜと不思議そうにいつた紅葉を沙那姫は拗ねた気持ちでいう。だって、やっぱりなんにもわかつていない。あのころから紅葉はちつともこつち方面は無垢なままだ。恋愛ごっこはしても恋愛をすることはしないのだろう。他には鋭く、自身には鈍い紅葉にはやはりは



がゆいものを感じた。

「もう、紅葉様ったら」

急に機嫌のわるくなった沙那姫に紅葉はさらに不思議そうな顔をして首をかしげた。そんな部屋に螢蘭がはいってくる。紅葉の稽古着ももってきていた。

「おい、メシ食ってさつさと修行はじめろ」

不思議顔で呆けている紅葉とご機嫌ななめの沙那姫をみて状況をさつすると螢蘭はおかしそうに笑ってご機嫌ななめなお姫様をだきあげる。そして、頬に口づけると紅葉にいった。

「さつさと準備しろよ」

そういつて沙那姫を抱きあげたままさつていく。菜稚琉が沙那姫にあたらしい衣を新調したのだ。それをきせるといつて菜稚琉は朝からはりきっていた。

のこされた紅葉は稽古着をきるとそのうえに衣をはおった。そして、きとうに腰紐でしる。溜息は終始でる。男装の螢蘭はウキウキしているようにみえた。

（今日はきついな）

昨日とおなじように岩のうえにいる。今日は沙那姫もいて菜稚琉と黒鬼妖王との三人は赤い敷物をひいたうえにすわっている。ふっている雪がかからないようにおおきな傘が一本、羽根をひろげている。敷物のうえには温かいお茶と団子がおかれていてちよつとした雪見会場になっていた。

「まずは池に一刻はいってもらう」

紅葉は潔く体中の筋をのばして準備を整える。他のものは昨日より時間が短いことにすこし安堵した表情をしているが、甘い。重りをつけて水に浮かぶなどたいしたことではない。まず、といった螢蘭の言葉は昨日のことなど屁でもないことを物語っている。ここからがほんとうの地獄のはじまりだ。

「紅葉様、がんばってくださいね」



沙那姫はそういうと手をふった。あどけない顔をして元気づける沙那姫に紅葉は手をふると気合をいれる。昨日のはほんの手慣らしだ。本番は今日から。

（気合いれないと死ぬ）

紅葉はそうおもうとまた一番に池に飛びこんだ。水にはいった瞬間、肌を幾本もの針が突き刺さる感覚はすぐに麻痺し、つけたままの重りが手足の枷になる。浮きあがるこつはなるべく体に力をいれないこと。肺に空気をためることだ。

無駄な力や無駄な動きをするとよい体力はつかうし、どんどん体は沈んでいく。ここであるべく体力を温存させなければいけない。次、また次とまだまだ修行はつづくのだ。

なんとか一刻がたち紅葉たちは池からあがった。螢蘭はそんな紅葉たちにうえをさしていった。

「次はのぼれ」

つまり飛びこむまえの場所にもどれということだ。しかし、あがったばかりのだるい体には崖をのぼろうという気力はない。しかも妖力がつかえない。身体能力だけでのぼらなければならないのだ。それでも、妖かしのほうがすぐれてはいるのだが。

「どうやって？」

ひとりが質問をした。そびえたつ岩はところどころ段になっているわけでもなく、ましてや足や手のかける場所があるとはおもえなかった。

「ああやって」

螢蘭はそのこたえにあっさりこたえる。螢蘭が指さしたさきには紅葉と昴摩、鬼柳の姿があった。のぼりなれている紅葉はぴょん、ぴょん、のぼっていくが、昴摩と鬼柳はぴょん、ぴょん、ぽと、という感じで池にふたたびおちたりしている。

「……」

三人は信じられない者を見るように三人をみていた。しかし、自分のひくい母親から生まれたふたりには負けられないという意地と



誇りがやるきをおこさせる。しかも、ただの人間の紅葉がもう、うえに到着しているのだ。

「よっしゃ！」

「ハアッ！！」

「やあッ」

それぞれが気合をいれて飛びたつ。しかし、足がひっかかる場所もみつからず落ちていく者、なんとか手をかけぶらさがる者。それぞれだが、そんな者たちのよこを螢蘭はふた飛びですぎていく。あつさり頂上についた螢蘭はにやつと意地のわるい顔をする。とちいさな石を落とした。

「あ、手がすべった」

ぴゅうつうと音をたてておちている石はみごと昴摩の顔面にくいこむ。とうぜんだがそのまま落下していく。落下した昴摩にまきこまれてあと二名も落ちた。

「ああ、わりい、わりい。死んだか？」

螢蘭のいっさい悪気も心配もにじませない声がふってくる。ひよいと顔をだした黒鬼妖王の手にはたくさんの小石。悪戯をみつけた子供のような顔で、ひとつ、またひとつ、石をおとしていった。

「わあッ」

「チッ」

それぞれが石をよけておちていく。または粘ってうえに飛びたつ者もいるが螢蘭のすこしいきおいをつけた石が直撃する。しかも、いささかおおい。

「さつさとのぼらないからだ」

紅葉はとても楽しそうな螢蘭と黒鬼妖王をみてつぶやいた。“やれ”といわれて時間がかかればそれなりに負担がふえる。つまり、いうことをきかないとそれ以上のことがまっっているというわけだ。

紅葉がいよいよでも憂鬱でもなになんでもすすんでさつさとして行動するのはそのためだ。そうじゃなかったら、きがすすまないことをやってたまるか。



「よしよし、さすがわが息子たちだ。みな死なずにもどってきたな」  
黒鬼妖王は豪快に笑いながらいった。死ななければ、いや、死んでもいいよ、てきないいかただった。ぼろぼろなうえに服は水と外気の冷たさに硬くなっている。先にうえにあがっていた紅葉は熱いお茶と火で服を乾かしていた。

「おい、なに休んでんだ。さつさと立て」

螢蘭は座りこんだり仰向けになったりしている者たちにいう。紅葉はもう次の修行場を遠い目をしてみている。紅葉の視線には幾本もの杭がうたれた場所がうつっていた。

「てめえらが、時間かけるから紅葉の修行になんねえじゃねえか」

柄のわるい螢蘭の言葉に三人はむっとする。妖力をたかめるための修行なら納得いくが身体機能なんてあげてもなんのためになる。戦いにつかうのは妖力だ。妖力がすべてなのだ。

「紅葉、さつさと次ぎやるぞ」

その言葉に紅葉は溜息をつき、打たれている杭に手をかけて逆さになった。そのとき、菜稚琉が声をかけた。菜稚琉の言葉に螢蘭は空をみる。

「ご飯の時間ですよ」

「もうそんな時間か」

飯をあたえられるとはおもっていなかった五人は意外そうな顔をしたが、あからさまに喜びをあらわした。

「はあ、これで休める」

紅葉はそういつてとうぜんのように沙那姫のよこにすわる。その紅葉のよこにまだ動ける鬼柳がよこにすわった。それぞれてきとうにすわると空から食い物がふってくる。菜稚琉の管狐が肉、魚、根菜に山菜を用意してくれた。きちんと調理されている。

「いただきます」

紅葉は手をあわせてそういうとまず肉をとる。豪快に手でかぶりついた。その姿に鬼柳もほかの者たちもおどろいた。肉を食べるとはおもっていなかったし、こんな豪快に食事をするとは想像もつか



なかった。

「紅葉様もこんな食事なさるんですね」

鬼柳の言葉に肉をほおばりながら紅葉はこたえる。

「ああ、なんでも食わないとこれから体がもたないからな」

紅葉は昔をおもいながらいった。

（実戦の修行じゃないだけまし）

紅葉が幼いころ実戦の修行をうけたときは死ぬかとおもった。螢蘭の竜、菜稚琉の管狐がこの広い森で紅葉をしとめようとごめいしているのだ。もちろん、食事も満足にとれず、半年追いかけまわされた。その半年をなんとかのりきったとおもつと今度は菜稚琉と螢蘭がひかえていたのである。

「紅葉様、お野菜もお米も食べて。お米を食べないと力がでないでしょう」

そういつて沙那姫はおにぎりを紅葉の口にいれる。紅葉はおにぎりをくわえてもぐもぐする。すると今度はお茶さしだす。沙那姫からお茶をうけとると紅葉はそれを飲みほす。

「ふう、師匠。食べおえたらあれ？」

紅葉の質問にかんがえるようにいう。螢蘭はもう食べおえていてお茶をのんでいる。紅葉ははいるだけ食べているという感じで他の者たちがあとを考えているのに紅葉にはまったくその気配がない。

「そうだな。杭のやつ四刻しようかとおもったが、もう昼だしな。

昼寝かな」

螢蘭の意外な言葉に昴摩がいった。

「昼寝できるんですか」

「ああ、よく動いて、よく食って、よく眠って、よく頭動かす。そうやって体はつくったほうがいいからな」

それをきいた紅葉はたつぷり食いおわって沙那姫の膝に頭をのせてよこになった。さつさと目をつぶる。沙那姫は紅葉の髪に指を滑らせていった。

「もうお食べにならないの？」



「ああ、寝る」

くすくす笑うと沙那姫は赤子を眠りにつけるようにぼん、ぼん、と寝かしつけるような仕草をする。紅葉がそんな調子では口説くところではない。肉体的にもつらい状況でとてもきのきく口説き文句がでるとはおもえない。それに、螢蘭、菜稚琉の許可もえなければいけない。黒鬼妖王の息子たちは本来の目的が達成できないままだ。「そうだ、沙那姫もやるか？暇だろう？」

螢蘭はそういいながら菜稚琉の膝でよこになっている。沙那姫はすこし思案する。こうしてみているだけというのはつまらないものである。今度の杭には菜稚琉だって手をかす。そうなるとひとりで見ているといけなない。

「やろうかしら……」

「だめだ。病みあがりだろう」

もう眠ってしまったとおもっていた紅葉がいった。沙那姫が参加することをとめる。

「でも、暇ですし、それにもう大丈夫ですよ？」

「だめ。無理できない体だろう」

紅葉は目をあけると強めにいう。沙那姫はそこまでいわれるとしかたなくあきらめることにした。

このあと二刻ほどみな安らかな眠りについた。結局、この日はこれでおわりとなった。おきてきた者たちは体中の軋みに悲鳴をあげた。腕一本動かすだけで涙がでるほど痛い。

梟も鳴かぬ静かな夜。月も星も眠る暗い夜のなか足音がやけにおききこえる。カタと音をたててはいつてきた者を沙那姫は静かに見守る。紅葉のよこで寝ている沙那姫は目をつぶったままその者がよく眠る紅葉をつれさってしまうのを黙認した。

足音が遠ざかっていく気配に沙那姫はそつと目蓋をあけるといなくなってしまうた紅葉のぬくもりを探すようにそつと手をのばす。そこには紅葉のぬくもりがあった。



「・・・・・・・・」

そのぬくもりに沙那姫はきゆううつと心が苦しくそして、虚しい気持ちになる。紅葉と自分の関係のようだった。いつも沙那姫は形のない触れることの叶わない虚像をおっている。

紅葉が自分を大切にしてくれるのはわかっている。でも、それは沙那姫が望むものとは違う。そして、沙那姫はどんなにのぞんでも望むものは手にはいらないことをしっていた。だから、ここから動けない。虚しいとわかっていてもこの場所を手放すこともできないのだ。

「情けない・・・・」

そつと自分につぶやけば泣きなくなつた。しかし、泣くのはしゃくで我慢する。だってここで泣いてしまえばなんだが負けたようなきがする。

自分の腕のなかで無防備に眠る姿に昴摩は言葉にできない不安を感じる。紅葉の眠る姿に腕からつたわるぬくもりにこんなに不安になつたのははじめてだった。

「紅葉、おきろ」

無機質な声が紅葉をおこそうとしている。夜も深いこの時刻。紅葉は深い眠りのなかにいるのだ。機嫌のわるそうな声をもらし、それでも目蓋をあけようとしなかった。耳をふさぎたいのか衣をつかんで顔をうずめる。

「おきろ」

そついつて紅葉と衣をひきはがした。すると紅葉は不機嫌な表情で目をさます。

「?・・・・昴摩?」

部屋で寝ていたはずなのにいまは林のなかにいる。しかも、となりで寝ていた沙那姫ではなく目のまえにいるのは昴摩だった。紅葉は状況がわからないまま額をおさえて目をさます。目蓋をあければ外気の冷たさに頭がさえてくる。完全に目がさめるまで時間がかからなかった。



「こんな夜になんのようだ？」

紅葉は昴摩からはなれきちんとひとりでたつといった。明日も朝からはやいのだ。さつさとすませて布団のなかにもどりた。

「約束したよな」

昴摩がなにをいつているのかわからなかったが、すぐにおもいだす。疫病のもとを期限までにみつけれたら褒美をやると約束した。そして、約束どおり昴摩は呪のかかった陶器をもって帰ってきたのだ。

「ああ、褒美のことか？明日きいてやる」

そういつてもどろうとする紅葉の腕をつかみ、逃げないようにおいつめる。紅葉はと惑った。ダンと手について自分をとじこめる昴摩は別人のようだった。なにか憑いているのかとおもったが大丈夫なことに困惑する。

（どうしたんだ？）

「約束だ」

困惑しながら紅葉はそれでも顔にはださない。背中には硬質な木の感触。逃げないようにたちあだかる昴摩からとても逃げられそうになかった。

「なにが欲しいんだ？」

紅葉はいった。こんな自分をせめるような顔をしてなにを望んでいるのかわからなかった。昴摩はつらそうに目をほそめるといふ。

「そっちじゃない・・・」

その言葉にさすがに紅葉はおどろいた表情をみせる。なにをいつているのだとおもう。あれは昴摩以上の相手ができたら有効な約束だろう。

自分のそばにすることを螢蘭や菜稚琉にも認められている癖にこれ以上なにを望むんだと不思議におもう。沙那姫がふたりに認められているのと昴摩がふたりに認められているのでは意味がまったく違う。

沙那姫はこのさき紅葉にとってとても大切なものを体にとりこん



でいる。それは沙那姫の体に負担をかけていた。そして、沙那姫はそのことを承知のうえで自分の体を保管場所として提供した。だからこそ菜稚琉も螢蘭も沙那姫を妻として迎えることを承知したのだ。無条件でそばにすることを許されている昴摩とは違う。

「オレが沙那姫よりも誰よりも特別だと紅葉のなかで一番だとわからせてくれ、約束だ」

紅葉はしらない。昴摩が紅葉の制御しきれなくなった魂の一部をあずかっていることを。そして、昴摩はしらなかった。沙那姫もまた自分とおなじ紅葉から大切なものをあずかっていることを。おなじように命をかけて守っていることを。

昴摩の目には沙那姫が無条件でふたりに認められ受けいれられているように見える。しかも、紅葉の昔の伴侶でいまも特別な存在なのだとおもっている。

「馬鹿らしい。もういいだろう」

紅葉はそういつて昴摩をおしかえすとさろうとする。しかし、昴摩は納得いかない。紅葉をおさえこむと顔をちかづけていう。すこし、自傷気味ないいかただった。

「馬鹿らしいか……」

唇がふれあいそうなほどのちかさ。紅葉はそれでも顔をうさげるようなこともなくまっすぐに昴摩をみつめる。責めるような昴摩に紅葉は挑戦的な顔になる。責められることなどなにもない。

「口づけるのか？好きにすればいい」

何でもないことのようにいわれて昴摩は傷つく。力なく腕をさけると紅葉にいう。

「もどれよ」

紅葉はなにもいわずに昴摩のもとをさる。そして、沙那姫のいる寢床へともどつていった。さつていく紅葉の姿をみながら昴摩は切なさや情けなさでその場にすわりこんだ。

（女々しい）

頭をかかえながらそうおもった。あんなことをしてまで、なんで



もいい確立したものがほしかった。紅葉にとって自分は特別なのだと嘘でもいいから安心したかった。それが刹那的なものでもいい。

嘘でも紅葉が自分のことを特別なのだと、沙那姫よりもだれよりも昇摩が一番だといってくればよかった。それだけで、不安も虚しさも焦りもなにもかも吹き飛んで自惚れることができる。

それすらあたえてくれない紅葉に恨めしい気持ちと強制的に優位にたとうとした自分への嫌悪感を感じていた。

結局このあと紅葉は寝つくことができず、あんなことをした昇摩にたいして怒りがあふれ悶々としていた。あつというまに日は昇りはじめ苛々、悶々とした気持ちはおさまらなかった。

「はッ」

紅葉はすきのできた相手の横腹に蹴りをいれる。相手は杭のうえから落ち地面に叩きつけられる。杭のうえからおちれば負けだ。

紅葉と昇摩のようすがおかしいことはひとめでわかった。ここ最近ずっと昇摩はおかしかったが紅葉はふつうだった。あれている紅葉は容赦なく相手を叩きのめしている。

「はい、そこまで」

菜稚琉の声が試合の終了をつげる。紅葉は杭のうえにたつたまま相手を見おろしていた。そして杭のうえからおりる。紅葉といれかわるように鬼柳がそこにたつた。そして、対戦相手に言葉をかける。

「お兄さん、わるいですが負けてもらいますよ」

「ふん、おまえになにができる」

口だけは減らない兄に鬼柳は余裕の笑みをうかべた。負ければ地獄だ。地獄からまぬがれる者はただ一人。負けた者は灼熱の地獄の罰がまっている。

杭のうえで逆立ちになり螢蘭や菜稚琉、黒鬼妖王の攻撃をよけるという修行をしていたのだが、紅葉が試合をしたいといいだした。がんらい紅葉に甘い者たちはあつさりその要求を受けいれると簡単な試合をすることになったのだ。相手を杭のうえからおとすという



単純な試合。しかし、菜稚琉のひとことで命がけの試合になった。

「ただやるだけではつまらないから罰をつけましょう」

そういつて菜稚琉がもってきたのは火打ち。その火打ちを力チ、力チとあわせて火をおこすにつこり笑っていった。

「負けた人は宙ぶらりんになって腹筋、背筋でいいかしら？」

どんな酷い罰をうけるとおもっていた五人はそのなんでもない火をほっとした気持ちでみて微笑んだ。これなら、負けてもたいしたことはない。すこし火傷するぐらいだ。

しかし、世の中そんなに甘くはないのが世の常々である。

「それ黒縄くわじょうだろう？無間むげんにしようぜ」

そういつて螢蘭は違う火打ちをだすと火をおこす。いい感じに燃えた火に満足そうにいつている。

「おお、やっぱこっちのほうがいいよな。罰にはもってこいて感じだな」

五人はもしかしてとおもいながら火をみていた。そして、意をけつして鬼柳がきいてみる。

「あの、もしかしてそれは……」

「ああ、地獄の火だ」

鬼柳がいいおわらぬうちにあつさりと螢蘭はいつ。五人は顔を真っ青にした。そんな五人に論点のずれたことを菜稚琉はいつた。

「大丈夫ですよ。力は何としてあげますからね」

いやたとえ妖力がもどつてもただではすまない。しかも、八大地獄のうちでもつとも重い罪がある者が炙られる無間の炎にかわつたのだ。命にかかわる。

声にならない悲鳴をあげ、そして今にいたる。

「もらった」

鬼柳のすきをついたとおもいきおいよく殴りたおそうとしたとき、一枚うつわての鬼柳が仕掛ける。そして、罠にかかった獲物は杭のうえからおちて負けが決定した。

「よし、そこまで……今度は昴摩と鬼柳だな。勝ったほうが決



勝だからな」

螢蘭の言葉に昴摩が杭にのる。いま現在のこっているのは紅葉、昴摩、そして、いま勝ったばかりの鬼柳だ。戦闘体勢にはいったがどこか上の空だった。

（いくらんでも・・・）

鬼柳はそんな昴摩のようすをうけいられないおもいでみている。冷静で冷酷。人をよせつけなかった昴摩が紅葉にたいしてあんなに表情豊かになったり必死になったりする姿にやっと慣れてきたところだ。

しかし、いまの昴摩は戦闘になっても心ここにあらず、という感じだった。ものすごい違和感を覚える。どんな状況でもどんな精神状態でもひとたび戦闘になればすうと戦いにはいつていく。精密といえるほどの寸分のくるいもない構えに計算しつくされたような戦術と動きをみせた。

（集中しないと）

「負けますよっ」

鬼柳はそういつて昴摩の懐へとびこむ。簡単にはいれたことにおどろきながら顎に拳をいれた。普段ならあっさりと切り替えされてしまっただろう単純な攻撃だった。

「え？」

拳が顎にはいったこともそうだが、あっけなく昴摩の体が地面についたことにも驚きをかくせなかった。座りこんでうつむいている昴摩に驚く。鬼柳の頭のなかにはこの拳はよけられる予定だった。

「次は私だな」

そういつてあがってきたのは紅葉だった。螢蘭のにや、にや、した笑いがやるまえから鬼柳の負けを誇示している。あの人は害虫が嫌いだから負けた者たちをいたぶるのを楽しみにしているのだろう。実際、螢蘭は鬼柳が負けて害虫五人が火炙りになる姿を想像するだけでもわくわくした。

「まあ」



「え？」

「嘘だろう……」

鬼柳自身、信じられない。紅葉が尻をついて地面にすわっている。つまり、鬼柳が勝ったのだ。だれもが紅葉の勝利を信じていただけに驚きを隠せない。しかし、紅葉は冷静にいった。

「私の負けだな」

そして、螢蘭にいう。この罰は紅葉が逃亡するとよくやられていた罰則だった。だからどういう風になるのかよくわかっている。

「師匠、何時間たえればいい？」

「あ、ああ。そうだな。一刻半でどうだ？」

「わかりました」

戸惑いと驚きを隠せず螢蘭はこたえる。そんな螢蘭を無視して紅葉は自分の足に紐を結ぶといった。ほかの者もおなじように自分の足を結ぶ。

「できました」

「それではやりましょうか？」

菜稚琉はそういうとぱち、と音をならし管狐をよぶ。管狐たちはそれぞれ紐をつかみ空へとあげると火のうえにつりさげた。火は小さくてぱちぱちと音をたてているが炭火とかわらない。

「どうすんだ？」

黒鬼妖王はそのちいさな火で炙られてもなにが罰なのかわからない。たしかに熱いだろうが、力をもどさなければならぬほどではない。おおきな扇をもった菜稚琉と沙那姫は左右にたち扇をあおぎはじめた。すると、種火のような火が。

「わあっ」

「ちよっ」

ひとふりでぶわっとながたち、ひとふりで炎がわれる。

「風にあわせて動かないと燃えるぞ」

螢蘭はそういつて五人に声をかける。五人はいわれるまでに腹筋をくしして体を谷折にする。そして、上体をおりまげたまま手で足



首をつかむ。

紅葉は炎がもりかえすまでに背をしならせ綱をささえている管狐までしならせると燃えさかる炎のなかにつつこむ。体が炎にやかれるまえに炎がわれると腹筋で最大限にふりあげる。昴摩もおなじようにして炎と風のころあいをあわせる。

「ああ、いかな。ずるはよくないな」

螢蘭はそういて足をおさえている者にいった。そして、わるそうな笑みをうかべるとぱち、と指をならす。ずるをしている者たちの管狐がかくとさがって炎に顔をつつこんだ。管狐は焼き死ぬまえに綱をあげる。

「ぎゃあああ」

悲鳴をあげている兄をみて昴摩は冷静に自分のかんがえがただしかったことを痛感する。

（いうことときかないとああいう目にあうのか）

炎と体の酷使で意識が朦朧としはじめたころ。

「ぎゃあああああ」

とつぜん悲鳴をあげた。他の者たちはハッとして目線をおくる。そこには炎に顔をやかれている一番うえの兄の姿があった。うえをみると管狐が居眠りをしている。

「おい、おきろ」

螢蘭は管狐をおこすと管狐はあわてて綱をもちあげた。あがってきた兄は髪ももえて坊主になっていてしかも、真っ黒だ。なんとかぴくぴく動いているがもうつつづけるのは無理だろう。

「ああ、もう無理だな」

黒鬼妖王はいった。管狐は地面におろすとすまなそうに頭をかく。菜稚琉はそんな犠牲者をみておっとりという。いまあおいでいるのは黒鬼妖王と螢蘭だ。

「ささえているだけだから眠たくなるのね」

その言葉につりさげられている者の目つきがかわる。必死に自分の管狐によびかけた。



「おい、眠るなよ」

「今日はいい天気だな」

「返事をしろっ」

いっきに活気ついたようすにおもしろそうに螢蘭と黒鬼妖王は笑うと扇にいきおいをつける。炎がおおきくなった。ぎよつとするとさらにいきおいをましていく。

「はははは、どんどんゆくぞ」

黒鬼妖王はおかしそうにわらうとさらにあおぐ速度をあげる。螢蘭もわるのりをしてどんどんと速度をあげていく。悪魔がふたりいた。そんな光景を鬼柳は地獄絵図をみるような気分でみていた。

日が暮れて菜稚琉が修行のおわりをつげると紅葉たちはやっと安全な地上におろされる。つるされるまえとはまったくの別人になったようなかんじだった。

髪がやけおち肌が露出している者。髪はなんとかのこっているがちりちりになり毬のような髪型になっている者。服がやけてほとんどなにも身につけていない者。とうぜんのように皆火傷をおっている。赤くはれて水がたまっていたり皮膚がただれていたりする。

紅葉の黒々とした美しい髪もやけて短くまばらになってしまっている。肌も赤くなりひりひりと火傷の症状をうったえている。全身が火傷の状態で紅葉は無理やり体をうごかす。そのたびになんともいえない痛みがひろがった。

「つうっ」

無理やり動いているせいでやけた皮膚がこすれ血がにじんでいる。それでもかまうことなく紅葉はどこかへいこうとした。そんな紅葉をきづかうように黒鬼妖王は言葉をかける。

「無理するな。体を冷やしたほうがいい」

しかし、紅葉は草むらのなかへと消えていく。他の者たちは池につかって体を冷やしていた。

「そんなところで水につかっても皮膚がただれるだけよ。紅葉様といっしょに温泉につかってきなさい」



沙那姫は四人にいう。それをきいた者は温泉なんてとんでもないという感じに首をふった。しかし、菜稚琉は管狐を操ると四人を池からだし紅葉のもとへととはこぶ。

「このまま明日の稽古はできないでしょう」

ほかほかと湯気のある温泉のまえておろされる。五人しかはいれないよう簡素な温泉には看板がわきにたっている。そこには『効能：万能』と太く逞しい字で怪しげにかかっている。水色は乳白色でそこはみえない。

紅葉をみると温泉に足をつけているところだった。苦痛に一瞬表情をゆがめる。そのようすに四人は冷や汗をながした。しかし、次の瞬間。紅葉の表情がゆるやかなものにかわる。

「・・・・・・・・？」

温泉は深いのだろうか。紅葉は全身温泉につけると沈んだままあがつてこない。そして、しばらくたったあとザバツと水しぶきをあげて温泉からでてきた。赤くはれ血をにじませていた肌はもちろん、みじかく無残な姿になっていた黒髪もすべてにもどっている。

「この温泉」

昴摩は手をのばした。お湯にふれた瞬間はたしかに酷い激痛をうんだが、それも一瞬。刹那的なものであつという間にやけていた皮膚はなおった。火で炙られるまえよりきれいになったかもしれない。

「・・・・・・・・はいれ。体を治さないと明日つらいぞ」

戸惑いと驚き両方の表情をうかべている四人に紅葉はいった。治癒のちからがあるこの温泉はありとあらゆる傷をなおす。紅葉はこれまで稽古や修行でおった傷はかならずここで治してきた。捻挫、打撲、吐血に内臓損傷。骨折、脱臼、火傷、そのほかにも多々怪我をしている。

「・・・・・・・・つ」

昴摩はためらっている兄たちをのこし湯に体をしずめた。刹那的な激痛にたえると嘘のように体が楽になる。悲鳴をあげていた筋肉までももとにもどっている。ほかの者たちもためらいながら昴摩に



ならうと湯につかった。

その日の夜。昴摩、鬼柳、紅葉以外の者たちは屋敷から姿をけした。次の日におきてみれば跡形もなくなくなっていたのだ。そんな息子たちに黒鬼妖王の感想は。

「あいつら格下げだな」

これで夜叉をめぐる紅葉争奪戦の勝負は昴摩と鬼柳の一騎打ちとなった。もちろん、紅葉に認めてもらうのはとうぜんのことだが、それ以上に螢蘭、菜稚琉に認められないといけない。黒鬼妖王のかがえでは螢蘭より菜稚琉のほうが手強いだろうとふんでいる。

（はたしてそんな日はくるのか）

黒鬼妖王はそんなことをかんがえながら修行にはげむ三人をみた。額に汗をうかべ、逆立ちのまま腕立てをしている三人は一糸乱れぬはやさで体を上下させていた。そんな三人の後ろにひかえているのは鞭をもった螢蘭とのん気にお茶を楽しむ艶やかな女性ふたり。

ここ数日、紅葉はむしゃくしゃと自分でも説明できない気持ちにとりつかれている。それを外にだすのはいやで必死にうちにとじこめていた。だがそれでも、不意に茶碗をなげたり癪癪をおこして叫びたくなったりするときがあつた。

いままでになかった感情にふりまわされていつこうにおちつかない。今日も眠れず夜の森をさ迷うように歩いた。

紅葉はたちどまつた。ぴくぴく、と鼻をうごかしあたりの匂いをかぐ。鼻腔をくすぐったのは甘い酒の匂い。

いい酒というものは匂いからしてちがうものである。芳しくも甘く上品な匂いがあたりを侵食していく感覚とともに体の神経もその香りに支配されていった。

自他ともにみとめる酒好きな紅葉はふらふらとその香りが強まるほうへと歩みをすすめていく。そして、たどりついたのは小さな泉だった。

「これは……」



紅葉は泉のふちにすわると手をのばした。水にふれる。ただの水ではない感触と甘い香りに誘われてぬれた手をなめる。

螢蘭と菜稚琉、黒鬼妖王は魚を干したものをつまみに酒をのんでいた。じつはあのあと以来とても仲良くなつてこうして夜酒をのみながら雑談をかわしている。

黒鬼妖王と螢蘭は似たもの同士だからなのか以外にもきがあうようであれやこれやと二人でつるんではどこかへいつたりなにかを計画したりしている。今回の修行も螢蘭と黒鬼妖王が組んだものである。

はじめから紅葉が菜稚琉の条件をかかさず毎日できるなんておもっていない。菜稚琉も螢蘭も紅葉に修行をさせ、きちんと一から体をつくりなおせたかったのである。その理由はのちのち述べるとして、黒鬼妖王にも思惑があつた。

黒鬼妖王の思惑はもちろん紅葉を嫁にもらいたいということもあつたが、今回の本命はそれではない。夜叉候補として有力とされていた者たちのふりおとしが大本命だつた。結果、黒鬼妖王のねらいどりのこつたのは母親の身分のひくい昴摩と鬼柳だ。

母親の身分のことで納得しない者たちは多々いる。それでも、昴摩は有無をいわせぬ実力があつたことでその者たちの口を封じてきた。しかし、鬼柳はちがう。たしかに昴摩の次に実力があつたがその差はあまりにもおおきい。

もし、昴摩が王にならなかつた場合。黒鬼妖王は自分のあとを鬼柳にとかがえている。しかしそれではまわりが納得しない。納得させるには二とりの方法がある。

ひとつは鬼柳が昴摩をこえること。これがいちばんいい方法だがみこみはない。なぜなら昴摩は歴代の王のなかでもっとも強いからである。しかも、紅葉の妖気までとりこんでいる昴摩にたいして鬼柳が勝てるみこみはまったくといっていいほどなかった。

ふたつめは鬼柳がほかの候補者よりも優秀であることをわからせる



ことだ。今回の修行にたえければそれは自然と証明されることになる。実際、母親の身分の高い3人の候補者はその過酷さに根をあげて逃げ帰ってしまったている。

「しかし、ふたりが恋敵になるとはおもってなかったよ。昴摩も鬼柳もそういう性質<sup>たち</sup>ではないからな」

黒鬼妖王はおかしそうにいった。鬼柳が足しげく紅葉に会いにいつているのをしっている。昴摩のほうはまあいうまでもない。

「あつたりまえだろう。相手を誰だとおもってんだ、紅葉だぜ」

螢蘭はそうかえすと娘を自慢する父のようにいった。菜稚琉はそんな螢蘭のからっぽになった杯にしゃくをする。

「しかし、妻がいるとは想像もつかなかった。あの子は竜女だろう？それなら、うちに嫁にもらっても問題ないな」

「あほか。嫁をもらうのと嫁にやるのではおおきく違うんだよ」

螢蘭はあきれた顔でいう。そんな螢蘭に菜稚琉がいった。もちろん、菜稚琉も嫁にだすきはない。しかし、婿をもらうならはなしはべつだ。螢蘭はおいといて、菜稚琉は昴摩をきにいつている。

「では、婿にもらえるなら認めるんですか？」

「……婿。ああ、いいぜ。覚悟があるならいくらでももらってやる」

指をボキボキ鳴らしながら凶悪な顔で螢蘭はいう。つまり直訳すると“いびりたおしてやるから覚悟しろよ”ということだろう。

「婿養子か、かんがえてなかったな。よし、このさい婚姻をむすべるなら問題ない」

黒鬼妖王は息子が螢蘭に虐められるとわかっていつて膝をたたいてわらった。上機嫌だ。どうせ昴摩が家にかえってくるとはおもっていない黒鬼妖王は婿養子でもなんでもよかった。

そりゃ、欲をいえば紅葉に嫁にきてほしいがよいな欲をだしてろくなことにならないのは目にみえている。鬼柳が婿にいき、昴摩があとを継ぐという形がもっともいいだろうがそうはいかないことも黒鬼妖王はさっししている。そんなことしよせん都合のいい夢物語



だ。

（まあ、どっちでもお父様と呼んでももらえるのにはかわりないしな）  
そう納得すると酒にくちづける。紅葉に親しみをこめてお父様と呼ばれるのが密かな黒鬼妖王の今後の楽しみだったりする。

ドン。

空気を震わせながら大音が響いた。地面までもかすかにゆれている。

「なんだっ」

三人はなにごとだとおもい外にでる。黒鬼妖王と螢蘭は瞬時に屋根にとびのると音の発信地をさがす。しかし、それはさがすまでもなかった。白っぽい煙が渦を巻きながら空へと舞いあがっていた。

「あれはなんだ？」

黒鬼妖王はそういいって目をこらす。下には騒ぎをききつけて昴摩や鬼柳、沙那姫もそとにでてきている。螢蘭は紅葉の姿がみあたらないことを沙那姫にきいた。

「沙那姫、紅葉はどうした？」

「紅葉様は外に、最近ねむれないようで」

紅葉は沙那姫をおこさないようにでていつているつもりだが沙那姫はすべてしっている。それをきいた螢蘭はなんだか胸騒ぎをおぼえて煙をあげている場所へとむかった。

「私もっ」

駆けだした螢蘭をおい菜稚琉はいった。菜稚琉もなにか感じるものがあるのだろう。とてもいやな厄介な予感がする。その声にふりむくと皆きていた。

（大所帯だな）

螢蘭はそうおもったが現場についてみてそれも吹っ飛んだ。甘い匂いと酒の臭気が強くつよくたちこめている。

「こんなところに泉をつくったんですか？」

菜稚琉の言葉に螢蘭は覚えがない。たしかに増設は趣味のようなものだがこんなものつくった覚えがない。



「いやあ……」

泉のなかにはおおきな鰭ひれのような耳にたぶんとしたまるまるとした腹をしていて鯰なますのようなひげと口をしている物の怪がいた。みじかい足と魚の尾びれもある。

「あいつですわ」

沙那姫は酒の泉の原因をつきとめると指さした。たしかにその物の怪が泉をつくっているようだった。酒にはそいつの妖気が混じっていてそれがまたなんともいえない味になっているのだが。

紅葉は完全に酔っている。しかも安全な段階をすぎて興奮状態でけられたのしそくにわらっている。そのまわりには百鬼夜行でもあったのかとおもукраいのおびただしい物の怪の数。

「助けないと」

いっさいなにもしない鬼柳が飛び出していこうとしたが、その腕を昇摩がおさえるといった。麗しい兄弟愛。

「馬鹿っ、下手に手をだすな。被害がひろがる」

ではないようである。

「菜稚琉、おまえ離れとけ。あの物の怪はたのんだぞ」

下戸の菜稚琉にさがっているようにいい螢蘭はあとの者たちにいった。しかし、こちらもう手遅れで酔っている。顔を赤らめとろんとした目で菜地琉はにっこり不吉な笑みをうかべた。

「大丈夫、まかせてください」

そういつて袖から筒状の笛をとりだす。そして、口をつける。螢蘭の表情がみるみる青ざめていった。これから怒る惨劇を容易に想像できたからだ。

「あっ、い、やめっ」

ピー、とたかだかに音がなった。しばしの沈黙のあと筒に眠っているはずの管狐が大集合する。目のすわっている菜稚琉が腰に手をあて拳を天にかかげると管狐たちに命じる。

「紅葉をたすけるわよ。おー」

螢蘭と沙那姫は一目散に安全な場所へとにげる。しかし、まにあ



わなかった。管狐たちの猛攻にあったのだ。もちろん、黒鬼妖王も  
昴摩も鬼柳もおなじである。

「なっ」

「ぎゃあっ」

「わぁ」

「いててて」

「きゃあああ」

とうぜんのように一同大混乱。酒で酔っているおかげで管狐の操作が充分にいきとどいていない。つまり簡単にいうと暴走しているのだ。

「私がいけます」

そういつて泉のなかにはいると沙那姫はその鯰のような顔をした物の怪をつかまえようとしたが、すんなりにげられてしまう。そして、酒の球体にとじこめられてしまった。さいわい竜女である沙那姫は水のなかでも呼吸には困らない。

「こんなもの」

のめばすこしでもでられるかなとおもいながら沙那姫はのんでみたが球体がせばまるだけでいつこうにでられそうもなかった。外の騒ぎも遮断されていてあまりよくきこえない。

それをみていた紅葉がなにをかんがえたのか「私もやる」といって物の怪をあやつる。そして、ふたりは意味もなくけらけら笑っていた。しかし、もともと酒の強くない菜稚琉はすぐに糸がきれたようにぱたんとたおれる。

「お姉さま、どうしたの？」

菜稚琉はくうくうと幸せそうな顔をしてちかくにいた管狐を一匹だいて寝ている。白い管狐は菜稚琉の頭をかかえながら主の眠りをまもっているようだ。くりくりした黒い目が菜稚琉の姿をうつしている。

「あいてててえ、紅葉もにもどせっ」

螢蘭は物の怪に髪をひっぱられながら菜稚琉をおこそうとしている。



る紅葉をとめにはいる。やつと菜稚琉が眠って管狐たちが眠りについたので。あとは紅葉さえおとなしくさせれば。

「昴摩、後ろにまわっておさえつけろっ」

昴摩は頭にかじりついていて物の怪をひきはがすことをあきらめるといわれたとおり紅葉の腕のあいだに手をいれておさえつけた。黒鬼妖王と鬼柳は充満している物の怪たちをしまつていく。しかし、次から次へとでてくるはでてくるはとてもかたづかない。

「紅葉もういい。こいつらもとにもどせ」

紅葉は手足をばたつかせて抵抗するので腕をしめると昴摩は必死な形相でいった。よくわからん蜥蜴とかげのような物の怪が足にかみついている。首には胴のながい蛇のような物の怪がまきついていて頭からのみこもつとしている。

紅葉はとりおさえている昴摩の顔をふりむきながらじーとみるとむうつとした顔になるとっーん、とした言葉でいった。

「昴摩はいや。変態だからきらいなの」

紅葉の言葉に昴摩はうろたえる。それをみていた黒鬼妖王や鬼柳、もちろん忘れてはいけない螢蘭はふたりに注目する。そんな雰囲気もおかまいなしに紅葉はつづけていった。

「むりやりスケベなことするの、だから、昴摩はきらいなの。はなしてっ、はなしてよッ」

動揺しながらもせっかくつかまえた紅葉をはなしてはいけなさと手をゆるめない。

「あれはっその、そういう意味じゃなッ」

昴摩は弁解をするようにいった。螢蘭の耳にはみぐるしい言い訳にしかきこえない。

「むりやりは犯罪ですよね」

「男としてよゆうがないのはなあ」

「オレはっ」

黒鬼妖王と鬼柳は軽蔑の視線をなげかけていった。なんとか反論しようとしたが言葉がでない。そんななか、髪をひっぱっていた物



の怪をでこぴんで粉々にふきとばすと螢蘭は青白い能面のような顔に笑みをたたえながら紅葉を昴摩から奪うという。

「どんなことされたのかな？」

紅葉は螢蘭にぎゅうつと抱きつくとうるふると首をふっていった。

「・・・・・・・・いえない」

「ほう・・・・・・・・」

とてつもない誤解をうんだことはいうまでもない。無表情の怒りをうかべた能面の螢蘭に直視されて昴摩はそれ以上なにもいえなかった。ただ感じることでできることは殺されるということだけ。



## 4 清適

### 4 . 清適

深くつもった雪のあいだから萌黄色の花茎をのぞかせている路のふき臺が紅葉の目覚めをまっている。昨夜さんざん暴れまくった紅葉はいまは深くやすらかな眠りに身をおとしていた。

昴摩の不貞行為をした螢蘭はわれを忘れて昴摩を惨殺しようした。それをみて黒鬼妖王は螢蘭の邪魔をさりげなくしたがあまり効果はなかったり、鬼柳があればやこれやと試行錯誤をくりかえし、元凶の物の怪をなんとか自分の使い魔として使役したりと大変だった。いつもなら收拾役の菜稚琉は酔いつぶれてすやすやと眠るばかり。けつきよくその場をおさめたのは紅葉の妻である沙那姫だった。沙那姫は鬼柳のはたらきで酒から解放されるとまっさきに螢蘭をとめにはいった。螢蘭がおさまったことをみるとすぐにきりかえし今度は紅葉をとりおさえにいく。

そしていま。紅葉が眠りつづけていることを確認すると沙那姫は口元だけで微笑む。髪を一束手にとるとそつと口づけた。その口づけは甘くせつない恋風がわが身をおいてすぎていくように。そのままその場をはなれるとあるところにむかった。

冬の冷気をさえぎるようにたらしめられた御簾をあげると几帳でかこまれた小部屋と火桶と二階にかいずし厨子がめにはいった。ほかに二階にかいだな棚、燈台、手燭などもあり必要な調度品はすべてどこおりなくそろっている。

あたりまえだ。ここは紅葉のための部屋なのだから。いつの時代も紅葉はここで学び、ここで眠っているのだ。

そのどれもがきらびやかなものではなくあっさりとしたものばかりだった。しかし、紅葉がつかっていたのだらう。その気配がどれからもかんじられた。沙那姫もしらないあたらしい傷のついた家具は紅葉が長年つかっていたものだった。



さすがに畳みはいれかえてあるが調度品のほとんどがあこのころのままだった。意外と紅葉は物持ちがいいのである。つかうほどしつくりしてくるからはなせなくなる、といっていたのをおもいだす。紅葉のための部屋。ここで彼は学問にあけくれたり稽古でつかれた体をやすめたりしていた。そして、紅葉が死についた場所もここだった。

四十たらずのみじかい生をおえる紅葉を泣きながらみおくった。“忘れないで、かならずおもいだして”と約束しながら死につく紅葉の手をにぎりしめていた。紅葉の妻としてすごしたのはほんの一〇年。瞬きよりもみじかい時間だったが、沙那姫には永遠にもおもえるほど満たされた時だった。

妖かしからすればそれはあまりにもみじかすぎる時のなか。刹那的に散る花の美しさのようにきれいで儚くあわいときだった。たとえそれが一方的な恋であつたとしても沙那姫には花がちるよりもうつくしく、空がながれるよりも穏やかだったのだ。

感慨にひたっていた沙那姫はおもむろに几帳でできた小部屋に足をふみいれる。そこにゆいいつこの場所で眠ることを許された者。燃えるような緋色の髪がちらばっているその場所。

いつみてもなんどみても紅葉とはつりあっていない、と沙那姫はおもう。

「おきなさい」

沙那姫はそういつて憎らしい顔を踏む。ぐにゅっと体重もかけたのであつさりと鼻摩はおきた。

「ぶっは、なんだっ」

沙那姫は腕をくんだまま鼻摩をみおろす。この程度の者がそばにいることを菜稚琉や螢蘭がゆるしていることが信じられなかった。

（いくら私といっしょだからって……）

そこまでもって沙那姫は決定的なちがいをおもいうかべた。そのちがいが目のまえの坊やと自分の差なのだと。そして、その差はとても大切なもの。



「え、なんで？」

沙那姫をみて戸惑いをかくさないまま昴摩はつぶやく。沙那姫はみればみるほどとても紅葉とつりあっているとはおもえない。

「顔かしなさい」

そういつて沙那姫は陽のぼる雪のなかに昴摩をさそった。けっしてこいつのためではなく愛している人のため。情けないこの坊やに教育的指導をいれるのだ。

（……きまずい）

昴摩は外気のはりつめたつめたさとおなじような空気を感じていた。昨日の紅葉の発言もあり昴摩はあんまり紅葉の味方とは顔をあわせなくなかった。せめて自分の気持ちにけりがつくまではそっとしておいてほしい。沙那姫の背をみながらどうしていいのかわからない。とりあえず遠慮がちに声をかけてみる。このまま放置はつらい。

「あの……」

すると昴摩がいいおわるまでに沙那姫はふりかえると両手にのっている紅く光る宝玉をみせてといかけた。

「さて、これはなんでしょう？」

昴摩はまじまじとそれを見つめる。たしかに不思議な力を感じるが、なんのためのものなのかわからない。ただの宝石ではないことはたしかだった。でも、なんだか惹かれる。さわってみたいがなんだかとても大切そうなのでいちおう断りをいれてみる。

「あの、さわってもいいか？」

「だめよ。あんたの汚い手垢がつくじゃない」

沙那姫はあっさり却下。そして、大事な宝物をしまうように自分の体へととりこんでしまった。紅葉がきづかうように手をあてていた場所。

それをみて昴摩はなんだか紅い宝玉の正体がわかったようなきがした。

「まさか、それって」



昴摩のつぶやきに沙那姫は自分の腹部をさすりながらいった。そのしぐさは胎児を宿した母親のようにみえた。しぐさだけじゃない。あまりにも幸せそうに穏やかな目をするから。

「私もかわらないのよ。だって、私は紅葉様の体の一部をあずかっているだけだもの」

（やっぱり）

昴摩は沙那姫の言葉にそうおもう。自分とおなじように危険をおかしてまで紅葉の大切なものをあずかったのだ。でも、紅葉の態度がきになった。大切に慈しむように手をさしのべる姿をみるたび沙那姫と自分の決定的なちがいをみているような気持ちになる。

「でも、オレは……」

昴摩は傷ついた瞳をふせていった。紅葉が大切にしている相手に自分のそんな姿をしられたくない。

沙菜姫はそんな勘違いやろうにあきれた。こいつがよけいな勘違いをするから紅葉に元気がでなかったりきがそれたりするのだ。

（まったく、紅葉様がどうしてこんなのをえらんだのか理解できないわ）

「あの宝玉は火をつかさどっているのよ」

こういえばどういふことかわかるだろうとおもって沙那姫はいう。水の眷属の竜女が反発する火を体におさめることがなをさすか。ほかでもわかるだろう。水は火を消すことができる。しかし、反対に火によってけされることもあるのだ。

昴摩は予想どおりおどろいたようなまぬけな顔をしている。そのまぬけ顔にめんじてちよつとした秘密をおしえてあげることにした。「紅葉様はね。私にこれがあるから妻として大切にしてくれるのよ」

昴摩は沙那姫の言葉に驚きと同情の色をのぞかせた。いや、驚きと同調の色をうかべたのだ。沙那姫はその瞳にすこしむつとする。

だって、昴摩は。

「それって……」

（おしかけ女房？）



昂摩の言葉のつづきをいやでもさつした沙那姫は余裕の笑みでほほ笑む。たしかに紅葉に愛されて望まれて妻になつたわけではないが、それを悲しいと虚しいことだとおもつたことはないし、可哀想だとかそういう同情の目でみられるのもいやだ。ましてやこいつに自分とおなじなのかという風にみられるのは我慢できない。

だって、紅葉のそばにいられるだけで。紅葉を愛しつづけられるだけで。それだけで幸福だともうから。

（もちろん今回のように嫉妬もするけど）

けっきょく最後は紅葉の意志のままだ。紅葉がそれを望むならその望みが叶うように行動するのが、夫を支えていくいい妻の証。沙那姫は自分が紅葉にとつていい妻であることに誇りをもっている。

そのことにかんしては誰にも負けるつもりはない。だって良妻は切つてもはなせないものじゃない。

「私はあなたより誰よりも紅葉様を愛しています。みかえりを求めない愛があることも学ぶべきです」

沙那姫はそういつて昂摩が紅葉にした行動をさした。昂摩はきゆうに真つ赤になりその行動に罪悪感と恥ずかしさをおぼえる。いままで自分がいちばん紅葉へのおもいが強いとおもっていたけど、それが自分勝手でちつぽけなもののようにおもえた。

「私のはなしはそれだけ・・・あ、それと紅葉様とはやく仲直りしてください。元氣のないあの人をみるのはなによりもつらいから・・・」

沙那姫はそういいのこして屋敷へともどつてしまふ。沙那姫がさつたあと昂摩はその場にしゃがみこむと頭をかかえた。

恐ろしく自分が子供で身勝手なように感じた。そして、沙那姫にはとおくおよばないことをしる。だって自分は恋敵に「はやく仲直りしろ」といえるだろうか。昂摩の発想では皆無だった。考えたこともない。しかもその理由が愛した人が悲しむからだ。

沙那姫と言葉をかわして軽率にも紅葉に暗い顔をさせてしまった自分が愚かしく感じた。自分だって紅葉には笑っていてほしい。



「ああ、かつこわり」

片腕で髪をつかみあげて空にはき捨てた。そして、そのまま瞳をつぶると朝の冷たさのなかどうやって仲直りするかかんがえた。謝るだけで許してくれるだろうか。謝りにいって無視されても殴られても蹴られてもなんどでも謝りつづければ許してくれるかな。そんなことをかんがえながら昴摩はしばらくその場所にとどまった。

「でてきなさい」

紅葉がいる部屋にもどるとちゅう沙那姫は行儀のわるいもうひとりの坊やに声をかけた。ずっと沙那姫と昴摩のあとをつけてきていた坊や。いままできづかないふりをしていたのはふたりいつぺんに忠告ができるとおもったからだ。

茂みの影から音とともに姿をあらわしたのは緑の目をした鬼の坊や。たしか鬼柳とかいう名だったはず。

「なにかいいいたそうね」

鬼柳の顔をみて沙那姫はいった。そんな沙那姫に鬼柳は理解できないとしかける。

「どうして、あんなこと」

鬼柳の言葉にくすつと余裕の笑みをうかべると沙那姫はいう。

「きいていたんでしょう」

きいていたならわかるはずでしょう、と沙那姫はいいたげだ。昴摩との会話でそのこたえはでているではないか。

「失礼だとはおもいましたがきいていました。でも、あれが本心だと？」

理解がまったくできないのだろう。沙那姫は疑いと混乱の目をむける鬼柳にいう。

「本心しかいわないわ。私は紅葉様の妻であることに誇りをもっている。紅葉様のいい妻であることにね」

やはり理解できない。いい妻であってもその愛が自分にむかなければなんの意味もなさないように感じるからだ。



「それは偽善ではないのですか？」

「いいえ、究極の愛よ。私はそんな愛をあたえてくれた人の妻なのよ」

鬼柳の言葉をきっぱりと否定して誇りと威厳にみちた声でかえした。釈然としない鬼柳に沙那姫は再度ほえむ。

「自分よりもなによりも他を愛することをするにはまだまだ幼いわ」  
そういつて鬼柳をのこして沙那姫は紅葉のもとにもどっていった。  
部屋にかえると菜稚琉が紅葉のそばにいる。紅葉はまだ眠ったままだった。沙那姫の姿をみてにつこり微笑んだ菜稚琉の表情は“ご苦労様”とたたっている。

「手のかかる子でごめんなさいね」

菜稚琉がそういつたので、沙那姫はふわりと力のぬけた笑みをかえした。沙那姫は坊やがいつたように自分のおもいがけつして報われないとおもっていない。紅葉を愛して無償の愛をしって自分にはえるものがあつたとおもっている。そのことにきづけるかきづけないかで愛の意味はかわるのだろう。

「ああ、今日は休みだ。休み。昨夜のがきいてなにもしたくない」

紅葉たちが部屋にいくとそういつて紅葉には覚えのないおおきな瘤をつくっている螢蘭はいつた。のみすぎで記憶のない紅葉はどこでぶつけたのか、と不思議においもつたが強いて言葉にはしなかった。

「てなわけで、俺は今日一日よく休む。さつさとでてけ」

三人はそういつておいだされた。そりゃあ、昨夜の騒ぎじゃな。と納得しているのはふたりだけで、紅葉はなぜ？と不思議そうな顔をしていた。

（ま、いつか）

あつさり疑問をすけると紅葉は廊下をあるいていく。苦しい稽古からいつときでも解放されるならこまかいことをいちいち追及するのは野暮なことである。こうみえて紅葉は稽古がだい嫌いなのである。



る。やらないですむならそれにこしたことはない。

「紅葉」

昴摩はさきにいつてしまった紅葉をよびとめた。そして、紅葉のもとへとかけよる。

「なんだ？」

ちかづいてきた昴摩に棘のある言葉でかえす。その紅葉の態度にひるみそうになったがそれでも自分を勇気づけて謝る言葉を探すように言葉をつないでいく。

「あの、だから。あのときのこと」

紅葉は視線を反転させるとなにかいいたそうにしている昴摩のこしてあるいていった。今日は沙那姫と昼寝をするときめたのだ。たつたいま。

「紅葉・・・」

冷たくもあしらわれてしまった昴摩はよわよわしい声でつぶやいたが、すぐに気持ちをたてなおすように自分の頬を両手でバシッとたたいて気合をいれる。紅葉が簡単に許してくれるとははじめからおもってなかったではないかと。

（よし、がんばれ）

鬼柳はそんなふたりをみていた。さつていく紅葉の背中も自分を励ますように気合をいれる昴摩も。そして、沙那姫をおもう。

けれど、理解できなかった。自分の利潤ばかりをおってきた鬼柳にとつて沙那姫の行動はやはり理解できないし、とうてい納得のできるものではなかった。

紅葉は沙那姫の膝のうえで眠っていた。紅葉の頭をなでながら手をつないで沙那姫は心地よさそうな紅葉の顔をみていた。そして、その顔をみつめながらかんがえる。

（坊やが謝りにきたときにはてきとうにでていかないと）

言い訳はなんでもある。菜穂琉と約束があったとか、用事をわすれていたとか、てきとうにいつて部屋をでていけばいい。しかし、



昴摩がいつこうにあらわれる気配がない。あんなにいったのだからさっさと謝りにくればいいものを。

（もう、男のくせにぐずね）

そんなことをおもっているとはいりにくそうな顔をして昴摩があらわれた。そして、紅葉が眠っているとおもうとくるつとむきをかえてしまう。

「おまちなさい」

沙那姫はそういつて根性なしの昴摩をよびとめた。昴摩の足がぴたつととまりふたたび部屋に視線をもどす。

「紅葉様に用があるのでしょう？」

そういつてさきをうながす沙那姫にいいにくそうに昴摩はいった。

「いや、あとでいい。紅葉、寝てるし」

あまりにも弱気な態度に沙那姫はあきれる。そして、こんなやつに塩をおくつたのかとおもうと自分が情けなくなった。もちろん、紅葉のためにしたのだが。

「おこせばいいでしょう？」

そういつてみたものの昴摩は紅葉をおこそうとはしない。それにしびれをきらして沙那姫は紅葉に声をかけた。

「紅葉様、おきてください」

紅葉はなんの反応も示さない。かるく揺らしてみても目をとじたまま眠っている。それでも、沙那姫は声をかけ強引におこそうとする。

「紅葉様っ、おきてください。お客ですよ」

そんな沙那姫に昴摩はあわてて声をかける。

「いいよ、よく寝てるし。わるいから」

その言葉に沙那姫は紅葉をゆする手をとめた。しかし、おこすことをおきらめたわけじゃない。

「この沙那姫に狸寝入りがいつまで通用するとおおもいですか」

沙那姫ははじめから紅葉が目をつぶっているだけでまったく眠っていないことをしている。それでも、目をさまそうとしない紅葉



に沙那姫は紅葉の耳をおもいつきりひっぱった。

「いたっ」

そういつて飛びおきた紅葉は耳をおさえて非難がましく沙那姫をみたが、とうの本人はどこ吹く風だ。

「やっと目をあげましたね。心配しましたよ。目蓋がひつつくんじやないかとおもって」

しらじらしくさういうと沙那姫はほほ笑む。紅葉はむっとした表情をしたが、それも一瞬だけのこと。すぐにたちあがると昴摩にはきづかないというふうによこぎり部屋をあとにした。

のこされた昴摩はうなだれて紅葉とは反対方向へとあるいていく。紅葉が昴摩に謝るすきをあたえないようにしているのは明確だった。（まったく、強情なかた）

昔からへんに強情なところのある紅葉に沙那姫はあきれながらさうおもった。なにをそんなに意地になることがあるのだろうか。皆目検討もつかない。さうおもいながらも紅葉をおってたちあがると屋敷の外へとむかう。

人の高さぐらいにもった雪山のうえに紅葉はよこたわっていた。沙那姫は紅葉の衣がぬれていることにきづいておかしくおもう。きつと子供のようにこの雪山をつくっていたのだろうか。それにしてもどうしてこの人はこうかわったところで横になるのか。腰がそれてつらくはないのだろうか。

「紅葉様、風邪をひきますよ」

沙那姫の手が額にふれる。ふれられたところがやきつくかとおもうほど熱い。つぶっている目をあけもせず紅葉はそのまま反応をしない。

「・・・・・・・・」

そんな紅葉の反応に沙那姫はこまった視線をむける。昴摩にそっけなくしてしまったことに罪悪感があるのだろうか。

「手もこんなに赤くさせて螢蘭様がみたら大騒ぎですよ」



そういつて紅葉の片手を暖めるようにつつみこむ。紅葉はなんの反応もしめさないが沙那姫はきにしたそぶりもみせずに息を吹きかけた。

「かまくらをつくった」

紅葉がそういつて目をあける。よくみると雪山のなかは空洞になっている。紅葉の体重をささえられるほど丈夫につくられたそのかまくらを沙那姫は感心した目でみる。

「丈夫なものをつくったんですね。あ、そうそう覚えていますか？私のことを大反対されたとき、紅葉様たら私をつれて屋敷をでいったでしょう。お金もなにもなくて住むところもあてもないからって洞窟で過ごしましたよね」

沙那姫はおもいだしながらくすくす笑ってはなしている。雪の洞窟をみていたらあのときのことをおもいだしたのだ。そうやって楽しそうにはなしていると紅葉はおきあがった。

「火がきえたら凍えそうなほど寒かったな」

紅葉もおぼえているのだろうそういつて沙那姫をみた。沙那姫は幸せそうに微笑むとおもいだした思い出をはなす。

「紅葉様、毒きのこを食べてしまつて大変なことになったわ」

紅葉は沙那姫にいいかえす。みた瞬間、毒きのこだとおもつたが沙那姫がどろどろになつてとつてきてくれたかとおもうといえなかったのをおもいだす。

「だつてずっと海のなかにいたんですもの。あのあときちんと勉強しました」

すこし拗ねたようにいつた沙那姫と紅葉は視線をあわすと不意にぷつとふきだす。どちらともなく笑いだした。あのときは菜稚琉たちの追っ手はくるは物の怪に襲われるはで大変だった。

「でも、楽しかったです」

沙那姫はそういうとほんとうに楽しそうな顔をしている。紅葉自身も大変だったけどそれなりに楽しかったとおもう。紅葉の表情が



遠く昔の楽しいときからいまへとひきもとされる。沙那姫はその表情の変化をみていた。

「・・・・・・・・・・」

なにをかんがえているか手にとるようにわかった。きっと昴摩のことをかんがえているのだろう。浮かない顔の紅葉に沙那姫はつまみこむような笑みをむける。

「・・・・・・・・・・」

紅葉はそんな沙那姫を不安な目でみつめる。いや、甘えるような救いを求めるようなそんな目だと沙那姫は感じた。紅葉の額にこつと自分の額をあわせると沙那姫は静かにいう。

「大丈夫ですよ。なにがあっても沙那姫がついてます。地獄の底でも奈落の底でもどこでもつれていってください」

紅葉は自分がうんと甘えていることを自覚している。沙那姫がこうして無条件でうけとめてくれるのをわかつているからどうしても甘えてしまう。

「くすくす。紅葉様は甘えん坊だから・・・・・・・・」

うえから目線でいわれてすこし紅葉は拗ねた表情をみせる。そんな紅葉をどうしようもなく愛おしいとおもふのだからしまつにおえない。沙那姫の耳に草の音がきこえる。

「お客様ですよ。仲直りなさい」

紅葉にそういうと沙那姫は勇気づけるようにほほ笑む。紅葉の不安はいまある関係が壊れるときに顕著にあらわれる。だから彼とのなかがかわつてしまうことに臆病になっているのだ。でも、かわらずにいられるほど人は無欲ではない。まだまだそのことに紅葉はきづいていないけれど。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

沙那姫がさり、のこされたふたりは無言のまま。きまづい雰囲気ですぐに逃げ腰なのは意外にも紅葉のほうだった。ついさっき沙那姫に励まされたばかりだというのに情けない。



「・・・・・・・・」

（なにかいえよ）

紅葉は目線をしたにむけたままその沈黙にたえきれず心のなかでつぶやく。先端はもちろん体の芯まで冷たくひえてきた。衣がぬれていることも体温を奪う原因のひとつだろう。

昴摩も昴摩でどうきりだしたらいいかわからなかった。ふつうに謝ろうとしてもさきほどみたいにかわされればもうたちなおれないかも。

「ごきげんいかが？」

今日は雪が降らないね。

明日も休みだといいな。

オレもわるかったがおまえもわるい。

（・・・・・・・・喧嘩うつてるな）

自分の思考にそうつつこみをいれる。きのきいた言葉があまりにもうかばなくて昴摩は完全に八方塞な状態になっていた。

「寒いから帰る」

紅葉はこれ以上たえきれずそうそうに音をあげてしまった。そして、ふりかえりもせずまっすぐに屋敷へとむかっていく。仲直りをするにはあまりにも糸口がなさすぎた。

紅葉の背中に拒絶を感じて昴摩はもうなにもできない。その背中をおって手をつかんでなんでもいいから言葉をかければよかったのに昴摩にはそれすらおもしろいかなかった。愛する者の拒絶はなによりもこたえた。はじめのころのようにそばにただで満足していればよかった。どうして多くを望んでしまうのだろう。そのさきは失うばかりなのに。

紅葉は足早にあるきながらも追ってくればいいとおもっていた。おいかけて足をとめてなんでもいいからいつてほしかった。でも、けっしておつてはこなかった。あつというまに屋敷につき紅葉は衣を脱ぎ捨てると沙那姫の膝のうえですて寝をはじめた。

「・・・・・・・・」



「・・・・・・・・」

沙那姫と菜稚琉はそんな紅葉の態度にたがいの顔をみあわせると直感でうまくいかなかったことを感じとった。そして、ふたりの顔は無言であきれた、疲れたような顔になる。まったくもってうまくいかないものである。

（なんなんだ。こいつは）

螢蘭はだらしなく横たわりながら目のまえの相手をみていた。螢蘭は脇のあいだに枕をはさんでその腕で自分の頭をささえていた。足も交差させ自分の体を片足でささえている。しかし、それとは対照的に目のまえの相手は正座をして拳を自分の膝のうえにおきうなだれている。

「で、俺になにをしてほしいんだ」

螢蘭はそういつてうだうだしている昴摩にいった。昨晚おもいきりやられた相手のもとへ相談しにくるこいつの神経がわからない。「なにをってことはないんですけど・・・・・・・・ただ・・・・・・・・」

まったくもって歯切れのわるい昴摩の返答にすこしらいらしてくる。紅葉を襲ったという誤解はもうとけているもののそれにしたって自分のところに紅葉との仲直りを相談しにくるだろうか。怒らせるようなことをふきこまれるかもしれない、とはおもわないのだろうか。

（馬鹿なのか賢いのかよくわからんやつ）

「ただ、どうすれば紅葉がはなしをきいてくれるか、と」

昴摩はそういつてうかない顔をあげた。そのときかどかと足音をたてて沙那姫と菜稚琉があらわれた。菜稚琉はともかく沙那姫は怒り心頭だ。あたりまえだろう。せつかく場をつくってもらったのに悪化させるどころか停滞のままなのだから。

「あんたねッ！ばつかじやないの！一言あやまればすむことなのになにぐずぐずやってるのよ」

顔の色もかわるほど怒りくるっている沙那姫は言葉つかいまで乱



暴になっている。昂摩はあとずさる。螢蘭は沙那姫をみてなかをとりもとうとしたことを察する。

「まあまあ、こいつはへたれだからしかたないだろう。なあ、黒鬼」  
布団を頭からかぶって寝ていた黒鬼妖王は上体をおこすとだるそうに頭をかかえておざなりに返事をかえす。昨夜の被害者はここにもいたのだ。

「ああ、ふがいない息子ばかりで父がつくり」

螢蘭もそうだが黒鬼妖王も疲れきった顔をしている。昂摩はいままでおなじ部屋に黒鬼妖王がいたことをまったくきづかなかった。そのことにすこし衝撃をうける。

（親父のやついつからいたんだ）

沙那姫も昨夜の犠牲者のひとりで泥酔してしまった菜稚琉のかわりをしたのだ。いちばんの被害者といってもいい。

「なんでもいいのよ。すべてあんたがわるいんだから！地面に頭をつけて蛙みたいにあやまればそれでいいのよ」

沙那姫の言葉にだらたとしていたふたりは「そうだ、そうだ」とはやしたてる。そんな一同をみながら菜稚琉は冷静に判断する。

（それでは根本的な解決にはならないでしょうね）

いちがいに紅葉にはまったく非がないとはいいきれない。かといって紅葉が自分の非を理解できるかはなぞだが。

（紅葉はすれているようですらないですからね）

けつきよくのところ喧嘩の裏に隠れている部分をあきらかにしなければ焼き石に水、その場のぎで、またすぐに具現化してしまうだろう。

「そつえば。紅葉は誰がみてるんだ？」

ああだこうだいていた螢蘭はふときづいたようにいった。別にいまきづいたわけではないし、誰がみているかはもう想像はついている。

「鬼柳がみていますよ。情緒不安定でお酒でものまれては困りますからね」



昨夜のことをふくみながら菜稚琉がいった。

「寝てるのか？」

「ええ、ふて寝してますよ」

螢蘭の言葉に黒鬼妖王はぴんときた。きゅうにはなしをかえた螢蘭のおもわくにきづいたのだ。そして、心のなかでほそく笑みながらそれにのる。

「大丈夫なわけそれって？」

黒鬼妖王の言葉に昴摩が「え？」という表情をする。その表情にわるい笑みを心に隠してさらに言葉をつづけた。

「情緒不安定で力も落ちてるのに鬼柳に対抗できるのか？」

黒鬼妖王の言葉に昴摩の顔色がさああと青ざめていく。そして、あわててたちあがるとびだしていった。そんな息子の背中にさらに追い討ちの言葉をかける。もう表情は心とおなじわるい笑みをうかべていた。

「鬼柳がいちばん手がいやいからな」

黒鬼妖王の言葉に相づちをうつようにバタツとたおれる音がする。しかし、かんぱついれずダダダツという走る音にかわった。その昴摩の反応にわるい大人ふたりは腹を抱えて爆笑した。

「あいつは肝心なときにへたれだからな。ははははっ」

「へたれ兄弟だなあ、くつくつ、あはははは」

黒鬼妖王はいまいったことと反することをいう。とうぜん昴摩の耳にはとどかない。ほんとうにわるい大人である。

「これでだめだったら殺してくれてもいいぜ」

涙の浮かぶ瞳をぬぐいながら黒鬼妖王はいった。螢蘭も「おお、殺してやる、殺してやる」とかえしてさらに笑った。ほんとうになかのいいふたりである。

言葉とは不思議なものでおなじ言葉でもいう相手によってその比重はかわる。いまの場合、螢欄がいうより、この場のほかの誰かがいうよりも黒鬼妖王がいうのがもっともこたえただろう。



鬼柳はよこで眠る紅葉をみていた。冬のすんだ空気のかなんの警戒もなしに眠る紅葉の姿はそこだけが時間がとまっているようだった。

（うつくしい）

素直にそうおもえる。漆黒の闇をおもわす黒くながれる髪。凜とひかれた眉は利発と洗練をおもわせる。鼻も輪郭もいつさいの狂いもなくあつらえられているような完璧な美を象徴している。

“美”といっても造形的な冷たい印象をうけるものではなく、自然のなかにある神がつくった“美”である。しかも、凜とつけいるすきのない印象をつけたかとおもうと愛らしくほころぶ可愛らしい印象ももっている。

（おきたりしないだろうか）

絹のようにかがやく紅葉の髪にふれたくて手をさまよわせる。一目見たときには圧倒的な強さとすきのない完璧さを感じた。しかし、言葉をかわすたびにその印象はおどろくほど変化していった。

（惹かれてしまう）

ふれたいとさまよわせた手をみつめおもう。けっきよくふれずにその手をひっこめた。

強いかとおもえは弱くて。すぎがないとおもうと無邪気なほどすきだらけ。世をみわたす明るい目があるかとおもえばおどろくほど盲目だったりもする。対極のもの。その両面をもっているような、むらのある人だとおもう。力だつてそうだ。誰よりも強い力をみせたかとおもうと次の瞬間には弱くなっている。

強く力づよいかとおもえば弱々しくて、つい手をさしのべてつっんであげたくなる。かたよりのない不安定な、いやある意味安定したそんな彼女を鬼柳はいままで抱いたことのないおもいでみつめている。

はげしい衝動にかられてすべてをすてて紅葉のもとへいくことを決断した兄の気持ちがわかる。紅葉とせつすれば、せつするほどそのおもいは強く理解できるようになる。



（やはり目をさましてしまっただろうか）

ふたたびためらいがちに手をのびながら鬼柳はおもつ。紅葉は目をさますことがないほどよく眠っていた。すうすうと規則的な呼吸音が鬼柳の耳をくすぐる。愛おしい気持ちがいさしくつつまれるようなそんな寝息だ。

「なにをしている」

剣呑な声その甘く穏やかな世界にふみいつてきた。顔をみあげるとそこには昴摩の姿があった。立場をすて、ただの男になりさがつた兄をさげすんだりもしたが、いまおなじ気持ちを抱いている自分が誇らしくもおもえた。

「なにもしてませんよ」

鬼柳は冷静な声でこたえる。事実、自分はうしろめたいことはなにもしていない。ただ、髪にふれることすらできなかったただけだ。

昴摩は紅葉のもとへすわると紅葉の体を乱暴にひきよせる。それでもすて寝中の紅葉はおきようとはしない。「うん」とうなっただけだ。

「手荒なことはやめてください。紅葉様がかわいそうでしょう」

鬼柳はあからさまな態度にむつとすることもなく紅葉をきづかうようにいった。この人からすれば自分は邪魔者なのだろう。はげしい独占欲と保護欲がいりまじった瞳が鬼柳をみている。

（欲からは逃げられないということなのか）

そんな瞳をみつめながら鬼柳はおもった。紅葉を娶れた者が王になれる。鬼柳にとつても昴摩にとつても愛欲と支配欲どちらもみたすことができる条件になっている。

権力と愛との狭間で苦しまなくていい。

「紅葉は道具じゃない」

かんがえをみすかすように昴摩はいった。腕でしっかりと紅葉を抱きしめて背をむけたまま言葉をすてさるようにさっていく。いなくなってしまうたその空間をみながら、昴摩がきづいていない自分の心の変化をそっとたしかめる。



「わかっていますよ」

いまの自分はどっちをえらぶだろうか。そんなことをかんがえはじめたが、すぐに鬼柳はその思考を中断する。

突発的につれだした紅葉を自分たちがつかっていた部屋へとつれてきた。この部屋に紅葉がきたのは何日ぶりだろう。いや、それ以上にかうして紅葉の寝顔をみてすごす時間は遙か昔のことのようにおもえた。

片膝のうえに紅葉の頭をおいている。もう片方の膝のうえに自分の腕をおいて紅葉の寝顔をみていた。

「うっくん」

怖い夢でもみているのだろうか眉のあいだに皺をよせて不安げな表情をしている。紅葉はたびたびこうした表情をして夢にうなされることがある。いつか「どんな夢をみているのか？」ときいたことがあるが、紅葉は「おぼえていない」とこたえただけだった。

昴摩は紅葉の額にふれながら髪をすく。すると紅葉はまた穏やかな寝顔にもどる。子供のようなその寝顔に昴摩はついつい温かな笑みがこぼれる。

びくびく動く目蓋もかすかにひらいている唇も緩慢に上下をくりかえす胸もなにもかも愛おしかった。この寝顔をみていたらすべてをなげうってでも守ってやりたくなる。夢のなかですら不安なおもいや怖いおもいをしないように完全に守ってあげたい。

「うっくん、沙那姫」のどがかわいた」

寝ぼけながらそういつて目をさます。紅葉は昴摩と目があつて戸惑いと驚きを一瞬ひとみにうかべたが悟られないようにすぐにひっこめる。そして、おきあがろうと上体をおこした。

「わあっ」

おこしかけた上体を無理にひきもどされ、すこし後頭部をぶつける。昴摩はおきないようにといいよりは逃げないように額をおさえるために手をおいた。



（いたたたた）

紅葉はおちつかない。昴摩の掌がふれていることがいまいちばんおちつかなかった。だいたいいつのまに自分はこんなところにいるのだろうか。沙那姫の部屋で寝ていたはずである。

「はなせ。帰る」

自分の部屋にしながら“帰る”はおかしい感じがするがいつらい。  
「はなせ」

昴摩がいつまでも掌をどけようとしないのでその腕をつかんでどかせようとした。

「逃げるなよ」

挑発的な言葉にむっとして紅葉はにらむ。こんなあつかいをうけるいわれも一方的に怒りをかういわれもない。紅葉にはなにがきにならないのか理解できなかった。沙那姫は昴摩とであうずっとまえから妻だし、きちんと昴摩のことだってかんがえている。ないがしろにした覚えもない。

「はなしあおう」

「いいだろう」

頭上からの言葉にむっとなりつつ紅葉は従う。たしかにはなしあう必要はあるとおもうがこうしてみさげられてしたくはない。目線がうえかした。みあげるかみさげるかでは心理的になんだか立場がちがう。せめておなじ視線にしておきあがろうとしたが、それすら昴摩にとめられる。

「そのままできいて」

「え、ああ、わかった」

いままで挑発的で反抗的な言葉だったのに子犬のような顔でくうんと鳴くようにいわれておもわずしたがってしまふ。視線をみあげなければいけないことへの違和感はとれないけどしかたない。

昴摩の心はおちついていて。紅葉が寝ぼけて沙那姫をよんだことがまったくきにならなかった。自分は彼女にかなわないとしたからだ。紅葉が沙那姫に甘えたり自分にはみせたことのない表情や態



度をとることが羨ましかった。

しかし、今朝の沙那姫との会話でそれはふたりのはぐんできた時間があったのことだとした。なにより、沙那姫がどれだけ紅葉に尽くしてきたか痛いほどわかった。つまりぬ嫉妬で手をわずらわせてしまう自分とはちがうのだ。

「オレは・・・俺がいちばん紅葉を独占しているとおもっていた。沙那姫があらわれてそうじゃないとしてあせった。オレは紅葉のなかで何番なんだろうっておもった。一番がいいのに一番じゃないことがつらくて紅葉にあたったんだ」

昴摩のいう一番とか二番とかあまりよくわからないが、つまり簡単にいういつもの格気を沙那姫にしていたということだろう。紅葉は昴摩のはなしをききながらそう判断する。

（そういうことか）

いちぶ理解できていないんはあるものの紅葉は納得する。そして、やっぱり自分の非がまっただけでなかったと判断した。この判断はあまり正しい判断ではない。

「おまえの気持ちはわかった。謝ってこれでおわりだ」

自分の非がまっただけとおもっている紅葉はひろい心で昴摩が謝ってさえくれれば無条件で許そうとおもっていた。しかし、昴摩のおもいはちがう。まったく紅葉に非がなかったわけではないのだ。「たしかにオレもわるかったがオレばかりがわるいわけじゃないだろう」

その言葉に紅葉の表情があきらかにくもる。はなしがこじれるとおもったが昴摩にひくつもりはなかった。大事なことだ。いつけん紅葉はすぎがないようにみえるが、いちどきを許してしまうとおどろくほど無防備になるのだ。

「私に非があったというのか？」

「そうだろう。現にいまだって鬼柳のまえで寝てたじゃないか」

紅葉の陰しい声におくすことなく昴摩は意見する。紅葉はなぜここに鬼柳のことがでてくるんだとおもったが、どうかんがえても自



分に非があつたと反省することができない。

「おまえのまえでも寝るじゃないか」

自分でいいながら「そうだ。そうだ」とおもう。人前で寝てなにがわるい。眠たいから眠っていただけだし、だいいちはじめから鬼柳がいたわけじゃない。

紅葉の言葉にわかつていながらもがつくりした。どうしてわからないのだろう。なぜ。どうして、ああも無防備になれるのだろうか。男としてみられていない。いや、そんなちんぷな理由ではない。根本的なことがわかっていないような気がする。仲間や家族にたいする好きという感情しかわからない紅葉はそのうえのおもいを理解できないし意識できないのだろう。

「オレは好きだ。紅葉が好きだしいつしよにいたい。独占したい」

紅葉にといかける。紅葉はどうなんだ、と。紅葉はなにをいいだしたんだとおもいながら、自分の気持ちをありのままつたえる。昴摩のことは好きだし、紅葉だつていつしよにいたいとおもっている。紅葉はおきあがると昴摩を首をかしげながらみつめる。

「？私だつていつしよにいたいとおもうからあのときおまえをむかえにいったんだろう」

「オレのこと好きか？」

かっこわるいとおもいながらきかずにはいらなかった。

「好きだぞ」

紅葉の言葉に昴摩はあきらな温度差を感じる。紅葉にこれ以上なにをいっても無駄だとかんじるほどの温度差だった。しかし。

「じゃあいいよな」

昴摩はそういつて紅葉を強引にひきよせる。紅葉はすこしもがいたが、昴摩は力でそれを制する。いつもとはちがう昴摩に紅葉は戸惑いをかくせない。今回だけじゃない。たびたび昴摩が昴摩じゃなくなる時がある。そのたびに紅葉はなんともいえない気持ちになるのだ。心だけじゃない。体ごとへんな感じがする。

「やめっ、はなせ！殴りたおすぞッ」



紅葉はいつものように気丈な言葉をなげつける。実際、こういう場面になることは多々あったが、類稀な靈力と菜稚琉や螢蘭の修行のおかげでなんを逃れてきている。いまだって。

「オレのこと好きなんだろう」

（だめだ）

どう動けばいいのかきれいさっぱり忘れてしまった。靈力がない状態では頼れるのは武術だけだがその技を忘れてしまっている。力任せに闇雲にあればとも無意味なことだけが理解させられる状況。

普段の昴摩からは想像もできないほど強い言葉。そう人がかわつたようなそんな言葉だった。そして、紅葉はこの言葉になる昴摩にはなぜか自分の実力がだせなくなる。普段できていることがきゅうにできなくなるのだ。

「紅葉、うえむけよ」

命じられる言葉に紅葉の体が一瞬びくつと反応する。まるで主従が逆になったようだ。

（いやだ）

紅葉はいわれたとおりうえをみた。そこには昴摩の顔がある。やっぱり、別人のかおだとおもうと怖いのに目がそらせなかった。

（ああ、怖いんだ）

このときの昴摩がどうしてなのか、ものすごく怖い。怖いのに逃げることも逆らうこともできないことが、もっともつと怖いのかも知らない。自分のなかで絶対的な支配者のような感じなのだろうか。わからないが怖いという感情だけが理解できた。

「・・・・・・・・」

紅葉の怯えと困惑をにじませた瞳に本能がざわめくのを昴摩はかんじる。侵略する悦び、征服する歡喜を昴摩は皮膚のおく、肉につつまれたもつとふかいところで感じてぞくつとしたおもいがわきあがる。紅葉の顎に指をそえる。紅葉は反射的に顔をひこうとしたがそれを許さなかった。

（どうしたら・・・）



魔性の本性が目のまえにあった。このままだと紅菜に酷いことをしてしまいそうで、昴摩は理性と本能のはざまにいる。沙那姫はどうやってこの本能と共存しているのだろう。

「紅菜が男としてみないからわるいんだ。オレやあいつが紅菜をどんな目でみてるかわからないだろう？」

「・・・・・・」

紅菜はこたえられない。昴摩が男で自分が女であることはわかっている。でも、それは外面的なはなしで内面的なことが理解できているわけじゃない。いままで意識しなかったことを無理やり意識させられる不快感。

「もういい。オレがわるかった」

紅菜の瞳が困惑をこくしたのをみて昴摩はあきらめたようにいった。紅菜から体をはなすとはなれる。あとからついてくるようにはなれていく指。そして「ごめん」といつてさつていく昴摩。

しよせん無理だったのだ。紅菜に自分のおもいを理解してもらうなんて。

（昴摩）

そつとはなれていく指先に紅菜は不思議な感覚をもっていた。捕らえられていたい気持ちとはやく解きはなつてほしい気持ち。相反する気持ちをどうじに抱える。昴摩のでていったそのあとを複雑な気持ちでみつめた。

昴摩はでていったあと後悔していた。どうしてあんなこといつてしまったのか、どうしてあんなことをしてしまったんだろうと後悔ばかりがうかんでくる。

みんなのいうように全面的に謝ればよかったのだ。そしたらまるくおさまった。いままでどおりの関係をつづけていけた。そばにいて無邪気に眠る紅菜をみていたのだ。きっともう紅菜は自分のそばでは眠らないだろう。

自覚させたのは自分のなのだ。いまの立場をてばなしたのも自分



だった。後悔しながらもまだ望んでいることも事実。ある意味のぞんでいたことだった。

紅葉のきのない鍛錬は日に日に酷くなっていた。あまりの酷さに螢蘭は中断することを余儀なくされるほどだった。そして、しばらくの休暇をあたえることにした。このまま鍛錬をかさねても意味がないと判断したからだ。

「紅葉様、きいていますか？」

鬼柳はぼーとしている紅葉にいった。紅葉のはつとしたように鬼柳は落胆する。昴摩とはなれているいが自分のはいりこめるすきだとおもい紅葉との時間をより大切にしているがとうの紅葉はうわのそら。

「すまない。きいていなかった」

紅葉はすこしきのどくそうにいった。そんな紅葉に鬼柳は微笑むとすこし意地悪なことをいうが本気ではない。

「いいですよ。私のはながつまらなかったんでしょう？」

「いや、そんなことはない」

紅葉はあわてて否定したが、また黙ってしまう。そして、紅葉はすまなそうな顔で鬼柳にきりだした。

「すまないが、ものすごく眠いんだ。部屋にもどるよ」

「それならここで眠ればいい。私が紅葉様の安全をお守りしますよ」  
鬼柳はひきとめるように提案したが紅葉はにっこり微笑むとやんわりとそれを拒否した。

「姉様がもうじき昼寝する時間だからいっしょにならんで寝るから」  
「そうですか」

鬼柳はうまくかわされたとおもったがこれ以上はなにもいえず、紅葉をみおくった。「すまない」それだけをいいのこして紅葉はそこをあとにした。

建物と建物をむずぶ透渡殿をわたろうとすると高欄に腰かけている黒鬼妖王がいた。使い魔をはなっているところだった。使い魔は



翼を羽ばたかせあつというまにまだ雪ののこる春の空へときえていった。

「なにをしているんです？」

紅葉はきく。きくというよりなんとなくでた言葉だった。

「仕事だ。いちおうこれでも王だからな」

その言葉に紅葉はおもいだす。そののだ、彼は昴摩と鬼柳の父親であるまえに鬼族の王であり魔界の三大の王のうちの一人なのだ。あまりにも普段の彼からは想像できない立場をおもいだして不思議と違和感を感じた。

「顔色がわるいな。寝不足だろう」

黒鬼妖王は「くまができてる」といいながら自分の目のしたを人さし指でおさえた。

「姉様はどこにいます？」

「菜稚琉様や螢欄様たちは外出中。なんかとりに山へいったぞ」

「沙那姫も？」

紅葉の言葉に「ああ」とあつさりこたえると黒鬼妖王は紅葉の体をだきあげる。紅葉はおどろいた顔をして黒鬼妖王をみていった。

「おろしてください」

しかし、黒鬼妖王がそんなこときくような男ではない。紅葉の体をかたむけて地面におちるよう不安定に抱える。紅葉は体がおちてしまう、と反射的に反応して黒鬼妖王にしがみついた。

「おりたいんじゃないかったのか？」

意地のわるい顔で黒鬼妖王はいう。紅葉は悔しそうに黒鬼妖王をみるとふんと顔をそらした。黒鬼妖王は豪快に笑うとそのまま紅葉の部屋へつれていく。

「あつたかいな」

部屋の<sup>しとみ</sup>おりた部屋には火桶がおりてありあきらかになかとそとでは温度がちがう。さつきほどまで寒い透渡殿にいたひえた体には部屋のあたたかさがしみる。そして、紅葉を御帳台のなかに紅葉をおろす。この屋敷には紅葉のための部屋がいくつもありそのどの部屋の



調度品も高価なものだった。

ひろすぎる屋敷、おおすぎる部屋はどこかしこもきれいに管理されている。それは温度にいたるまで完璧に管理された空間。だいたいにして黒鬼妖王はこんなつくりの屋敷をみたことがない。

屋敷が何個も渡殿でつながっているのだ。しかも対でかこんだ短い草の広場まである。町の家々をつなげているようなそんな屋敷。馬屋も武器庫も祭壇に滝や池までありなんでもある。黒鬼妖王じしんまだこの屋敷をすべてみてまわれていない。それほどおおきな屋敷なのだ。

「ぐっすり眠れよ」

黒鬼妖王はそういつて紅葉の頭をなでる。赤子あつかいされているとおもった紅葉はすこしむっとしながらいった。たしかに赤子のようによく眠るが赤ん坊あつかいは失礼だ。

「あなたがいると眠れません」

紅葉の反撃に黒鬼妖王はおりよ、とおもう。自分にたいして紅葉はもう敵として警戒していない。いわば内の人間のはずである。いちどきを許してしまえば紅葉はどこまでも無防備になる。内側にはいることはむずかしいが、そう、子供のようにはいつてしまえばとことんなついてくる。

「なぜ？」

「なぜでも。姉様がかえるまではなしをしてくれませんか？」

「なんのはなし？」

紅葉の言葉にそうかえすと紅葉は「なんでもいいです」とこたえた。

「そうだな。それじゃあ、魔界のはなしをしてやろうかな」

そういうと黒鬼妖王は魔界のはなしをはじめめる。魔界の草花のことうの味のする果物があることや自分の飼う魔のこと。そして、魔界の子孫繁栄事情。魔界の者はなかなか子ができないそうだと。

「あの種族の女はたまったものじゃないな。女は男を食っちゃうんだからな。まあそのかわり子ができる確率がたかいけどな」



「だれでも食べるのか？」

はなしをきいていた紅葉はいった。男ならだれでも食べてしまうのだろうかと思議におもったからだ。

「きにいったやつを食うんだろう。恋したら食われちまうなんてなんつうか、なあ？」

「好きだと食うのか？じゃあ、家族も男だったら食うんだな？」  
(うん？)

はなしがへんな方向へとながれていることに黒鬼妖王は頭をひねる。すこし、男女ということを意識したかとおもっていたがあまり期待はできないことをいいだす紅葉だった。

「紅葉、好きにもいろんな種類があるのしってるか？」

黒鬼妖王は単純にわきあがった質問を試みる。すると紅葉は「ああ」といった。

「恋はどんな好きでしょう？」

黒鬼妖王の次の質問に紅葉はこたえる。そのこたえは螢蘭に幼いころおしえてもらったこたえた。

「子供がほしいとおもった相手だろう」

(それは・・・結果論・・・？)

そのこたえに黒鬼妖王は紅葉の教育問題に疑問をなげかける。どうかんがえてもそつち方面の教育を間違っているとかおもえない。「師匠が“子供をつくるために異性を好きになる”っていった。

子供がいらない相手で好きなのは仲間っていうんだっていったぞ」  
ある意味正論。ある意味的外れな。その言葉に黒鬼妖王は息子たちをおもつ。つくづく、なんて手強い相手をあいてにしているんだと。気の毒になる。

「じゃあ、紅葉は子供がほしいのか？」

紅葉はかんがえることもなく「ぜんぜんいらない」といった。その言葉に(そりゃ、そうだろう)とおもつ。はじめから子供を視野にいれて恋愛するやつなんていない。たとえ恋愛の根本がそこであったとしても合理的なものではなく非違合理的なものが恋愛だ。



「あらあら、なんのはなしをしているの？」

そういつて妻戸をあけてはいつてきたのは菜稚琉だった。紅葉は菜稚琉をみるなりうれしそうな顔を見ると眠たそうに目をこすった。そんな紅葉の姿に菜稚琉はくすくす笑うと紅葉の手をにぎる。

「姉様の手冷たい」

「外にいつていましたから？眠たいのでしょうか。おやすみなさい」  
菜稚琉の言葉に紅葉はよこになる。手をつないだままけだるそうにしていた。眠るまえにぐずる赤ん坊のようだ。

「黒鬼妖王、紅葉のおもり大変だったでしょう？眠たいのが究極になるとぐずるから」

完全に赤子あつかいしている菜稚琉は紅葉をあやすようとんとん、とんとん、と手で心臓の音と共鳴させる。

「いいえ、ただ疑問点はあつたけどな」

「螢蘭にはなにをいつても無駄で」

すこし困つたように菜稚琉はいつた。なにか察するようなものがあつたのだろう菜稚琉はそうかえしてきた。そして、おもいだしたように眠りかけている紅葉にいう。

「そうそう、昴摩が砂糖菓子をもつてうろつろしてましたよ」

砂糖菓子は紅葉の大好きなもののひとつだ。でも、うすれゆく意識のなかで紅葉はあの昴摩をおもいうかべた、そして無意識にそのおもいを口にする。

「こわい・・・昴摩、ときどき・・・すう、すう」

眠ってしまった紅葉を不思議そうな目でふたりはみた。そして、顔を見あわせるとどちらがともなく「どういうこと？」とつぶやいた。

紅葉の睡眠がよくない。眠る時間はながいのに熟睡していないためつねに寝不足の状態だった。本来よく眠る紅葉は寝不足がいちばん心身にくる。集中力はもちろん精神的にも安定しない。

「紅葉様、あちらにいつてはいかがです」



沙那姫は月をみながら欠伸をしている紅葉にいった。夜もふかまり月はおく星は輝いている。紅葉は眠ろうともせず欠伸をくりかえしている。

「昴摩が謝ったのでしよう。でしたら許してさしあげてもよろしいんでないですか？」

みるにみかねて沙那姫がいった。欠伸のせいで目に涙をうかべている紅葉はそれをぬぐいながらしばしおもいつめた目をしたが沙那姫にいう。

「よくわからないんだ。男だといっしょに寝てはいけならしい」

沙那姫もよくわからない。なにをいつているのかもうつひとつ理解できなかったが自分なりにこたえをだそうと頭をめぐらせる。

「・・・それはそうですけど・・・昴摩なら安全でしょう？」

「うーん、どうかな？たまにあいつ変なやつになるんだ」

また、理解できないことを紅葉はいった。そのままの疑問を紅葉にぶつける。

「変なやつってどんなふうですか？」

「普段は犬みたいに従順なのに、たまに凶暴化するんだ。それで意味不明なことを勝手にいつて勝手に決めつけるんだ」

「はあ」

沙那姫は返事をかえず。紅葉はためていたものをはきだすようにさらにつづける。

「あいつ馬鹿なんだ。自分を男としてみるだつていうんだ。だれもあいつを女だとはおもっていないのに、わかりきったこといつて」  
(それは・・・)

沙那姫には昴摩のいわんとしてやっていることがわかったが、どうやら肝心の紅葉にはあまりつたわっていないようだ。紅葉に恋心を理解させるのは山を一晚でけしさるよりも海の水を干からびさせるよりも難しいと沙那姫はかんがえている。実際、自分のときも最後まで理解してもらえなかった。

「そうなれば、いつものようにぼこにすればいいではないです



か」

沙那姫はそう助言する。すると紅葉はすこしおもいつめた顔をして眉間にしわをよせてしまった。そしてまたしばし沈黙。

「……なぜかわからないが抵抗できなくなる」

「え？」

沙那姫はおどろいた表情で紅葉をみる。しかし、紅葉はそれにきづかずにさらにつつけた。

「変なんだ。体がざわざわするし、おもっていることと反対のことをいったりしたりするし、体術も力の使い方も忘れてしまうんだ」

沙那姫はそれをきいてあきれてしまう。鈍感にもほどがある。でも、多少の進歩があるのかな。かるく頭痛をおぼえながら沙那姫は自分の眉間をかるくもむ。

「紅葉様、とりあえず昇摩のところにいきなさい。寝不足でお肌の年齢もうんとあがってますよ」

「いまから？」

「そうです」

いきにくそうにしている紅葉にばっさりいう。しかし、よっぽどいきにくいのか紅葉はしぶった表情をする。

「危ないぞ」

「大丈夫ですよ。もしものときは私があいつの首をはねますからね」

沙那姫の無邪気な顔に紅葉はしばし思案する。そして、「ほんとうに？」と念をおした。

「もちろんです。私がうそをついたことはないでしょう？」

紅葉はおもむろにたちあがると沙那姫をのこして部屋をでていった。沙那姫はそんな紅葉をみおくと布団にもぐる。もう夜も深い。さつさと眠らないとお肌があらてしまう。なんの心配もせず数分後には沙那姫はくうくうと寝息をたてた。

紅葉のそばにいるのは自分ではない。彼なのだ、といいきかせて眠りについた。



高欄こゝろに腰かけながら夜の風をうけていた。背には遠い月がなくしたものをおもわせるようにのぼっている。部屋にいと紅菜の気配を感じて、それがいやでこうして外にでてきてはいるが、欠けた月が物寂しくてとてもみていられなかった。

いままで一人でいた。いまさらとおもうのに、あのころにはもどれないようだ。紅菜と出会うまいにもどるだけだと自分を納得させたのに理解しきれていない心があった。

膝をみれば紅菜がよく枕がわりにして眠っていたことをおもいだす。艶やかな髪が川のようにながれて床に散らばる。目をさましたときのぼうとした無防備な顔も寝つきがおどろくほどいいことまでもいまでは思い出のなかだけのものになってしまった。

「紅菜」

無意識に愛おしい人の名をよぶ。返事などかえってくるはずもない。いまごろは沙那姫のとなりでやすらかに眠っているだろう。彼女はあまりにもできた人でとうてい自分ではたちうちできなかった。

「よんだか」

「え？」

きゆうにきこえた紅菜の声に幻聴だったのかとおもう。しかし、目のまえには月明かりにてらされた紅菜の顔があった。戸惑いとおどろきそして、懐かしさをにじませる。

「私の名をよんだだろう」

紅菜はそういつて昴摩にあゆみよるとおなじように腰かけた。ふれそうでふれられないその距離をたもった。

「どうしたんだ？」

てつきりもう眠っているだろうとおもっていた昴摩は紅菜にきいた。わざわざ自分にあいにくさというのだろうか。

「沙那姫においだされた」

「そうか」

紅菜の言葉にすこしおどろき昴摩はつくづくおもう。



（勝てないな）

そして、沈黙がつづく。たがいになににもいわずなにもかたらず月をみることもなくただ沈黙だけがつづいている。たがいの姿を視界にうつすこともなく半部<sup>はじとみ</sup>をみていた。格子状の漆塗りのその枠をみながらたがいになにをいつていいのかわからない。

「率直にいう」

沈黙を破ったのは紅葉だった。なにをいうのだろうと昴摩は紅葉をみた。紅葉もこちらに顔をむける。紅葉の癖のようなものだが、まっすぐに瞳をみつめてくる。紅葉は強い瞳で相手の目をのぞきながらはなしをする。そして、その瞳をみつめながら昴摩はおもつ。（この瞳がくせものなんだ）

すいこまれてとらえられてしまう。あの瞳にみつめられると彼女のいいなりにならなければいけないような使命感さえわいてくる。

「おまえのいうことはわからん」

昴摩はその言葉に落胆する。ずるつとさがった気持ちをもちなおすように昴摩は気合をいれた。

「けど、きをつける」

紅葉のその言葉に「なにを」といかけたい気持ちがあったが、それをきくのをやめた。そして、またおなじ沈黙がつづく。紅葉も瞳をそらしてまえをみていた。

「なあ、昴摩もだめなのか？」

「え？」

その言葉に昴摩は紅葉をみる。するとおどろくことに紅葉は眠っていた。いま自分で質問したばかりなのにそのこたえもきかずに眠っているのだ。

「ぶっ」

昴摩はそんな紅葉の姿にちいさくふきだしてしまう。なんていうか、やっぱり最強だとおもつ。

「無敵だな」

昴摩はそうつぶやいて紅葉を抱きかかえる。夜はまだまだ寒い



だ。外で寝て風邪でもひかせたら顔向けできない。

温かい部屋につれていくと布団に寝かせて自分はその場をさるうとした。しかし、紅葉がはなしてくれない。眠りながらも衣をつかンではなさないのだ。

「うっん、昴摩・・・」

それだけつぶやいてすうすうとふたたび寝息をたててしまふ。昴摩は困ったように頭をかく。無防備に無邪気に眠る紅葉は安心しきった顔をして眠っていた。

「やっぱり最強だ」

そういつて昴摩は観念したように紅葉のそばで眠る。いつものようにひとりじめするように守ってあげるように抱きかかえる。紅葉の寝顔をみながら昴摩はついつい笑みがこぼれた。意地悪するようにつんつんと頬をつつく。

「う、ん」

眉間にしわをよせて迷惑そうに紅葉は反応する。その反応にすすく笑って昴摩はやさしく頭をなでるとしばらくその寝顔をあきずにみていた。あまり解決したようにはおもえないがこの顔をみているともうどうでもいいようなきがするから不思議だ。

（まあ、いまはこれでいいか）

あまりよくばっていいことはない。そうおもうと今回のことはかなり収穫があったようなきがする。

紅葉をひとりじめするのはほど遠いこともわかった。恋敵はたくさんいてしかも、そのひとりとはものすごく手強い。彼女をこえるにはもっとおおきな器ともっと男として卓越した人にならなければいけない。

まだまださきは遠いとおもうが紅葉の心にすこしでもふれられているのならそれは無謀なことではないきがした。けっきょく朝日が顔をだしても昴摩は紅葉の寝顔をみつづけていた。



## 終章

### 終章

一家団欒という言葉がぴったりの夜の宴。黒鬼妖王は側近につれさられてかえってしまつたが、今日も修行をおえて夜の時間を楽しんでいた。紅葉を酔わせたあの物の怪がつくつた酒をくみかわしながら夜のひと時を楽しむ。

「今日は俺といっしょに寝るか？」

酒に酔つてうとうとしつつある紅葉に螢蘭はそういつて紅葉の髪をくしゃくしゃにする。

「師匠してましたか？女は男のもとで寝てはいけないんです」

すこしいばつたようにいつた紅葉に螢蘭や菜稚琉、沙那姫はぷつと笑う。馬鹿にしたわらいではなく純粹におかしそうに笑つた。

「そうか？じゃあ、昴摩は女だつたんだな」

昴摩と寝ていることを指摘されて紅葉はむくれながつた。

「昴摩は安全だからいいんです」

「わかんないですよ。夜叉様もとつぜん変化するかもしれませんよ」  
鬼柳がそう忠告をいれる。昴摩にたいしてのやつかみをふくんでいる。

「大丈夫だ。そんなことはない。もしものときは沙那姫が首を落とすことになっているしな。なあ、沙那姫」

紅葉はそういつて沙那姫に同意をもとめる。

「もちろんですわ。あ、そうそう昴摩、心配しないでくださいね。私わざものをもっていますから痛みをかんじるまもなくあの世にいきます」

沙那姫の言葉に昴摩はひく。螢蘭はそんな昴摩の肩に手をおくとにつこりと笑つていつた。

「大丈夫だ。俺様じきじきに始末してやるからな」

（いや、いや、大丈夫じゃないです）



昴摩は心のなかで返事をかえず。

「昔から宝物に手をだすとどうなるかは相場がきまっていますからね」

鬼柳はそんな昴摩においつめるようなことをいう。しかし、人事ではなくなる爆弾が投下されることをこのときの鬼柳はしらなかつた。

「そうですね。非業の最期というのは物語の常等ですしね」

投下五秒前。

「そうだ、そうだ。宝物には番人がいることを忘れるなよ」

投下四秒前。

「ではここでの番人は螢蘭様と菜稚琉様ですかね」

投下三秒前。

「あら私も忘れてもらっては困ります。沙那姫も紅葉様の意向にそぐわないようなことは許しませんからね」

投下二秒前。

「まあ、私は大丈夫ですよ。紅葉様を大事におもってますから。でも、夜叉様はどうでしょう?」

投下一秒前。

「ああ、オレが紅葉を傷つけるわけないだろう」

「そうでしょうか? 今回のことはどうだったんでしょうね」

「どういうことだ」

爆弾発射。

「あ、そうそう。ふたりにいっておくが私はまだ子はいらないぞ」  
爆発完了。

ふたりは紅葉の言葉に顔をみあわせる。子供のはなしなど紅葉とすることがない。

「ほう、子供がほしかったのか? ふたりとも」

螢蘭のひくい声がふたりの背筋をはいあがってくる。宝物の番人はいまどんな顔をしているか想像しなくてもようにわかる。視界にいれる必要すらかんじない。ふたりは息のあった足取りでかけていく。



このさきの三人の行く末はあえて語らないことにしよう。わかるひとは想像するのは容易いことだろうから書くことさえも鬱陶しい。「子がほしいといわれたんですか？」

沙那姫も怪訝な顔で紅葉にきく。紅葉は首をふるといった。

「いいや、いわれていないが恋をするということはどういうことなのだろう？」

その言葉に沙那姫の表情はいつしゅん迷いをみせる。螢蘭の教育をまじかでみてきた菜稚琉は紅葉のおもいこみに心あたりがあった。「まあ、結果的にはそうかもしれないませんが……」

沙那姫のにこらしたいいかたに紅葉はなにをおもったのか沙那姫にいった。

「そういえば、沙那姫にはわるいことをしたな。子がほしいとおもったからとついできたのに私はいままで子をほしいとおもったことがないから」

「いや、まあ」

沙那姫はさらに言葉をにこらす。子供がほしかったというよりはあなたがほしかったのだが、それをいうのもただ混乱をまねくようなきがしてとどまる。そんな微妙な空気のふたりに菜稚琉は酒瓶を手にとりいう。

「まあ、こまかいことはいいじゃないですか。のみましよう。今日のはんでぐつすり眠って、明日はお休みをもらえるように私が螢蘭にお願いしてみます」

紅葉はお休みがもらえるかもしれないことにしんそこうれしそうな顔をする。菜稚琉に無邪気な顔をむけていった。

「ほんとうに休みにしてもらえるようにいつてくれるのか？」

「ええ、お休みにしてもらいましょう。私もいろいろと螢蘭とおはなしがありますから」

菜稚琉はそういつて紅葉に微笑みかける。紅葉はうれしそうに笑うと酒をぐいっとのみほして菜稚琉から酌をうける。

そんななか螢蘭だけがかえってきた。そして、どかっとならんと杯



をさしだして菜稚琉に酌をもとめる。

「はい、紅葉。もつとのみなさい」

菜稚琉は酒を紅葉にとくとく注ぐ。行き場のない自分の杯をそのまにさいど催促したが、みごと無視される。かわりに沙那姫がそいだ。そんな菜稚琉を尻目にみながら螢蘭はいう。

「紅葉、明日からしばらく休みだ」

「どうしてです？」

自分がきりだすまえにそういった螢蘭に菜稚琉がきく。しかも長期休暇をおわせるようないかただった。螢蘭は質問にこたえるまえにぐいっと酒をのむといった。もう決定しているとわかるいいかただった。

「紅葉の屋敷ごとここに引越した。屋敷ごとだとそうだな一月はかかるだろう。一月やすみをやる」

紅葉の目が複雑な光を宿す。長期休暇は素直にうれしいが、いっしょに住むのは正直びみょうだった。勝手きままな生活が、お山大将のような地位を剥奪されるような気がするのだ。しかし、口ごたえを許してくれそんな雰囲気ではない。紅葉はひとつ提案をだす。可決されればみつけもの。

「三日に一度は休みをくれる？」

「ああ、やる。引越すれば三日に一度やすみをやるよ」

紅葉は螢蘭のふたつへんじにきをよくしてうれしそうにわらった。  
(三日に一度も休みがあるならわるくないかも)

そうおもつと満更でもない。紅葉はうれしくなつて沙那姫に杯をさしだし酌をねだる。しかし、沙那姫は杯の口を掌でかくすといった。

「飲みすぎは迷惑のもとですよ」

「まだ大丈夫だ」

「いいえ、いけません。さあ、もう寝ましょう」

沙那姫はそういうと紅葉を寢床へと導く。菜稚琉と螢蘭はそんなふたりをみおくった。そして、ふたりだけがのこされる。



「ああ、そうそう。螢蘭、すこしおはなしがあるんです」

菜稚琉の声音と表情に螢蘭の酔いはいつきにひく。そして「はい」と返事をかえした。

まだまだ春の夜にはほどとおい夜の帳のつめたさに背筋が凍ったのかと勘違いしてしまいそうな一瞬だ。月明かりにうかんだ顔が能面のような美しさをたたえていてなんともいえない。さて、いちばん最強なのはだれでしょう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3118e/>

---

綺語草子～草子シリーズ3～

2010年10月8日14時44分発行